

始



新刊一用書

オキンスーパー使用書

特111  
958



オランダ  
使用書



オキシヘラー全圖

(原形の約三分の一)



1910年10月

## 序 言

凡そ説を樹つるに當りては、必ず事實を根據とせざる可らず。徒に理論に拘泥し、習慣に囚はれ、事實を蔑如に附するが如きは、其本末を誤まれる甚しきものなり。

予が初めて磁氣應用の一治療器を知り、其説明書なるものを閲讀したる時の感想は、該器が果して其效力を有するものなりや、又人體組織に對して、此一小器械がしかく著しき反應を與ふるものなりやを疑へり。殊に急性慢性の多數疾病に對し、専門家に頼らず醫藥を用ゐずして健康を得べしとは、苟も常識を有するものゝ、容易に首肯する能はざる所にして、今日初めてオキシヘーラーを使用せん



主會の前用使械器



主會の後用使械器

とせらるゝ人にありても、必ずや同様の感あるべきを信ず。

然るに予は、當時偶々骨髄炎を再發し、實際に使用する機會に逢著して九死に一生を得、又昨年二月保全堂療院を開設して以來幾多の研究と實驗を重ねたる結果、全く前日の疑惑を一掃し、該器が健康の増進に、完全なる效力ある事を確認したり。

茲に於て予は、専らオキシヘーラーの發明に苦心し、其及ばざるは幾多専門家の教導を仰ぎて得る所あり、遂に本春三月初めて之を製作し、其後屢々斯道の經驗者に試用せしめて實驗したるに、オキシヘーラーの作用が健康の基調を養うて、根本的生活力を振起するに、優良の治療器なりとの稱讚を博するに至れり。

オキシヘーラーは、予の永き實驗上、凡ての疾患に對するのみな

らず、健康者亦之を使用して、最も有益なる療器と云ふべく、而も藥物の如き副作用なく、之を使用するため更に病者に苦痛を與ふるが如きことなきは、何人にも斷言するを憚らず。然れども予は元來醫家にあらざるを以て、從て一々病を診して之を使用せしめんとするにあらず、その健康の大本たる生活力を喚起して、病の由つて來る缺陷を絶たんとするに過ぎず、即ち、身體の健康を増進せしめて疾病の自ら去るを期したるものなり。唯吾邦にありては、是等の理學的療法の日尙淺く、僅に識者間に是認せらるゝに過ぎざるを以て是非の論、未だ一定せざる所なきにあらざるも、一度之を實際に應用し各自に體驗する所あらば、何人も瞬間にして、血壓、脈搏、呼吸、體溫等を調節し、生理的著明の反應を自覺目撃するを得ん。若

し幸にして、之が果して人生の福音家庭の幸福たる事を思はゞ、常に新知識を得るに躊躇せざる我國人として、決して雲烟過眼視する事能はざるべし。

吾人は此所感に基き本邦に於けるオキシヘーラーの創製者となり廣く之を江湖に推奨せんと欲す。本書説く所は未だ全く盡ざるものありと雖も、要はオキシヘーラー通有の應用知識を概説せんとするものに過ぎざるを以て、世の本器使用者は、有無相換ひ長短相補ひて、應用を全うし、著者の微衷を容れられんことを。

大正三年八月

著 者 識

## 序

オキシヘーラーに偉大なる不可思議の力あることは、健康に異常ある人が、若干の月日間之を使用し其效驗あるを認めて後初て覺知し得べきものにして、今日の學術程度を以てしては何等斯力を檢定し得べき手段方法の存するあるなし。是れ皮相上人をしてオキシヘーラーの實效に疑を抱かしむる主要の原因なりとす。然れども人若し氣温の高き夏期に於て一夜は原器を氣温の儘に放置し、治療圓盤を身體の某部に装して就寢し、一夜は原器を氷塊に埋めて同事を反覆せば、假令人々其箇體性の爲めに感覺に於て甚しき相違はあるにせよ、何人と雖も必ずや多少の感應あることを知らるべし。予や

本器の使用既に三箇年を重ねたるもの、本器の感應に對しては極めて鋭敏となり、導線兩端に於ける溫差の身體に感ずる反應の程度は明瞭に之を辨別し得るに至れるが、此感應は恐らく何人にも同一なるべし。

オキシヘーラーの此力なるものは果して何物なりや？ 同器の構造が磁鐵鑛を主要とし之に銅及他の貴金屬を巧妙に配合せりと云ふ點より觀察すれば之を磁力又は電力に歸せざるを得ざるべし。磁力とすれば普通世に知られたる磁氣檢定法として、鐵に對し何等かの感應なかるべからず。又電力とすれば殆んど餘蘊なき迄に精緻を極めたる電氣學術上の檢定裝置に對し、何等かの應驗なかるべからず。然るに同器は此兩者に對し何等オキシヘーラーの力の存在を示すに

足るべき標徴を呈するなしと云ふ。是れ學者の見地よりして同器效力の疑はれつゝある第二の原因なりと雖も事實に於てオキシヘーラーが能く醫藥の及ばざる漫性恆久の宿痾を醫し、健體に對しても前述の如き感應ある以上は是非共之に對し事理の説明なかるべからず。然るに何等の手段方法を以てしても其科學的證跡を擧げて説明し得ざるは抑も何が故なりや？ 予は遺憾ながら磁氣に對する學術の程度が未だ之を説明し得るの域に達せざるに歸せんとす。

コバルト及亞鉛を以て構成せる裝置の兩端に寒熱の溫差を與ふる時及銅線螺旋の中央に磁鐵を急動するときは共に電氣を生ずるが如く、オキシヘーラーも其構造の近似せる所より微弱なる電氣なるべしとの想像も浮ばざるにあらざるも、各種の電氣計は毫も之に感ず



る所なく且つ人體に及ぼす感應の全然電流の夫れと相違せる事實を以て如何に微弱なるものとは云へ、電氣を以て論ずべきものと解するの餘地なし。果して電氣にもあらず又ラヂウムの如きエマナチオン作用にもあらずとせば、世に知られたるエネルギー範圍を以てしては之を磁力の奇現象なりと解せざるを得ず。蓋し磁力の學說に對しては予の寡聞未だ電氣の夫れの如く世を満足せしむるに足るべき説明あるを聞かず、磁氣學の研究更に一層の發達を遂げて眞理を得るに至らば、或は地球の兩端に存する磁力の如きは、地球存在上缺く可らざる生命たるやも知るべからず。何んとなれば宇内の森羅萬象は何物と雖も無爲無益に現存するものなきは自然の大則たればなり。地球の磁力果して其生命たるものならば其上に生存する動物も

亦之と何等かの關係なかるべからず。之を詮ずればオキシヘーラーの起死回生的不可思議の力は愛用者の迷信的神經作用にあらず、今日の人智未だ之を説明し得ざるものと解し得るの理あり。

現代に於ける科學の進歩は實に驚くべきものありて一方より之を見れば殆んど自然を凌駕するが如き概なき能はざるも、大自然より達觀すれば世は尙暗澹の裡にありと云はざるべからず。卑近の例を以てすれば彼の催眠術の如き、現象としては事實之を疑ふの餘地なきも科學は未だ之を説明し得ざるにあらずや。更に透視術の如きに至りては其眞否さへ未だ之を斷ずるを得ざるが如き類殆んど枚擧に遑なかるべし。予は理學に關しては門外漢にして之に對する斬新の知識を有せざるも以上述べ來たれる所により、予はオキシヘーラー

の怪力を以て磁氣に因める一種のエネルギーの發動するものと信ぜんと欲す。

這般エネルギーの人體に及ぼす影響は、オキシヘーラー治病實驗例に於て予の詳述せる所なるを以て茲に之を再びせざるも、尙一言したきは凡そ動物に生命ある以上幼壯老は免るべからざる生存上の徑路なり。人生に就て概觀するに初の二十五箇年は生長期にして即ち成形期なり。第二の二十五箇年は現狀維持期にして其以後は老衰期即ち減耗期なり。動物體を構成せる諸細胞は常に新陳代謝して永久渝ることなきものなるが、動物體が何故に斯の如き徑路を取るものなるやは人の能く窺知し得ざる神祕に屬すべき所謂超學理的ハイパーサイエンティフィックの事ならむも、畢竟體内に生ずるエネルギー活動の消長に歸する事を

得べし。然らば之と同性若くは近似のエネルギーの補給は老齡者にありては其身體の衰退を防ぐ可く、幼壯者にありては一朝生理的機能の順調を過りて病態に赴かんとするを遏止回復せしむるの效力あるものと解するを得べし。其生理學者は人の生命を論じて若し人の生涯に於て新陳代謝機能順調を得て過つことなければ、人は能く百五十歳の生命を維持し得べきものなりと云へり。オキシヘーラーをして果して予の信ずるが如きものならしめば、之が適法の應用は前言之偽はらざるを證する唯一の機關たるを得べきか。聊か所信を記して序に代ふ。

大正七年晩春

## 序

予は、醫學及醫術に於ける全く門外漢にして、又生理學に於ても無知識なれば、素より病理生理に就て言を爲すの資格あるものにあらず。然れども之を古人に聞く、氣血調はざれば百病生る、と、これ何人と雖も其事實なることを否まざるべし。而して生體內には自然治療なるもの盛んに行はる。即ち吾人一旦病に罹るも生體內に血液は酸素を供給し、肉體の組織に分解作用を起し、其自然力が疾病を癒すものなることを知るものなり。

予三年前腦溢血症に罹りたるも、今は幸に治癒したれども豫後神經衰弱を起し、健康従前の如くならず怏々日を送れり。然るに客年

一日前島獨笑翁父子相携へ、予が中野の草堂を訪はる。互に寒暄久潤を述べ翁曰く此頃都下に来る。今回は足下の健康を十分ならしめんことを期すと。予曰く、予發病以來こゝに三年、病は已に癒えたるも、健康未だ十分ならず。到底醫術の能くする所にあらず自然療法に待つの外なしと自覺し、爾後息心の調和を専らにし、僅に健康を維持せり。然ども別に最良の方法あらば請ふ之を聞かんと、翁オキシヘーラーを手にして曰く、有り大に有り此オキシヘーラーは兒震太郎が一大苦心を以て發明する所、即ち酸素療器なり。之を用ゆる數月持續倦むなくんば足下の宿痾必ず癒え、且健康の昔日に勝ることあらん。請ふ疑ふ勿れ。其效用と實驗は之を震太郎に聞け、と於是若前島氏懇切に説明する所あり。予之を聞くと同時に思半ばに

過ぐるものあり。是他なし所謂自然療法なるものにして、唯だ其自然力を旺盛ならしむるものなることを確信せり。爾來之を使用し未だ三月を出でずして體量七百匁を増加し、漸く心身の爽快なるを覺ゆるに至れり。予已に親しく之を實驗し其效力の顯著なることを認めたれば、爾來予が一家老若を問はず、皆之を使用すると共に、友人知己にも推奨したるに、皆其效力の空しからざるを賞揚せり。

因に、前島氏は仙臺の人にして、獨笑翁は齡八十夫人亦七十を超ゆ、共に鶴髮童顏鑠鑠として、その強健壯者を凌ぐものあり。オキシヘーラーの發明者たる賢息震太郎君は、生來虛弱にして殊に弱年骨髓炎を病み憔悴枯瘦元氣沮喪廢疾の人とならんとせしも、今や豐頬剛健活躍の人となり、齡五十を超えるも其容貌猶ほ青年の如し。予

屢々同家に往來す、翁媪周旋兒孫繞膝嬉々和氣堂に滿つ、予同家に入る時は眞に仙境に遊ぶの思あらしむ。予は同家とは四十年來の交際あり。然るに東西索居相見ざる事多年なりしが、客秋端なく相會するを得たり。獨り翁媪及震太郎君の強健なるのみならず一家一族強壯にして、一人として醫藥に親しむものなしと云ふ。是皆オキシヘーラーの偉大なる效力を實際に徴するものなり。予も亦實驗に依り此療器は治療的に衛生的に其效力の顯著なることを確信し、之を社會に推奨するに吝ならざるものなり。茲にオキシヘーラー使用要説再版印刷に際し、予が實驗を記して之が序となす。

大正乙卯歲 清明節

島 郁 太 郎

## 第二十版發行に際して

予がオキシヘーラーを創製して、其效力を江湖に提唱せし以來既に十年の星霜を経たり。本器の使用簡單にして而もよく隨時隨處に自然の生活力を喚起し、自ら疾病を驅逐するの效果は、多數の實驗を經るに従つて益々的確なることを明にし、今や日に月に愛用者の數は激増して、内地は勿論その聲價は遠く海外に及べり。既に英吉利、北米合衆國、佛蘭西、西班牙、中華民國の各政府より特許登録査定證を交附せられたるも、これ全く本器が衛生保健の方面に於て最も理想的なるものとして證明されたるものと云ふべし。

今回第二十版の發行に際して、積年の研究上本器の根本的なる要

訣を能ふ限り詳説し、又應用上不備なる點は一々加除改訂して、何人の實驗にも便ならしめ、行文の晦澁なる所は成るべく平易に簡潔に叙述することに努めたり。

然れども予は常に會務の繁劇に忙殺され、此事のみに従ひ得るの閑乏しきため、本書を以て完きものとは云ひ難きも、幸に毎年再度發行のオキシヘーラー小冊子は本器愛用者諸彦の實驗を披瀝したる尤も權威ある實驗例なれば本書の及ばざる所を償うて餘りあり。故によく之をも参照せられて本器を適法に熱心に使用し、所期の目的を達せらるゝことを希望して已まざる所なり。

大正十二年四月

著 者 誌

# オキシヘーラー使用書目次

## 第一章 總 論

一 オキシヘーラーとは何ぞや……………	一	八 オキシヘーラーの反應……………	三二
二 オキシヘーラー (Oxyhealer) と命名した理由……………	四	九 オキシヘーラー特殊の効果……………	三五
三 オキシヘーラーの由來……………	六	健康者の脈數と年齢表—體溫の變動と脈數表—脈波整調圖—呼吸—體溫—健康者の體溫と年齢表—血壓—健康者の血壓と年齢表—血壓試驗表—發汗—皮膚—皮臭	
四 オキシヘーラーの發見……………	一〇	一〇 オキシヘーラーの反動と休養……………	六五
五 オキシヘーラーと自然力……………	一六	休養と使用—休養に要すべき時間—反動中の徵候	
六 オキシヘーラーと醫藥……………	二一		
七 オキシヘーラーの構造……………	二七		

## 第二章 オキシヘーラー使用法

一 使用法……………	七〇	ニ オキシヘーラー使用法則……………	七二
全身療法—局所療法—導子接觸法		第一法活動者—第二法平常強壯なる者—第三	

法平常虛弱なる者—第四法衰弱者—第五法慢性病(一)—第六法慢性病(二)—第七法急性病(一)—第八法急性病(二)—小兒嬰兒

三 オキシヘーラー使用上の注意事項：七七  
 使用する場所と時—獨臥—換氣—入浴—酒精—藥物併用—食物—睡眠—運動—導子の移動—高地及寒地に於ける使用法—綿綿—原器を

### 第三章 使用細説

- 一 オキシヘーラーの使用範圍……………九一
- 二 心臟病……………九四
- 三 パセドール氏病……………九六
- 四 瘰癧……………九八
- 五 不眠症、神經衰弱、生殖器衰弱、貧血症……………九九
- 六 頭痛……………一〇二
- 七 神經痛、坐骨神經痛、神經炎……………一〇三
- 八 急性及び慢性癩麻質斯並に痛風……………一〇六
- 九 水腫、白腫、陰囊水腫、靜脈腫……………一〇七
- 一〇 肺炎、流行性感冒……………一一〇
- 一一 感冒、氣管支加答兒、肺結核……………一一三
- 一二 喘息……………一一六
- 一三 肋膜炎……………一一七
- 一四 胃腸病……………一一九
- 一五 黃疸……………一二一
- 一六 膽石……………一二二
- 一七 腹膜炎……………一二四

浸す容器—オキシヘーラー消毒法

四 オキシヘーラー感作力の調節……………八三

五 局所療法に用ゐる熱濕布及冷濕布……………八六  
 局所用熱濕布—熱濕布使用法—熱濕布製造法—冷濕布—冷濕布製造法

- 一八 盲腸炎……………一二五
- 一九 便秘……………一二八
- 二〇 痔疾……………一三〇
- 二一 耳下腺炎……………一三〇
- 二二 實扶的里亞、格魯布、百日咳、扁桃腺炎、喉頭炎、其他各種咽喉の炎症……………一三二
- 二三 虎列刺、小兒虎列刺、霍亂、下痢、赤痢……………一三五
- 二四 腸室扶斯、バラ室扶斯、黃熱、マラリヤ熱、其他一般に發疹を伴はない熱性病……………一三七
- 二五 猩紅熱、麻疹、痘瘡其他一般に發疹を伴ふ熱性病……………一四〇
- 二六 皮膚病……………一四三
- 二七 丹毒……………一四五
- 二八 癩病……………一四六
- 二九 脚氣……………一四七
- 三〇 腦溢血、腦充血、腦貧血、日射病……………一四八
- 三一 腦性、脊髓性、及び末梢性痲痺……………一五一
- 三二 小兒痲痺、脊髓炎、腦脊髓膜炎……………一五四
- 三三 骨膜炎……………一五七
- 三四 骨髓炎……………一五八
- 三五 敗血膿毒症、尿毒症、產褥熱……………一五九
- 三六 腎臟炎、其他の腎臟疾患……………一六二
- 三七 糖尿病及び尿崩症……………一六四
- 三八 膀胱加答兒、攝護腺炎及び遺尿……………一六六
- 三九 膀胱結石……………一六八
- 四〇 花柳病……………一六九
- 四一 耳科病……………一七二
- 四二 眼病……………一七四
- 四三 鼻腔の疾病……………一七五
- 四四 口腔病……………一七七
- 四五 婦人病……………一七九
- 四六 小兒病……………一八〇

四七 藥劑中毒……………一八二

四八 その他種々の疾病……………一八三

### 第四章 附 說

- 一 局所器官療法……………一八七
- 二 オキシヘーラーと難治症……………一八九
- 三 オキシヘーラーを賞用すべき機會……………一九一
- 四 オキシヘーラーと活動者……………一九四
- 五 オキシヘーラーの特徴……………一九六  
有效無害—奏效神速—使用簡便—入費不要—  
 獨立自衛—有效期間—應用自在
- 六 オキシヘーラー保存法……………二〇〇

- 七 オキシヘーラー修繕法……………二〇四
- ◇ 醫家用オキシヘーラー……………二〇八
- ◇ 動物用オキシヘーラー……………二一〇
- ◇ オキシヘーラー局所療法用導子……………二一一
- ◇ オキシヘーラー及び附屬品正價表……………二二一
- ◇ オキシヘーラー獎勵會の提供……………一八六

### 挿 圖 目 次

- 一 全身療法圖(導子を手頸足頸に著けたる圖)
- 二 オキシヘーラー全圖(甲)(乙)(構造を示す)……………二八、二九

- 三 ダツゼオン脈波計……………三八
- 四 脈波整調圖(健康者、心臟病、肺結核の脈波)……………三九

- 五 脈波整調圖(喘息の脈波)……………四〇
- 六 同(神經衰弱の脈波)……………四二
- 七 同(關節炎の脈波)……………四四
- 八 同(ヒステリーの脈波)……………四五
- 九 同(禿頭病の脈波)……………四六
- 一〇 同(脱腸の脈波)……………四七
- 一一 同(肺尖加答兒の脈波)……………四八
- 一二 リパロツチ血壓計……………五七
- 一三 導子を手頸と足頸とに接觸したる圖七〇
- 一四 導子に繃帶を補足したる圖……………七一
- 一五 寒暖計……………八三
- 一六 原器を冷却する容器及方法の圖……………八五
- 一七 オキシヘーラー使用の局所圖解……………九三
- 一八 肋膜炎全身療法圖……………一〇八
- 一九 盲腸炎局所療法圖……………一二七
- 二〇 咽喉用導子を使用したる圖……………一三三
- 二一 耳科用導子を用ゐたる圖……………一七二

- 二二 眼科用導子を用ゐたる圖……………一七四
- 二三 鼻科用導子を用ゐたる圖……………一七六
- 二四 小兒の感冒全身療法圖……………一八一
- 二五 導子に酸化物の附著する所を示す圖二〇〇
- 二六 導子の破損し易き箇所を示す圖……………二〇一
- 二七 導子雌捻上の導線の切斷せると、せざるとを示す圖……………二〇二
- 二八 導線の酸化切斷せる状態を示す圖……………二〇三
- 二九 オキシヘーラー全圖(導線の切斷し易き所を示す)……………二〇四
- 三〇 分解器圖……………二〇五
- 三一 導線修繕圖(導子の部)……………二〇六
- 三二 同(上(原器の部))……………二〇七
- 三三 醫家用オキシヘーラーと分解器圖……………二〇九
- 三四 動物用オキシヘーラーを馬に使用したる圖……………二一〇
- 三五 局所療法用導子圖……………二二三—二二一



オキシヘーラー使用書目次 終

索引病名

胃腸病(消化不良)……………一九	遺尿……………一六六	陰囊水腫……………一〇七	ろノ部	肋膜炎……………一一八	は、ば、ぱノ部	肺炎……………一〇	肺結核……………一一三	バラ窒扶斯……………一三七	パセドー氏病……………九六	白腫……………一〇七		
敗血膿毒症……………一五九	にノ部	日射病……………一四八	ぼ(ばう)ノ部	膀胱加答兒……………一六六	膀胱結石……………一六八	へ、べノ部	扁桃腺炎……………一三二	便秘……………一二八	とノ部	痘瘡……………一四〇	ち、ぢノ部	腸窒扶斯……………一三七
痔疾……………一三〇	中耳炎……………一七三	りノ部	流行性感冒……………一一〇	癩瘰……………九八	わノ部	黄熱……………一三七	黄痘……………一二一	か、がノ部	感冒……………一一三	肝臓病(黄疸参照)……………一一一		

婦人病……………一七九

こノ部

口腔病……………一七七

喉頭炎……………一三二

虎列刺……………一三五

骨膜炎……………一五七

骨髓炎……………一五八

たノ部

坐骨神經痛……………一〇三

産褥熱……………一五九

さノ部

氣管支加答兒……………一一三

し、じノ部

神經痛……………一〇三

神經炎……………一〇三

神經衰弱……………九九

心臟病……………九四

靜脈腫……………一〇七

猩紅熱……………一四〇

腎臓炎(急性、慢性)……………一六二

實扶的里亞……………一三二

耳科病……………一七二

耳下腺炎……………一三一

ひ、びノ部

百日咳……………一三二

貧血症……………九九

皮膚病……………一四三

鼻腔の疾病……………一七五

せ、せノ部

消化不良(胃腸病)……………一一九

小兒虎列刺……………一三五

小兒痲痺(急性、慢性)……………一五四

小兒病……………一八〇

赤痢……………一三五

攝護腺炎……………一六六

喘息……………一六

脊髄炎……………一五四

脊髄性痲痺……………一五一

生殖器衰弱……………九九

すノ部

水腫……………一〇七

眼病……………一七四

脚氣……………一四七

たノ部

糖尿病……………一六四

丹毒……………一四五

膽石……………一二二

そノ部

卒中(腦溢血参照)……………一四八

つ、づノ部

頭痛……………一〇二

痛風……………一〇六

ねノ部

尿崩症……………一六四

尿毒症……………一五九

なノ部

腦溢血……………一四八

腦充血……………一四八

腦貧血……………一四八

腦性痲痺……………一五一

腦脊髄膜炎……………一五四

難聴……………一七二

らノ部

癩病……………一四六

くノ部

格魯布……………一三二

霍亂……………一三五

花柳病……………一六九

やノ部

藥劑中毒……………一八二

まノ部

痲疹……………一四〇

マラリヤ熱(瘧)……………一三七

盲腸炎……………一二五

末梢性痲痺……………一五一

げノ部

下痢……………一三五

ふノ部

腹膜炎……………一二四

不眠症……………九九

第一圖 全身療法



上圖は家庭用  
オキシヘーラー  
の右の手頭と他  
を左の足頭と  
の内側に着け  
た全身療法で  
ある。之は疾  
病の有無を問  
はず談中ても  
臥床中ても歩  
行中ても隨時  
隨所に應用し  
得る簡便な使  
用法である。  
(使用法参照)

# オキシヘーラー使用書

前島 震太郎 著

## 第一章 總論

### 論

オキシヘーラーとは何ぞや

オキシヘーラーは、反磁氣を應用したる物理的治療器である。これを適法に使用すれば本器の無感覺に近い一種の刺戟に依り、忽ち、生體組織の細胞を喚起し、呼吸を深大にして、自ら大氣中の酸素を多量に吸ひ込み、同時に體内の炭酸を次第に吐き出すやうになり、その結果、循環機能は活躍して、強い正しい生活力が行はれるのである。

オキシヘーラーの發する力は、如何なるものであるかは逐次後章に於て説くが、本器は時と場所とに拘はらず、何人にも全く無害のものであるから、大病人でもまた健康者でもこれを用ゐるやうとする人は、第一圖に示す如く、兎に角一導子を手頭に、他を足頭に軽く著けながら、徐に本書全篇を通讀せられたい。さすれば本器の性質、效力、用法等は詳細

に會得せられるであらう。そこに又自己に適應する使用法を見出し、倦まず撓まず熱心に用ゐれば、必ず心臓の運動が強くなり、正しくなり、生理上の調節が行はれ、榮養が回復して自ら健康は得られるのである。

オキシヘラーは、器械そのものだけでは何等の働きを起さないが、これを身體に接觸すると、身體と器械との温熱の差に由つて、初めて一種の力を發するのである。故に、兩者の熱の差大なれば大なる程、益々強い力が發する譯である。これを器械の方から云へば夏季は弱い力を、冬季は自然強い力を發することになる。人體の方から云へば、多血性の人、人は器械に對して比較的感受性強く、貧血性の人、人は鈍いと云ふことになるのである。然し身體に感ずる力が弱いからと云つて、決して反應がないといふ譯ではなく、同時に強いからと云つて電氣や熱や光のやうに、外面から直接身體に刺戟を感ずるものではない。その効力は内面より起る極めて有力なもので、小兒や、衰弱した病人や乃至敏感性の人などは最初の一週間は、毎日の使用に耐へない程の強さを感ずることもあるが、大抵の人に對しては、先づ無刺戟、無感の力と言つてもよい位のものである。さてこの力が生體に傳つて何を營むかと云へば、吾人の生命維持のために、絶えず體內

に働いて居る所の生活體の基本單位である細胞に、一種の刺戟を與へると同時に、同じ細胞の連續である心臓に忽ち波及して、その運動を強く正しくする。その結果は謂ふ迄もなく、血液の循環は良好となり、呼吸は深大となり、半時間乃至一時間の後には、體內に温感を覺えて來るやうになるのが普通である。若し二三時間も経て尙體温の加はるのを覺えない人は、それだけ貧血性の人であるか、或は病が重く募つてゐる人であるから、さういふ場合は原器を碎氷、若くは冷水中に投じて、足頸の導子の上より熱濕布を施し、第八六頁参照)更に熱心に使用を持続すれば、總て同一の反應を自覺されるであらう。斯る作用が體內に行はれるやうになれば、一般の諸器諸臓の活躍を促して、食慾なき人は空腹を訴へ來り、便通なき人は快通し、不眠に悩む人は睡眠し得るやうになる。その反對に食へ過ぎ、飲み過ぎの人、或は軟便頻數し、或は悪夢に襲はれがちで、眼覺悪るくて困る人等も、共によく順調に復して來るやうになる。又、發熱ある人は温の放散が盛になつて解熱し、疼痛ある人は、その炎症が消散して鎮痛し、咳嗽咯痰ある人は、その發作が鎮靜して遂に自ら快癒すると云ふ風に、身體に係る百般の故障は、凡て取り去られるのである。「血氣よく流行して滯らざれば氣強くして病なし、血氣流行せざれば病となる。」と古人の

謂つた眞の健康の基調は、實にこゝにあるのである。

## ニ オキシヘーラー(Oxyhealer)と命名した理由

オキシヘーラーの語原は、英語の Oxygen と Healer の二字を新に組合せたもので、これに酸素療器と云ふ意味を持たせたものである。本来から云へば本器は磁氣療養器とも稱すべきものを、何故かく命名したか、次にこれを説かう。

一體吾人の生活力なるものは、何物であるか、又何に依つて起るものか、これは容易ならぬ問題であるが、概説するに、凡ての動物には、新陳代謝といふ極めて大切な機能がある。この機能が完全に働いてゐるときは、誠に健全な生活が営まれるが、何かの原因でこの働きが鈍つて來るか、或は働きがその度を過ぎると、忽ちにして生理上の順調を失ひその和が亂れて、榮養が衰へ、こゝに健康の障礙は萌芽するのである。これは恰も石炭が燃えて熱となり、光となり、化して電氣となり、器械力となるやうに、動物の攝れる食物は、酸素の力を藉り燃焼して體温となり、腦力となり、筋肉となり、その他生活を維持する總ての生活力となるのである。これ新陳代謝は、生命の發する樞機であつて、生活

力の生ずる原因である。この新陳代謝は何によつて起るかと云ふに、食物より攝る炭素と空氣より取る酸素との化合、即ち燃焼作用より生ずるのである。故に新陳代謝を盛にするには、獨り、食物を攝取するだけでなく、多量の酸素を攝取することが、また必要である。酸素が多量に攝取されて、新陳代謝が盛になれば、生活力は愈々増進する。生活力が増進すれば、抵抗力は従つて強くなり、自然良能は喚起されて、病あれば、これに打勝ち病なきものは、愈々無病健全となり、即ち若返つて、延命長壽を贏ち得るのである。

オキシヘーラーは、器械の中に酸素を貯藏して居るではなく、又その中より發生させるでもないが、本器獨特の作用は、生體固有の自然力を喚起して、自然と人體の調和を促して、血行機能を強く正しく働かせるから、その結果は謂ふまでもなく循環作用を良好にして、肺や皮膚の呼吸運動を促進し、體内に酸素の吸収を多くし、且つ容易ならしむるのである。酸素の供給が増加すれば、自ら燃焼作用が盛になつて、炭酸瓦斯の排泄を完全に行はねばならぬため、愈々體内に酸素の必要を感じて來る。實に、酸素は生活上缺くべからざる必要元素であつて、これあるが爲に生活は營まれ、これが缺乏を來たせば直に生活力は衰へて、遂に疾病を醸し、甚しきは死を招くと云ふことになるのである。

彼の貝原益軒は『呼吸は人の生氣なり、呼吸なければ死す』と云ひ、又生理學の泰斗ボーローは『生活とは酸素の缺乏を防禦する不斷の奮闘なり。』と喝破してゐるが、實に古今東西を論ぜず、哲人は悉く呼吸と酸素とが、生存上同一無二の必要條件であることを云つてゐる。かく酸素が生存上必要條件なることは、何人も承認する處であるが、然もこれを體內に攝取することは頗る困難で、古來幾多の方法を以てしても、その效果の實際に見るべきものはなかつた。然るにオキシヘーラーの作用は、從來の方法と全然相違して、酸素を注入するのでもなく、又無理に呼吸せしむるのでもなく、たゞ身體の機能を活躍して、何人の體內にも自然と必要だけの酸素が攝取され、同化されることに依つて、生理上の調和が行はれるのである。その調和作用の生活上に有益なることは、後章に於てこれを説くが強い正しき生命は、多量に酸素を吸収し、これを體內に同化せしむることに依つて發生し得られるのである。これ本器を酸素療器と名付た次第である。

### 三 オキシヘーラーの由來

オキシヘーラーが、一種の酸素療器であることは、前項に述べた通りであるが、本療法

の由來は、西曆一八三二年頃英國の化學者にして且つ物理學者たるマイケル・ファラデーが反磁氣の應用により、熱磁氣の感應と稱する自然療法を發見せるより始まつたのである。ファラデーは實驗學者の泰斗で、凡ての研究は皆實驗に基かねば止まざる概があつたから、本療法に關しても、三十六年の久しき間、よくその研究を續けられたといふがその間、偏狹なる反對者に遭遇したり、或は放浪の境遇に墮ちたりなどして、惜哉志を遂げずして世を去つた。爾來幾多の研究家が輩出したが、いづれも完成するに至らずして止むだのは、畢竟、科學上の知識が、未だ大自然の力を十分に闡明するまでに進歩してゐなかつたのと、その實驗なるものも、未だ十分識者を肯定せしむるまでに完成してゐなかつたのに外ならないのであらう。

元來ファラデーの説に據れば、生體と酸素とは、同じく磁性分に富み、一は陽性で、他は陰性であるから、同性相反撥し、異性相牽引する磁氣學上の原則により、生體は常に酸素を牽引するものであると云ふのである。然し生體が酸素を牽引するといふことは、生體が常に健全状態であつて、即ち陽性であらねばならぬが、若し生體が不健全の状態即ち病的状態にあるときは、身體は陰性となつて酸素と同性のものに變ずるから、同性相

反撥するの原理により、生體に酸素を牽引する力が衰へるのである。かくて體中に酸素が缺乏すれば、遂に生理上の違和を生じ、延いては、種々の疾病を醸成するのである。然るにその生體に對し反磁氣を應用して、これに熱の差を與ふれば、陰性であつた病的機能は忽ち變りて陽性になり、より多くの酸素を牽引する。これ生理上の違和を去つて、健康を回復せしめるのであると云ふのである。

この説を讀んで、如何にもその當を得たもののやうに思はれたので、私は自分で實驗して試みやうと云ふ氣を起したのである。尤もその頃、自分は不具癡人であつて、醫師からは、既に不治の宣告さへ受けてゐた身體だから、これを實驗するには至極好機會であつたそれに以前讀んだことのある貝原益軒の養生訓を思出したのである。其中に「呼吸は人の鼻より、常に出入する息なり、呼は出づる息なり、内氣を吐くなり。吸は入る息なり、外氣をすふなり。呼吸は人の生氣なり。呼吸なければ死す。人の腹中の氣は、天地の氣に同じくして、内外相通ず。人の天地の氣の中にあるは、魚の、水中にあるが如し。魚の腹中の水も、外の水と出入して同じ。人の腹中にある氣も、天地の氣と同じ。されども、腹中の氣は、臟腑にありて、ふるくけがる。天地の氣は、新しくして清し。時々鼻より外氣を

多く吸入るべし。吸ひ入るゝところの氣、腹中に多くたまりたるとき、口中より少しづつ、しづかに吐き出すべし。あらく早く吐き出すべからず。是、ふるくけがれたる氣を吐き出して、新しき清き氣を吸入るゝなり。新きとふるきとかふるなり。是を行ふ時、身を正しく仰ぎ、足を伸ぶべし。目をふさぎ、手をにぎりかため、兩足の間去る事五寸、兩ひざと體との間も、相去ること、各々五寸なるべし。一日一夜の間、一兩度行ふべし。久しくしてしるしを見るべし。氣を安和にして行ふべし。」とある。これ養生の道には、全く唯一の方法であらう。私も幼少の頃には、數度それを實驗して試みたこともあつたが、當時の私の體質は、甚だ虚弱で、到底遂行する丈の根氣がなかつたのである。然るに、今圖らずもフラデーの説を見、これ誠に自然の療法に適したものであらうと思つた。自力に依つて呼吸を深大に行ふこと能はざるものが、他力を以て酸素を吸引することは、格別の努力を要せずして出來べきものと思つたのである。尙私 は多年の病中の經驗上、何ものかが體中の血液の循環を強く盛に促進せしむるものがあるならば、きつと自分の病は解決するに相違ないと云ふ自信もあつたので、直にその夜より實驗して見たのである。私は數度の體験に於て確に磁氣の生體に及ぼす感應が、吸酸作用を活潑にして、生の根本を養ふ力あるこ

とを認められたのである。

こゝに於てフアラデーの磁氣感應説と、益軒の呼吸法とは要するに略同一の目的に歸するであらうと思つたのである。勿論、磁氣と云ふ自然力を以て、吸酸作用を盛にすること、自己の努力に依つて吸酸作用を盛にすることは、元より方法に於て兩者に難易の差があるのである。従つて前者は、何人にも應用され、後者はそこに相當の制限あることは免れないことである。尙兩者の相違ある點は、後章に於て、更に述ぶる所あるが、私は生來羸弱の餘り、種々の自然療法を採用する内に、圖らずもこの器械を發明して、命拾ひをしたと云ふ端緒は、全く兩者より出發したのである。

#### 四 オキシヘーラーの發見

私は生來極めて病弱の質で、既に九歳の春、左脛骨の腐骨症に罹つて切開數度に及び、遂に歩行困難に陥つた。十七歳の夏、更に急性腹膜炎に冒され、九死に一生を取り止めたと思ふ間もなく、翌年の夏は肺炎に罹り、咳嗽咯痰頻に發して、容易に癒えなかつた爾來極度の神經衰弱にかゝりて半ば癡人に等しく、實に生き甲斐なき歲月を送つて居たと

ころ、四十歳の頃より骨髓炎又復發作して、切開手術を受けること數度に及んだ。殊に在米中に行つた最後の大切開のために、遂に起居困難に陥つて、室内さへ二本の松葉杖にたよらねば歩めぬ程の不具者となつたので、大正元年十二月、總ての望を絶つて歸朝したのである。然るに歸朝後或る親戚の家で、はしなくも加奈太製のオキシゼネレーターと云ふ治療器を奨められ、先づその説明書を読んで大に動かされ、早速、これを試用してみたところ三四日の後どうやら效力がある様に思はれたので、半信半疑ながらその使用を續けたすると漸次食欲が盛になる、睡眠が安らかになる、便通が快くなる、従つて氣分の爽快を覺えたので、私は初めて特殊な療法の効果を知り、益々熱心にこれを用ゐると、四十年來内外の名醫を煩して來た痼疾も、不思議にも次第に快方に向つたのである。否、單に疾患の局所が癒えたといふのではなく、一般の健康状態、即ち食欲、睡眠、便通等が頗る順調に行はれ來たのである。曾てはメキシカン・インデアンなど、緋名された程の暗黒の皮膚色も、少々づづは剥けて紅味を呈し、全身の活力、漸次加はるのを覺えたのであるこの器械の作用に依つて、私が甚しく感動されたことは、僅々旬日ならずして食欲、便通睡眠等が漸次順調に行はるゝことを自覺したことである。前述の如く、私は四十九歳のそ



の時に至るまで、幾多の病歴を有して居り、且つ遂に不具癡人とまでなつた當時の身體に食慾を増し、便通をよくし、又よく熟睡することが出来るやうになつたことは、實に異常の力と云はねばならぬ。常に人は病を知つてその病苦のみを免除せんとするに焦慮せらるゝが、私は病氣の經驗上、寧ろ病を知るよりも、その食慾、便通、安眠等が如何にして順調に行はるゝかを多年の間、少なからず苦心したのである。然るに圖らずも、この器械に依つて、容易にその目的を達し得らるゝことに、大に、興味を有するやうになつたと同時に是等の作用を有する器械を造つて試やうと云ふ、希望を懐くに至つたのである。これより日夜實驗と研究と、又その材料の蒐集に苦心して、漸くオキシヘーラーを發明するに至つたのである。故に本器の發明は、専ら自己の體験と、近親に實驗して得た結果とを捉へて遂にこの結晶を得たに過ぎないので一々學理的に論ずることは、未だ十分とはゆかないが磁氣の作用が全く現代の學理を超越した、何人も豫期しなかつた特殊の反應を有することは、後章説くところの脈搏、呼吸、體溫、血壓等の具體的に調節する事實に徴しても明瞭である。これらの生活現象が本器を使用して、瞬間に調節されるといふことは、とりも直さず細胞の働きが喚び起されて、同時に心臟機能の強く正しくなつた證據で、磁氣作用

唯一の效果である。

かく心臟さへ強く正しく働けば、吸酸除炭の作用が盛になり、生理上の調節が自ら行はれて、容易に健康は保證されるのである。故に、本器の事實は、理論を是非するよりも事實は餘り明瞭である。尙その證據としては、私の父は今年八十八歳の高齡で十一年前酷い萎縮腎に悩まされ、全身浮腫して室内の歩行さへ困難に陥つたが、オキシヘーラーを使用した結果は、その難病もいつとなく癒えて、今は白髪でこそあれ、常に鏗鏘として壯者を凌ぐ健康である。母も亦七十九歳の老齡で動もすれば肺炎を病み、その都度呼吸困難に陥るのであるが、斯る場合も、オキシヘーラーの大力使用で忽ち回復し、今尙健全である又私の妻は痼疾の心臟瓣膜病で、十一年前には全く瀕死の衰弱状態であつたが、これ亦日夜の器械使用で、爾來三日と就牀することがないやうになつた。その他長男の結核性肋膜炎も、長女の脂肪過多から來た腦病も、次女の盲腸炎も、皆本器發明當時に於ける不幸中の幸とも云ふべきもので、皆獻身的試驗の材料となつたが、實に一滴の藥物も要せず餘り人の厄介にも成らず、たゞ本器一つに據つて、美事健康を回復したのである。

彼のシヨペンハウエル等の哲學書に引證してある下級動物に關する實驗に據れば、蝸牛

の頭を切りとつても生きてゐて、一週間もたてば新しい頭が出来、觸角さへ生へてくるし、又龜の頭を截つても延髓さへ残して置けば、三週間は生きてゐるし、牝鶏の大脳を断ち去つても、十箇月間は生きて居て生長した。と云ふことは心臓さへ働いて居れば、首がなくとも脳髓に破傷があつても、直接死因とはならない。それから肺に及び心臓に影響して始めて死ぬるのであることを語つてゐる。又私が曾て米國ユタ州ガーフィールドで目撃したことは、日本の一青年が Oxy-Bin (鑛粉を貯藏する處) に埋没して、數百貫以上の重量もあらうといふ鑛粉の下敷となり、五六時間後に掘り出されても生命は助かつたのである。勿論一時は全く人事不省となつたが、そのビンの底から微な風が入つて來るので蘇生したのである。これも心臓さへ丈夫で呼吸がどうにか通つて居れば、その人は容易に死ぬものではないといふ證據である。私自身は前にも云つた通り、生來實に多病虚弱で、醫藥は勿論、有ゆる療法に及ぶ限りの手を盡したにも拘らず、四十一年間と云ふものを徒らに病苦に悩まされてゐたのは、従來の醫術が、生命の根本を閑却した局所的、外部的の對症療法に過ぎないからである。

自分が數十年來の痼疾と苦闘し、その體驗に依つて發明したオキシヘーラーは、身體の

何れの處に接觸するも自分の骨髓炎切開後の瘡りかけた肉芽は、目醒めた様に生々となり暗黒色を呈してゐた肉は、見る／＼、鮮紅色となる如く、循環機能を促進せしめ、一般的には、半時間乃至一時間を出でざるに、手足又は腹背に温感を催し、何んとなく自から爽快を覺えて來る。これ皆心臓機能が強實調整して、吸酸除炭の作用が盛になつた結果に外ならない。これ即ち如何なる疾病も驅逐し、體質さへも改善し得る力なのである。尚、オキシヘーラーの内容、構造、效力等に關しては、愛用者諸賢の勧めもあり、先年各國政府に、專賣特許を出願したところ、既に英、米、佛、西班牙、中華民國等の各政府より左の通り特許證を交附された。

- |      |               |          |
|------|---------------|----------|
| 英 國  | 千九百十八年十月三十日附  | 第一二〇一七六號 |
| 米 國  | 千九百二十二年七月四日附  | 第一四二一五六號 |
| 佛 國  | 千九百十七年十一月一日附  | 第四八五九四號  |
| 西班牙國 | 千九百十七年十月十八日附  | 第六五二八九號  |
| 中華民國 | 千九百十九年十二月十八日附 | 第一九八八六號  |

## 五 オキシヘーラーと自然力

醫術の進歩藥物の發見、而して衛生的設備の完成等は、近代科學の發達と共に益々多きを加へながら、人類の健康は、却てこれに逆比して益々虚弱となり、病魔の跳梁は愈々甚だしいといふのが現今の状態である。古より病と云へば直ぐ薬といふ風に、總て病は薬によらねば治らぬやうに思つてゐる。彼の腹痛の時、モルヒネを注射すると腹痛が治るといふが、それは眞に治つたのではなく、モルヒネの痲醉によつて一時苦痛を紛らしたまでに過ぎない。窒息死に瀕せるヂフテリヤの小兒に、血清を注射すると蘇生するといふが血清はたゞその細菌を殺すだけで、死にまで瀕した身體の衰弱には格別の效もないやうである。その他切開手術の如きは甚だ巧妙の進歩を示したと謂はれてゐるが、實はその弊害の見るに堪へないことが屢々ある。現に扁桃腺、鼻腔病、瘰癧、盲腸炎、痔疾、子宮病の如きは手術したからと云つて決して元通り回復するものではない。切開後は却て一般の健康を害して困つてゐる人は随分多いやうである。然るに一回二回と云はず甚だしきは四回も五回も貴重な肉體に手術を加へる人があるが、その人の一般健康状態は、必ずそれだけ遞減さ

れてゐることが確である。要するに藥物や手術は、一時的局部的外面的のもので、直接に體内の諸器諸臓を働かして、内面より根本的に疾病の原因を絶つ力のものではない。たゞ一時を彌縫して自然治癒を俟つ手段方法に過ぎないので、健康の根本たる生活力を喚び起して生命を養ふためのものでは決してない。近來漫性病のため生命を失ふものが夥しく益々増加する傾向のあるのは、皆この一時的局部的療法の結果に外ならないので、人生の慘事これに過ぎたるものなく、實に國家の一大損失と言はねばならない。故に歐米各國では大にこの點に憂慮し來り、衛生保健に一新革正を畫せんとしてゐると云ふことである。古來醫術は、治療の術として知られて來た唯一の方法であるが、今や文化の向上は各自の反省と自覺を促し、治療方法も漸くその面目を一新せんとしてゐる。これは一オンスの豫防は一ポンドの治療に優ると云ふことが既に明白になつて、醫師は衛生學の教師となつたり、或は工場の衛生監督となつたり、或は會社の體格検査員となつたりして、個人衛生を實施すべき地を見出さんとして居る。普通の開業醫すら時としては、健康者から病氣になつてから治して貰はんよりは、寧ろ病氣に罹らぬやうにしてくれと頼まれることもある。又近來靜坐法、深呼吸法、轉地療法、森林學校、氣候療法、日光療法、食餌療法、水治療

法、X光線療法、ラヂウム療法、跣足療法、戶外睡眠療法、無藥療法、姿勢療法等の類が世界到る處に普及せんとするなどは、所謂人體自然の調節作用を助けて健康の根本を養ふ自然療法に就かんとする傾向を示して來たよい證據である。現に吾々が目撃した米國の或大病院の如きは、殆んど藥物を用ゐないで専ら自然に放任し、患者を終日屋外に出して太陽直射の下に曝露し、食事もそこに運び、日没と共に室内に入れて横臥させ、偶々強き便秘でも來たした時に、下劑などを服ませる位で、結構病氣は癒えるのである。又吾々が睡眠不足で頭痛がしたり、消化不良に悩む時などに、一日の閑を野外に養へば、直に頭が軽くなり、腹が空いて、元氣が回復するなどに見ても、自然の力の貴重なる難有味がわかるであらう。

磁氣と動物との自然關係に就ては、前にも述べた如く、未だ科學上の確説は聽くことが出來ないにせよ、我等の棲息する地球そのものが、恰も一塊の大なる磁石の觀をなしその南北兩端に於て、明に磁極を示して居ると云ふことから推しても、人體が磁力から何等かの感作を受け、影響を蒙むらに居るといふ筈がない。現に人間は満潮時に生れ來て、退潮時に死ぬと云ふこと、又出血の場合もそれと同様に、満潮時には止り悪く退潮時には止り

易いと云ふことは何人も周知のことである。或は昔の學者が心臟は一種の磁石であると言つたことは、根據のない譯ではない全く不思議の力である。その他、枕を北向けにして眠ると安眠し易いと云つた實驗者もあり、母が幼兒を抱き寝すると幼兒の生氣即ち磁力が母體に吸收されるから、その發育に障礙を及ぼすと云ふ事も眞實のやうである。或は印度あたりの婦人が好んで用ゐる璫も、その昔は腦の沈靜を保つため磁石を以て造られてあつたが、今は單なる裝飾品となつたと云ふこと、或は婆羅門教では病氣になると首だけ地上に出して胴體を地中に埋める療法があること、或は動物が一度病氣に冒されると、好んで匍匐し、必ず腹部を土に著けること、或は南極探險で有名な英のスコット大佐の越年隊の一老人が、極地の困難に處しながら、その白髪が却て黒髪に變じて居たと云ふことなどは決して傳説や習慣とのみ見るべきではなからう。近く私の知人で、北緯四十度の極地に數回の探險を試みられた人の實話によれば、極地に近くに從ひ呼吸、消化、排泄等の作用が著しく活潑となり、暖地にあつては寧ろ脆弱を嘆ずる體が、不思議にも、極地に進むに従つて元氣になると云ひ、尙海中には種々の生物盛に繁殖し、陸地では、凡ての草木が僅か一二箇月で花笑ひ實結ぶといふ程の迅速なる發育状態を示し、既に有名なる世界の三大漁

場は、皆この極地に近き處にあつて、その繁殖力の盛なることは、到底温帯地方や熱帯地方の遠く及ぶ處ではないと云ふことである。勿論、是等は地球兩極に存する磁力の感作の結果とのみは一概に断せられないにしても、以上の話をよく綜合穿鑿すれば、自然磁力と生物との間に、必ず何等かの交感あることは、争ふべからざるものと思ふ。

斯く自然磁力が動物、植物と云はず、一般の生物と密接の關係を有することは、宇宙の法則であらうが、未だこれを闡明し得るに至らないのは全く人智の爰に進まざるに歸するより外はないのである。吾がオキシヘーラーは、私が病苦の餘り偶然にもこの自然磁石を應用してみたのが、幸にその效力に於て何人も企て及ばなかつた事實を發見したのである。この自然力を應用した本器の作用は、生體組織の細胞を刺戟すると同時に、心臓にも忽ち波及して、その運動を強く正しく働かすのである。これ、身體調節の機關たる諸器諸臓は個々に分立して存在するものでなく、特に高等動物になればなる程絶對に分立存在を許さないのは既に學說の認むる所であるから、その基本單位である細胞が働き出せば、他の諸器諸臓は期せずして従つて活躍し、生活力は振起して一般の健康が増進されるのは、明な事實である。前項の超科學的不思議の力も傳説も習慣も、オキシヘーラーをよく實際に應

用してみると、その力の略々合致してゐることがわかるのである。本器のこの反應は最初は十分に感知せざる嫌なきにあらざるも、少しく辛抱して實驗せられれば、聽て必ず諸氏の眼前に現はれ、その理論を超越したる大なる力、即ち、自然と生體との離すべからざる連鎖なることを發見さるゝであらう。

## 六 オキシヘーラーと醫藥

前項に説いた如く、オキシヘーラーは、物理的に生活體の基本單位である細胞を刺戟し循環作用、呼吸作用を盛にして、生命の根本を養ふところの器械である。これを略言すれば、本器は器械的に身體の活力を喚び起して、自然に生理的の調節を営ましむるところの匡正器である。故に、従來行はれ來つた醫藥療法の如く、専ら、その局所のみを癒さんとするを目的とするものではない。前にも云つた血氣よく流行して滯らざれば、氣強くして病なし、血氣流行せざれば病となる。と古人が謂つた如く、常に血氣をよく流行せしめて、少しも滯らざらしむるにあるのである。故に醫藥は疾患あつて、始めてその必要を認めるのであるが、オキシヘーラーの使用は、疾患の有無に拘らず、健康の良否を論せず

何人が何時これを使用するも、たゞ、身體の調節作用を促し、生理上の違和を去らしめて榮養を回復し、自然の生命を助け養ふところの、絶對無害なる健康療法である。勿論オキシヘーラーは疾患のある場合、その局所に應用すれば、直にその局部にも反應を呈すると同時に、全身にも亦均しく作用するものである。即ちその力は全體に作用するものであるが故に、局所の疾患に對しても、作用することになるのである。尙局所の疾患に對しても從來の醫藥の如く、悉くその病源を穿鑿して一々異つた名目の下に、その方法を講ずる煩ひなく、何病を論せず、殆んどその使用法は同一であるといつてよい。これ本器は全身に使用しても、局所に使用しても、その刺戟は必ず心臟に波及して生理的にその運動を強く正しく働かすから、血液の循環は盛になり、呼吸は大きく深くなりて、總體的には全身の生理機能が活潑になつて、食慾、便通、睡眠等が何れも順調に行はれ、局所的にはその血管を擴大し、血行を促して局所の酸化吸力を盛ならしめ、疼痛を緩和し、興奮せる神經を鎮靜し、緊張せる筋肉を弛緩せしむる。故に、生理上の違和は自ら調節せられ、局所の疾患の如き、治せずして自ら驅逐されるのである。故に本器使用に際しては疾病の有無及び種類の如きは敢て問ふところでない。實に本器は病を治して後、健康を求むるの目的

でなく、直接に生活力を強く正しく働かし、榮養を回復し、その病勢に打克つ丈の抵抗力を強め自ら病根をして去らしむるのである。然しオキシヘーラーと雖も、或は直に病勢を挫き、病苦を除き難き場合もあるのであらうが、本器の作用が生理上の調和作用を喚び起す限り、その効果の決して無反應に終ると云ふ筈はない。假令數分間乃至一時間の使用に於ても、第四圖(第三九頁)より第十一圖(第四八頁)に現はれたる如く、脈搏の調整すること、又第五九頁に見る血壓の調節する如く、心臟の運動が刻々に強く正しく行はれるやうになれば、その榮養状態も從つて回復して來るので、如何なる難治の疾病も遂に驅逐せられざるなく、更に體質までも改善されるのは、生理上當然の歸結である。或は本器の作用は疾病の種類によりて從來の醫藥を以てするが如き、速效を見難しと思ふ人もあらうが、實際は瞬間にして萎靡した生活力を振作し、亢奮した機能を鎮靜せしめて意外なる速效を現はすものである。大學に、其本亂而未治者否矣、其所厚者薄而、其所薄者厚未之有也。と、實に千古の格言である。

何故に、本器の力は、かく他と異つて居るかと云ふに、身體の基本單位である細胞が働き出し、次に組織が働き、次は器官が働くと云ふ風に、順次に諸器諸臟が正しく働くので

生命あるものは何人もその反應を認めざることなく、又決して有害を認むる様な不自然な作用はないのである。例へば病的に血圧の高き人に對しては、これを下降せしめて血管の硬化を緩らすことが出来、反對に低き人に對しては、これを生理的に上昇せしめて血液の流行を、尙・層盛ならしむることが出来る。又心臟機能の亢進して居る人に使用すればこれを鎮靜し、その微弱なる人に應用すればこれを強實にするなど、その調節作用が如何なる場合にも、容易に完全に行はれるのである。若しこの調節作用が體內に正しく行はれる限りは治病は勿論、健康法は決して根本的に解決さるべき譯のものではない。前章に云つた慢性病の如きはそれで、即ち本の亂れを正さずして末のみを治めんとするのである。吾オキシヘーラーは生理的調節を目的とし、如何なる場合にも、その生活力を喚び起す所のものであるから、これを急性病に應用すれば、忽ちにしてその違和を調へ速かに健康を回復し、又これを慢性病に應用すれば、使用の度を重ねるに従つて、一回は一回と生理機能を調節し、榮養を回復して、遂に病根を驅逐し去るのである。若しその調節作用が少しも行れず、生活力が弱つて榮養を回復することが出来なくなつたならば、苟且の病氣も、延いて不治の難症となり、遂には生活力が絶えるのである。オキシヘーラーの如く

簡單然かも徹底的に心臟機能を調節する力は、懸て正しき生活力を喚び起す力となるから、健康者病弱者を問はず、進んでこれを用ゐれば、全く從來見ざるところの根本的の自然療法が行はれるのである。

從來慣れ來つた醫藥療法も勿論、全然無効と云ふべきではないが、私の如く殆んど四十年間、幾回となく左脛部に切開手術を行ひ、骨を抜き肉を去り、且つ腹膜炎、肺炎等の大患に數度悩まされて、衰弱に衰弱を重ねたる身體は、擧げて悉く病的ならざるはなかつたので、内外幾多の名醫を煩はして、如何程服藥を続け幾度か手術を施したけれども、全く一時的局部的療法に止つて多年の病苦を取去る程の著效を認めず、常に半病人たるを免れなかつたのである。然るにこれが癒えたと云ふのは、本器使用に據つて、その萎靡した生活機能が喚起され、血液循環が良好になり、燃焼作用が旺盛になつて、新陳代謝が滞りなく行はれ、總體的に榮養が回復して來たからである。私の疾病は斯くして癒え、遂に今日の如き健康無比の體格に改善されたのである。これは決して偶然でも奇蹟でもない。又私獨りばかりの回復力でもない。凡そ生活力を根本的に解決せんとするには、皆その本を正さなければ末の正しかるべき筈はないのである。例へば植物にしても、枝葉にある

疾患を除かんとして、そこにのみ、種々の方法を講ずるも、決して回復するものではない。寧ろ根幹を培養し、發育を盛ならしむれば、枝葉の疾患の如きは手を下さずして自と消え去ることは、斯道に經驗あるもの、よく知るところである。

然し従來の療法として、皆これを目的として苦心研究されたもので、決して生活力と云ふことを閉却した譯のものではないが、大體は化學作用に依つて對症的に局部的にその故障を取去るだけで、最初から根本的に學理的にその内臓より生活力を喚び起し、自ら體內の化學作用を盛にして、榮養を回復する所のものではない。世に不治の疾病に悩み、懊惱煩悶する人は、差當り一度本器を試用せられよ。その生活機能を内部より活躍し、榮養を回復して、大いにその回復期を早め、又根本的に疾病の解決を期し得るであらう。尙本器と藥物の併用は勿論有害ではないが、本器の作用は、藥物に對しても少量よくその效を奏せしむるから、藥物併用の場合は、成るべくその量を減せられたい。又醫家に於ても從來の藥物療法のみに頼らず、本器の如き直接心臓に反應を有する療器に、一顧の勞を吝まらずその效力を認めて自家常用の藥餌と併用したならば、世上幾多の病者をして、時日と費用を節約せしめて、その天職を完うせらるゝに、一層の美果を添へらるゝであらう。

吾々は決して新しきを以て誇りとするものではなく、又、利を以てこれを強ひんとするものでもない。或は又從來の醫藥に對して、無意味に反對するものでもないが、前者は直接に生理上に物理作用を喚起して、自ら化學作用を待つもの、後者は化學的作用によつて間接に物理的作用を喚起するものである。徒に、理窟や議論を以てのみ、これを是非せんとするよりも、先づこれを體驗して、本器と醫藥とが、生理上に及ぼす全く異つた効果のあることを、明瞭に知られたいのである。

### 七 オキシヘーラーの構造

オキシヘーラーの構造は第二圖に示した甲乙の如く、横型、豎型の二種ありて、構造は大體次の三部より成る。

- 原器 反磁氣の装置をなしたる金屬性圓壩。
  - 導子 身體に接觸せしむる護膜紐附圓盤。
  - 導線 原器と導子とを聯絡する包装せる銅線。
- 横型には家庭用(F.U.)と動物用(A.U.)とあり、豎型には家庭用(G.U.)と醫家用(S.U.)と

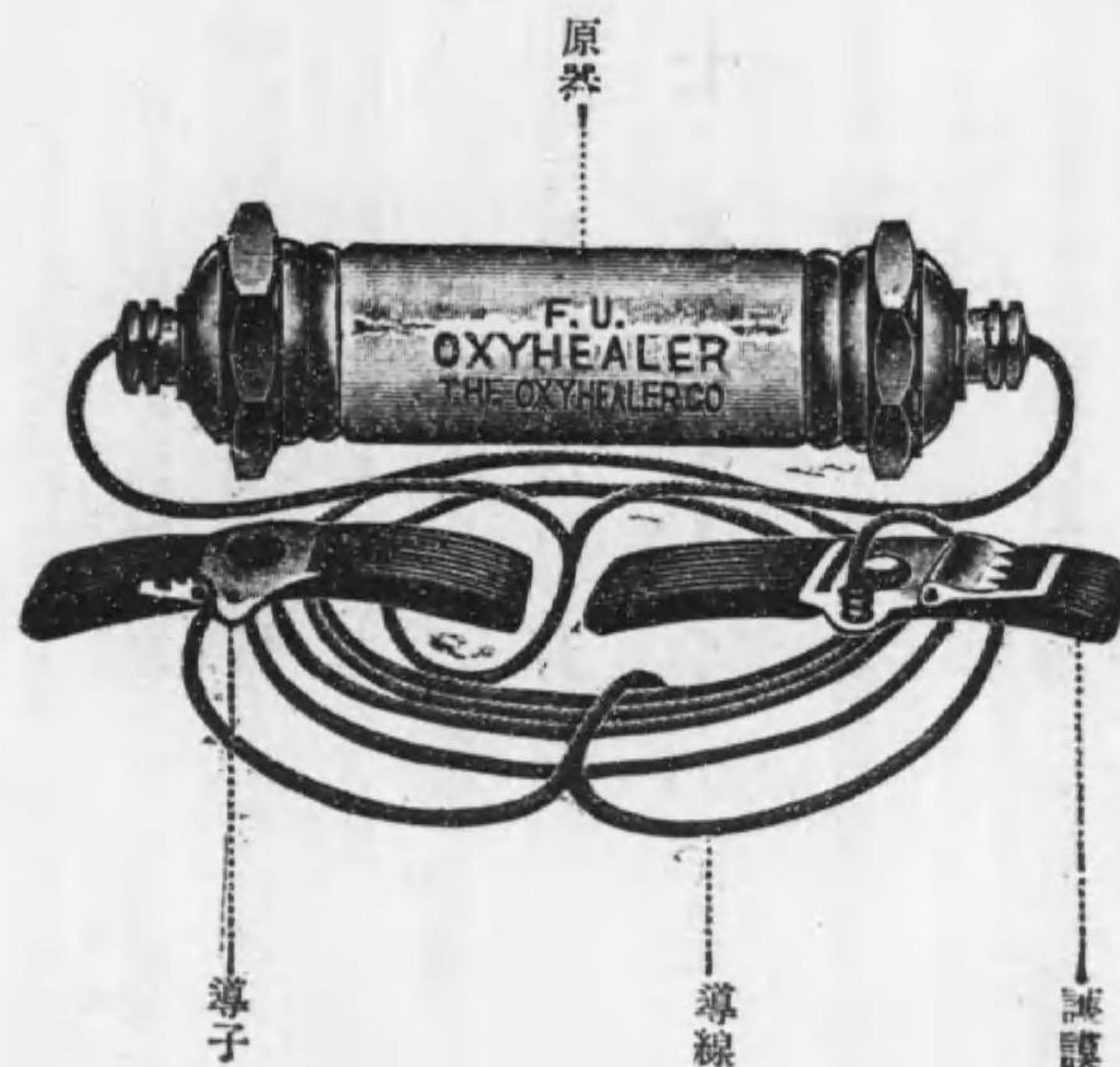


(乙) 圖 二 第  
圖全一ラ一ヘシキオ用庭家型堅



造に關する要旨を説明することにする。  
 横型家庭用の原器は、直径一寸二分(一・四三  
 インチ)長さ六寸(七・一五インチ)の眞鑄製の  
 圓筒の兩端に、鑄物製の帽子狀被覆物を接觸し  
 重量は導子導線を併せて二百匁(一・六五ポ  
 ンド)にして、その構造の要旨は、第二圖の(甲)  
 に示す通りである。  
 原器は封鎖堅牢にして破損の虞れなく、然か  
 も、幾年繼續使用するも、效力の消耗するもの  
 でない。その原器の兩端(堅型家庭用オキシヘ  
 ーラーの原器は、その上部の一端)より發する  
 二本の導線は、長さ一丈一尺(二二二・二三イン  
 チ)にして、身體と原器との距離を適宜に保つ  
 やうに造られてゐるが、その導線だけは使用す

(甲) 圖 二 第  
圖全一ラ一ヘシキオ用庭家型横  
(一の分三約の形原)



ありて、以上の四種類に別れてゐるが、元來その形體は意匠上の相違に過ぎずして、各器の效力と作用は、その内容の装置に於て區別してゐる。即ち横型家庭用(F.U.)と堅型家庭用(G.U.)とはその重量に於て一と一・五の相違あるも、その作用は同一の力なので、老若男女何人にも使用し得るのである。醫家用はその重量に於て家庭用(F.U.)の約二倍半、従つて略二倍程の作用を有してゐる。動物用に至つてはその重量に於て家庭用の五倍に相當するから、その作用の強大なることは勿論である。然し茲には一般に使用せらるゝ横型家庭用(F.U.)を標準としてオキシヘーラーの構

るごとに酸化、切斷することは免れないものである。次に、その導線の先端に接觸する純アルミニウム製の二錢銅貨大の橢圓形をなせる導子は、身體各部に接觸せられるやうに造られてゐる。これが身體と器械とを直接に結び付け相互の冷熱の差によりて身體に特殊の作用を喚び起さしむる接觸點である。その導子の四所に箱入する綿褥は、器械の感作力の傳達を速かならしめ、又その酸化力を保持せんがために用ゐらるゝのである。

尙原器の内容に關しては、既に、英・米・佛・西・中華の五箇國政府から專賣特許を得たが未だ一二未済の國もあるもので、全然これを公開するは聊か差支があるので、茲にはたゞその内容の一部を語ることにしやう。本器は磁鐵鑛末を主成分としてこれに二三の金屬末を配し密閉せる眞鍮製の圓筒内に納めて反磁性體を構成し、その兩端から二本の導線を出しその末端に、各二錢銅貨大の導子が著けてある。その導線は四十二番の銅線にて、これにニツケル鍍金を施して腐蝕せざるやうに造られてある。而して本器の力は電池應用のもの如く一時圓筒内に蓄積して置くものでなく、従つて使用する度に消耗するものでもないから内容物の詰め換へ補充の要はない譯で、全く永久使用してその効力は絶對不變なものである。又オキシヘーラーは磁鐵鑛を主體として成る所から、磁氣檢定上鐵に對して何等

かの感應あるやうに思ふ人もあらうが、反磁氣と云ふのは普通世に知られたる負磁氣の反對の力を出す作用のものであつて、この力を測定する方法は、今日未だ發見されてゐない。これは遺憾ながら磁氣に對する學術の程度が、猶未だこれを説明し得る域に達せざるに外ならないのである。或はオキシヘーラーの構造が、電氣と較べ近似してゐる處より微弱なる電氣なるべしとの想像を抱く學者もあつて、殆んど各種の電氣計を以て試験した時代もあつたが、毫もこれに感ずるところなく、遂に電氣を以て論ずべきものでないと決してしまつたのである。勿論各國政府へ出願した特許に關しても、各國とも同様の疑問を起し、數年間種々の實驗研究を盡されたが、全然電氣の性質を帯びず、又從來知られたる磁氣でもない、特殊の力であることが判明した。この特殊の磁氣裝置に對しては、未だ十分なる説明は下し難きも、身體に及ぼす作用は、從來、見なかつた反應を呈する事實より殆んど七箇年に亙る各國政府の實驗の結果、本器は食慾亢進、溫感増加、催眠作用、排便作用、解熱作用、發汗作用、利尿作用等に顯著の效力あることを認められ、斯の如き發明は全く世を益するものとして特許せられたのである。故に構造の内容効力に關しては、全部本器を信用せられんことを望み、これ以上の説明を避けたい。餘り詳細の説明は徒らに

世に模造品を續出せしめて、何等益する所ないからである。然し學術研究上必要の場合には従来とて敢て秘密を墨守する譯でなかつたが、學術上これを研究せんとする人は、先づ自然に與へられたる生體と磁氣との關係を等閑に附してはならぬ。これを勉めて研究せられたならば、本器の構造の如きは、自ら容易に解決すべきものである。

## ハ オキシヘーラーの反應

オキシヘーラーの刺戟は、これを使用する人の體質の相違によつて、初め一二回の使用では、何等の反應も感じないやうに思はれることが多いが、試みに眼を閉ぢ心を靜かにし無我無心になつて兩手に導子を軽く握れば、一種の微弱な緩慢な刺戟を指頭又は全身に感ずることが出来る。又脈搏の強實、呼吸の深大、靜脈の怒張、胃腸に蠕動の起ること等が約半時間を出でずして自覺されることが普通である。然しその感覺に於ては、人各々強弱遲速敏鈍の差あることを免れないが、感覺の鈍い人でも強度（は八三頁參照）の使用を行へば、必ず反應のないと云ふことはない。殊に抵抗の弱い人が、最初から強度の力を使用するときは、却て悪心を催したり、發汗したり、甚だしきは嘔吐、下痢を催すことさへある

又一般に衰弱した人が、初めから強度の力を使用すると、往々逆上を感じ、或は心悸亢進を感ずることがあるから、斯様な人は、使用中額部を冷やすか、若くは心臓部に冷濕布を行ふことが必要である。或は急性病後の人、又は長病で甚だしく衰弱した人などに於ては最初三四回の使用中は、疲労を感ずることがあり、或は熱氣があつて、久しく解熱しない人などは、最初一二回の強度の使用により、却つて熱を高めることもあるが、使用を續くるに従ひ、漸次發熱時間を短縮し、遂には全く解熱し去ることになるのである。或は打身切創、腫物等に直接導子を著けると、二三分間は實に堪へ難い程の劇痛を感じたり、或は老人小兒にあつては、直に小水を催し、大便を促すこともあつて、その反應は人々の生理状態に應じ千態萬様であるが、晩かれ早かれ決して反應のないと云ふことはない。

爰に身體に關する刺戟と云ふことに付て一言斷つて置くが、元來、生物體は化學的潛勢力に富むたものであるから、假令僅かな刺戟を受けても、その潛勢力が發現して、大なる作用を成すものである。恰も火藥と云ふ化學的潛勢力に富むた物質を銃心に籠めて、僅かの力を、その引金に與ふれば、轟然として爆發するが如きものである。全く、空氣や熱の刺戟は僅かなもので、さのみ身體に感ずる程のものではないが、抵抗力の弱き不健康者に

及ぼす影響の甚大なることは、古來學者の常に研究されて居るに徴してもわかる。オキシヘーラーの刺戟も最初の内は、この空氣や熱の刺戟に於ると同様、極めて輕微なものであつても、内面に及ぼす作用は、遙に偉大な結果を齎すことになるのである。

斯くオキシヘーラーの作用は、人體の根本に働くものであるから、腹痛の時にモルヒネを注射するやうに、速效の現れ難いやうに思ふ人もあるが、實際にこれを使用して見るとものゝ二三時間とたゞぬ内に、却てそれ以上の効果を擧げ得るのである。然もその効果は一時的のものでなく、徹底的に生活力を盛にし、抵抗力を強めて、漸次快方に導くのである。何人も本器を用ゐる場合は、再び病に冒されぬだけの覺悟を以て、成べく持久忍耐が大切である。然るに本器使用中、時に反動の徴候（反動の説明は第六七頁参照）なきにあらざるも、これらは病氣の癒える前兆として、寧ろ喜ぶべきもので、決して恐るべきものではない。たゞ悪性重症の病體に使用した後、器械の修繕を怠り、切斷せる導線、汚損せる導子等をそのまま使用して、少しも反應を認めないと云ふ人も、往々あるやうであるが、常に、本器を使用せられる際は、毎回よく故障の有無を檢查し、若し少しにても故障あれば、直に修繕して使用せねばならぬと云ふことを始終忘れてはならない。（第二〇四頁参照）

### 九 オキシヘーラー特殊の効果

前項に述べたオキシヘーラーを使用しての反應は、本器の生體に及ぼす一種の刺戟より起る直覺的反應に過ぎないのであるが、茲に項を分つたのは、多くの人々の感知せぬ本器特殊の反應である。然も少しく注意を拂へば、萬人に等しく現はれる反應であつて、健康の良否は、皆是に由つて始めて具體的に認識せられる、本器唯一の効果を語る爲である。

脈搏 此れ心臟の一張一縮により、送り出されたる血液の流勢に及ぼす波動である。心臟一縮して心壓増大すれば、血液は盛に動脈管に送り出され、動脈が、これが爲に一時膨脹するが、心臟一脹して心壓減少すると共に、動脈は、その固有の彈力により縮小するこの心臟の伸縮に伴ふ動脈の波動は、これを手頸その他の箇所にて、外部から觸知することが出来る。古より醫師は勿論、多少生理上の知識ある人は、先身體の強弱、疾病の有無如何を知るに、何よりも先にこの脈搏を檢したのである。實に脈搏は人の健否を示す標準であり、又生死さへ判斷せられる分岐點である。彼の體温を見る如きは、健康上、餘程異常あるか、若くは病勢の程度を知る位のものです、朝夕少しでも身體に違和のあること

を知るには、この脈波、脈数の變化、即ち心臓の働き具合を見るのが、最も捷徑である。従來の實驗上、健康體の脈數として許し得べき大體の範圍は、一分間に六十四から七十

健康者	初生	一三〇—一四〇
十一年	十歲	一二〇—一三〇
十五歲	十五歲	九〇
二十歲	二十歲	七八
二十五歲	二十五歲	七二
三十歲	三十歲	八〇

二までと謂はれて居るが、年齢及び體温の變動によりて、差異あることは免れないのである、即ち年齢によると上表の如くである。

これに由つて觀るに、脈搏は年齢と共に減少し、壯年に達して最小値を示し、高齢となるに及びて復た少しく上昇するものである。然るにこの體温の變動によりて現はれる脈搏の最大値と最小値とを比較して、對照したる場合を見れば、即ち左表の通りである。

體温(攝氏)		平均脈搏	最大値	最小値
三七	三八	七八・六	一二四	四五
三九	四〇	八八・一	一四八	四四
四〇	四一	九七・二	一六〇	五二
四一	四二	一〇五・三	一五八	六四
四二	四三	一〇九・六	一六〇	六六
四三	四四	一一一・七	一六八	八八

上の表は、リーベルマイステル氏の熱病患者二百八十名に就て調査した統計であるがこれによると、體温が攝氏で一度上昇するに従ひ、脈數は

一分間に八乃至十増加するやうである。尙脈搏の循環は、健康なる人にあつては、整調したものであるが、呼吸の深淺に隨伴して、起るところの多少の變調は免れない。心臟の病的状態にある人は、特に著しい變調を起すものである。

かく脈搏は年齢及び體温に依りて差異あるものであるが、十五歳以上五十歳までの、人生の活動期に於ける健康者の脈數は、七十二に近いものでなければならぬ。これはよくオキシヘーラーを使用するに従つて、實驗し得らる、生理上の脈數であり、又右の表に見ても、明瞭な事實である。よく世間で聞くことであるが「私は生來脈が多い(又は少い)質である。脈が多く(少く)とも病氣でない」と云つて居る人がある。豈圖らんや、精細に診檢すれば、その人は健康に於て必ず何等かの缺陷を持つて居る。脈數の不正は決してその人の特性ではない。苟くも健康體であれば、その脈數のみが人と違つて多かつたり少なかつたりすることのあらう筈はない。若し脈數に於て過不足ある人が、オキシヘーラーを強度に使用すれば、暫時にして七十二の正しい數に近づくのである。これは獨り健康者のみに限らず、器質的に著しく變化を來たせる人を除くの外は、時日に多少の遲速こそあれ、早きは二三十分晩さも二三時間を出でずして調節せられる。又その調節作用は、獨り

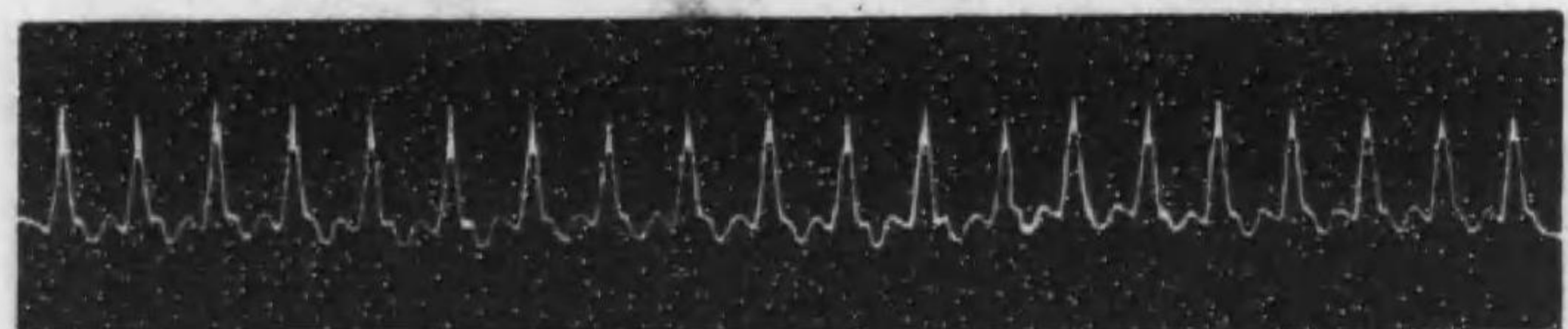
{る依に計波脈のソオゼツダ  
數るたへ算に間分一は搏脈}



(二十七搏脈) 波脈前用使域器子男歳五十五者康體



(二十七搏脈) 後分十三用使力中上同



(五百四搏脈) 波脈前用使子男歳四廿ふ云と病識心



(一〇百搏脈) 後間分十四用使力大上同



(百搏脈) 波脈前用使子女歳二廿ふ云と病識肺

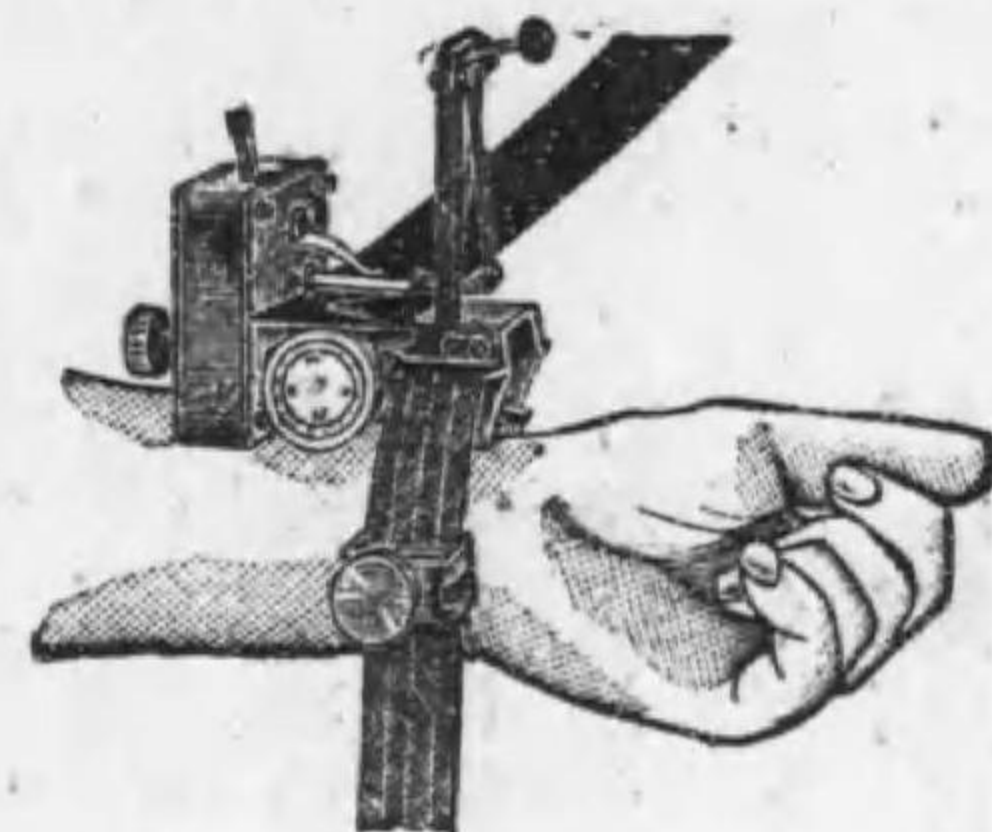


(六十七搏脈) 後間分十四用使力大上同

1  
2  
3  
4  
5  
6

圖三第

計波脈ソオゼツダ



を測つてみれば、何人にも一目瞭然である。茲に第三圖の如きダツゼオンの脈波計を以て脈搏を測つた本器使用前後の脈波圖數種を示して、以上の事實を證據立てやう。

脈數のみに限らず、脈波の性質形狀にも、歴然たる調節の狀を示すことは、幾多の實驗によりて既に明白なる事實である。これ、全くオキシヘーラー唯一の特效であつて、人體に及ぼす磁氣作用の奇蹟的反應である。從來、往々これを精神作用に出づるかか如く思ふ人もあるが、それは強ひて事實を無視し、本器の調節作用を誤解したものである。若しこれを精神作用であるとすれば、脈搏は徒に亢進して病的作用を示し、決して調節するものではないのである。その外運動により、或は興奮劑による結果も、略々皆同一で、心臟の運動を充く強く働かしこそすれ決して規則正しき調節作用は、行はれないのである。但し適當の運動は、健康體の抵抗の強き人にとつては、利益となること勿論であるが、抵抗の弱き病人には、却つて悪い影響を及ぼし、生理上の調節を破るのである。是等を具體的に認識しやうとするには、脈波計を以てその變化の狀態

(き 續 上 同)



7

後 間 分 十 二 時 一 用 使 力 大



8

(百 搏 脈 ひ 整 る 波 脈) 後 間 分 十 三 時 一 用 使 力 大



9

(二 十 九 搏 脈) 後 間 分 十 四 時 一 用 使 力 大



10

(十 九 搏 脈) 後 間 分 十 五 時 一 用 使 力 大



11

(四 十 八 搏 脈 し 靜 脈 く 漸 作 發) 後 間 時 二 用 使 力 大



12

(六 十 六 搏 脈 し 歸 に 靜 平 く 全 作 發) 後 日 二 用 使 力 大 日 毎

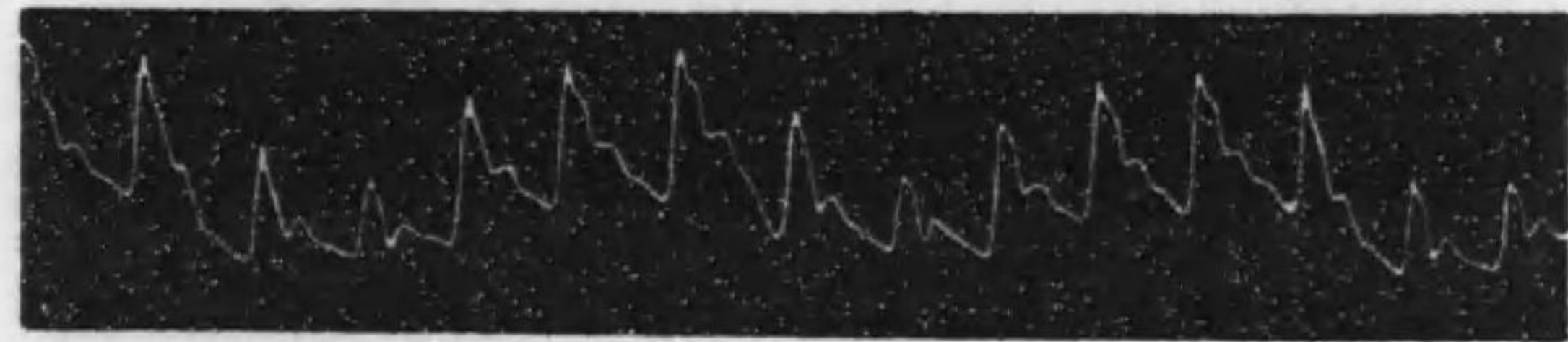
圖 調 整 波 脈 圖 五 第

(波 脈 の 子 男 歳 二 十 四 ぶ 云 と 息 喘)



1

(四 〇 百 搏 脈) 波 脈 の 時 當 作 發 息 喘 即 前 用 使 械 器



2

(上 同) 後 間 分 五 用 使 力 大



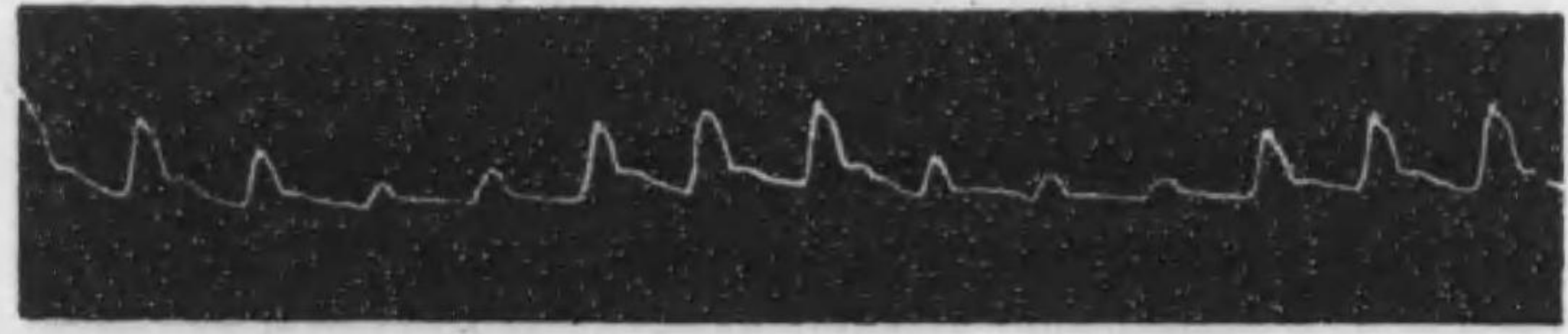
3

(四 十 九 搏 脈 み 止 喘 喘) 後 間 分 十 二 用 使 力 大



4

(脈 動 反) 後 (分 十 三 用 併 布 濕 熱 間 此) 間 分 十 五 用 使 力 大



5

後 間 時 一 用 使 力 大



6

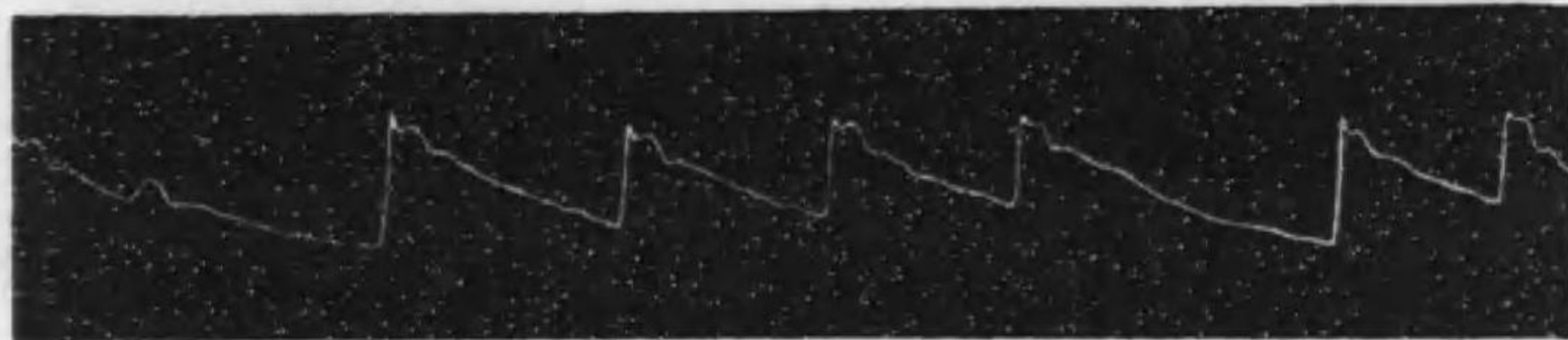
後 間 分 十 時 一 用 使 力 大

(2) 續上同



7

(二十六搏脈) 後間分十三用使力大



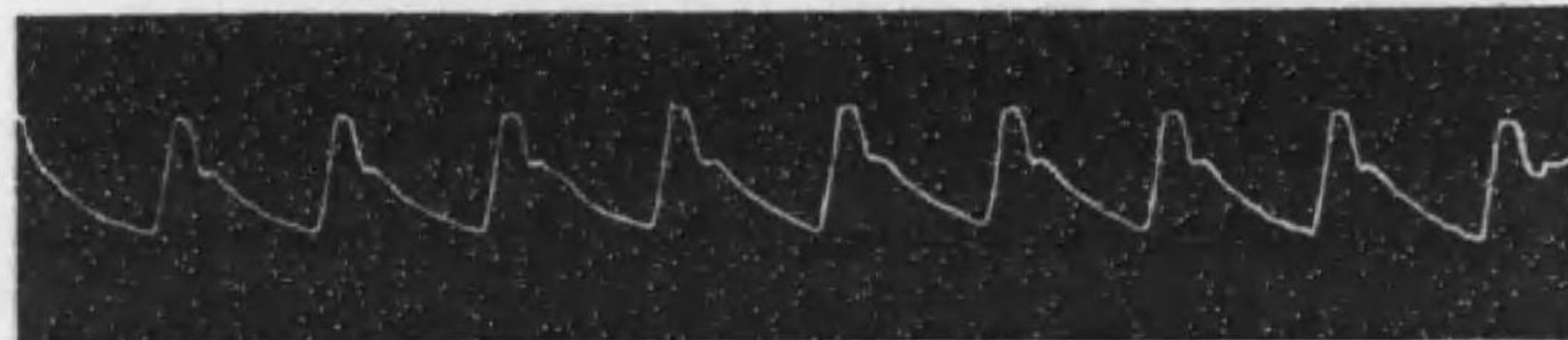
8

後(分十三布濕熱間此)間 時一用使力大



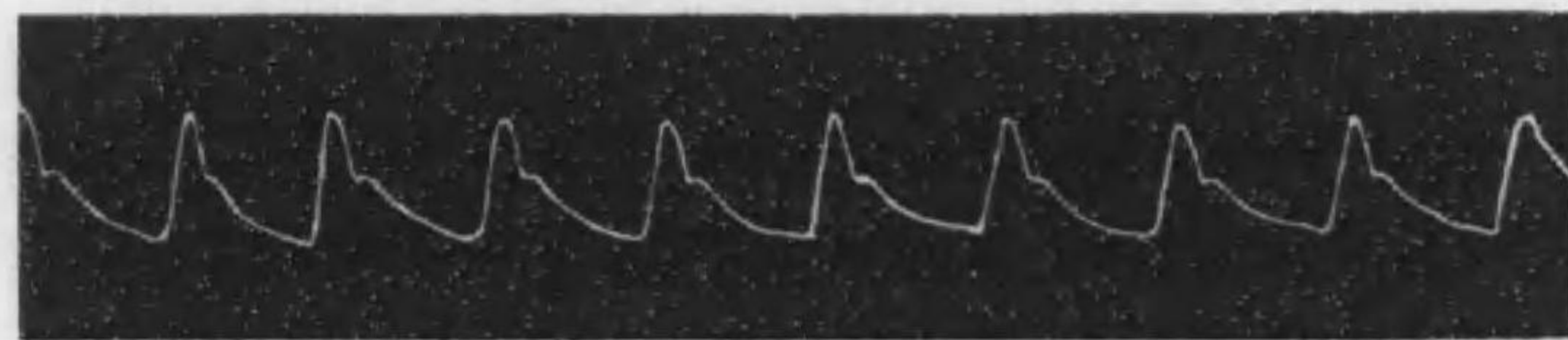
9

後間分五十時一用使力大



10

後間分十二時一用使力大



11

(十七搏脈) 後間分五十二時一用使力大

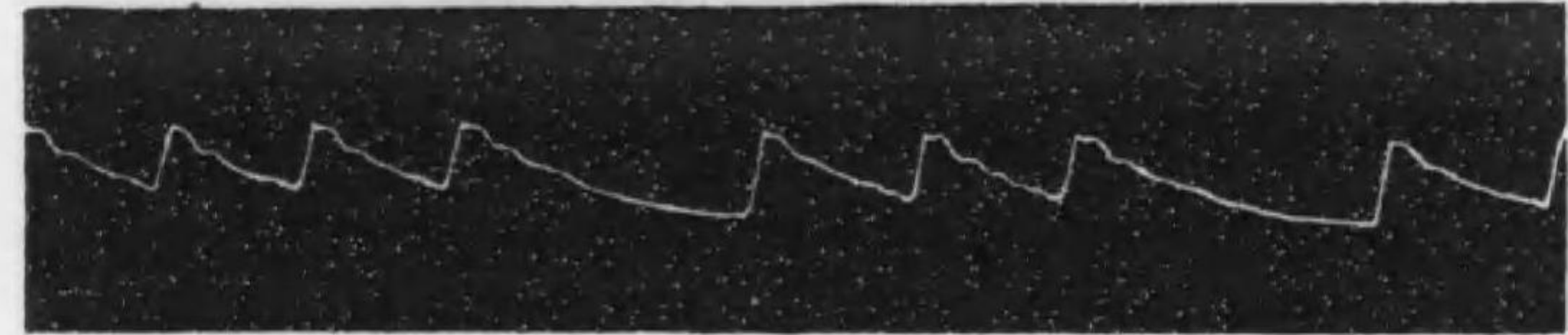


12

(二十七搏脈) 後間分十三時一用使力大

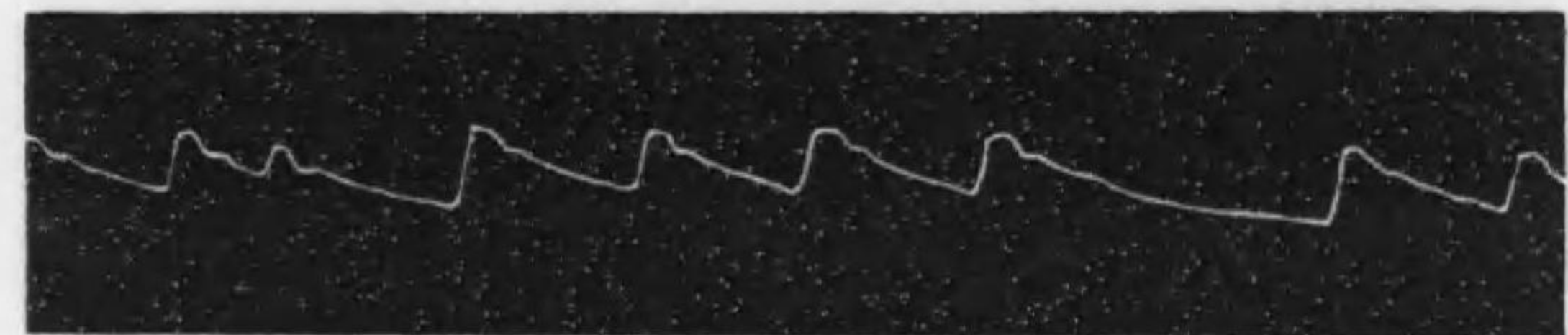
圖調整波脈 圖六第

(波脈の子男歳六十五ふ云と弱衰經神)



1

前るぞせ用使を械器



2

時同と觸接械器



3

後間分五用使力大



4

後間分十用使力大



5

後間分十二用使力大



6

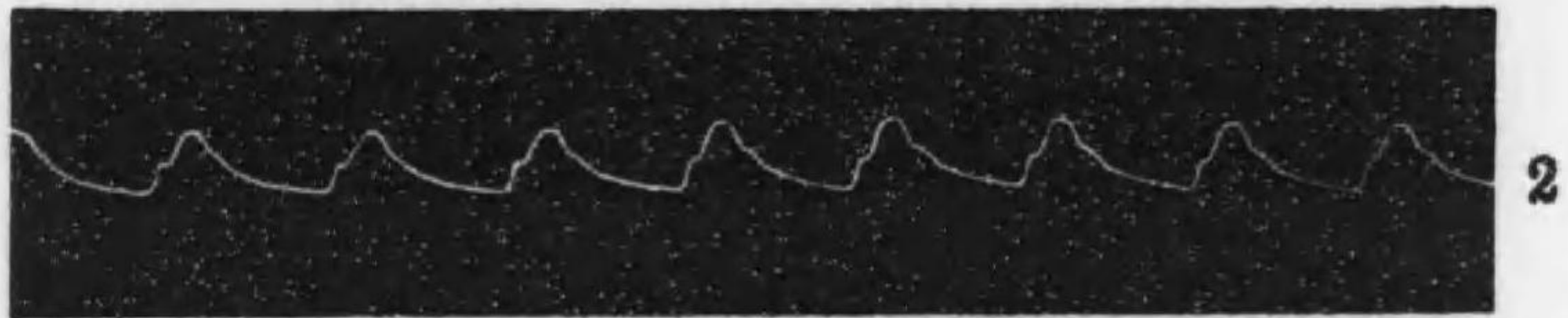
後間分五十二用使力大



圖調整波脈 圖八第  
(波脈の子女歳八十四ふ云とーリテスロ)



(二十七搏脈) 前 る ざ せ 用 使 を 械 器



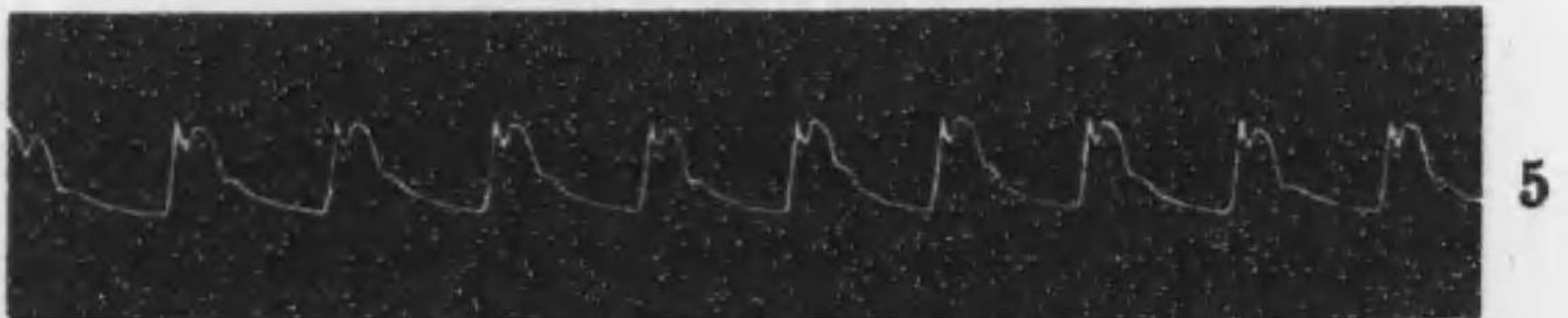
後 間 分 五 用 使 力 大



(十七搏脈) 後 (分十四用併布温熱間此) 間分五十四用使力大



(上 同) 後 間 分 十 五 用 使 力 大



(上 同) 後 間 分 五 十 五 用 使 力 大



(二十七搏脈) 後 間 時 一 用 使 力 大

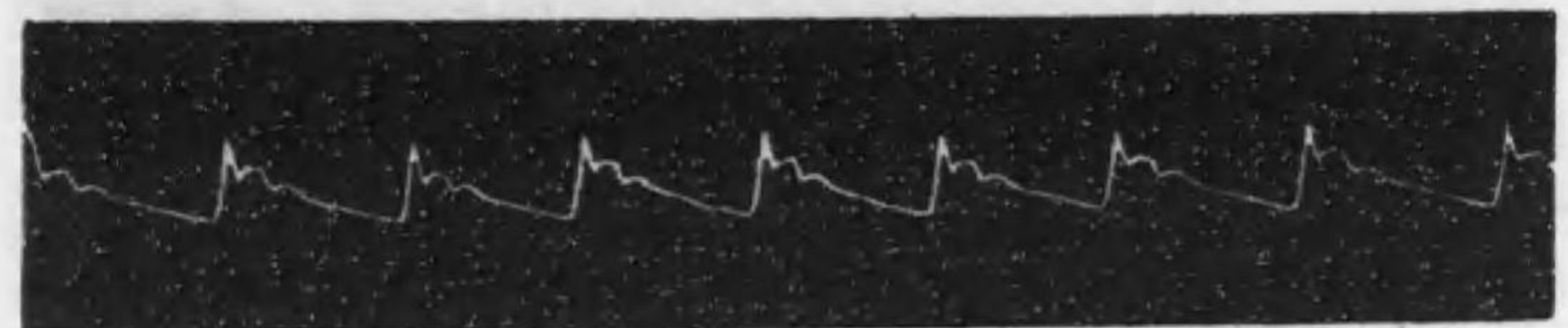
圖調整波脈 圖七第  
(波脈の子男歳四十五ふ云と英節關)



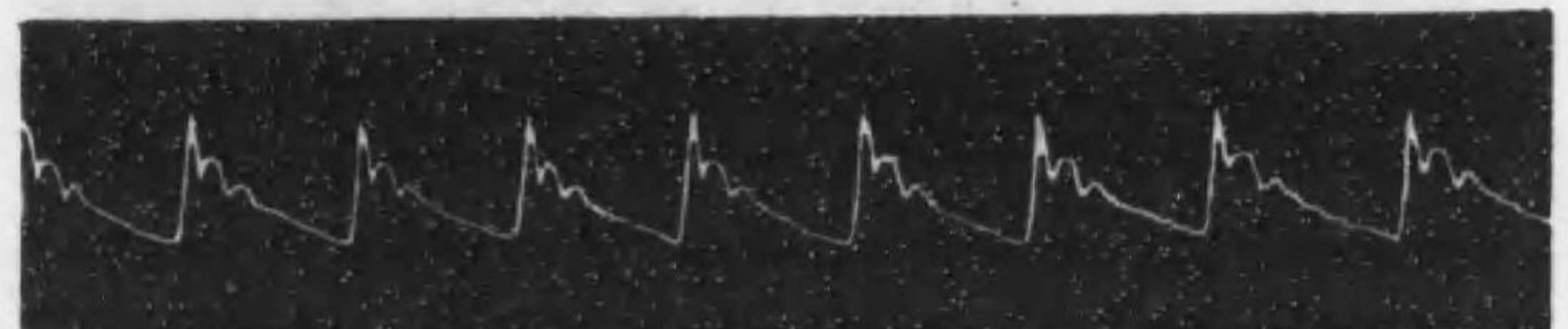
(十六搏脈) 前 る ざ せ 用 使 を 械 器



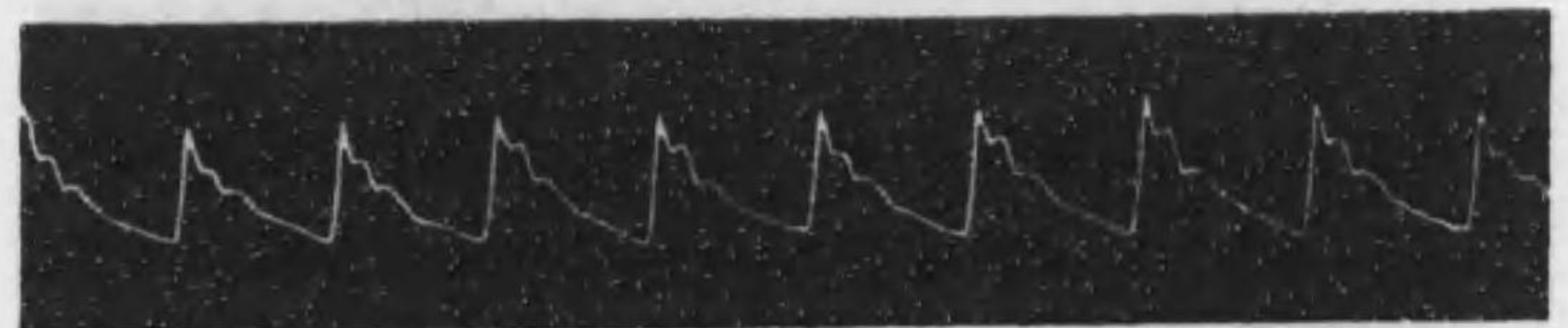
後 間 分 五 用 使 力 大



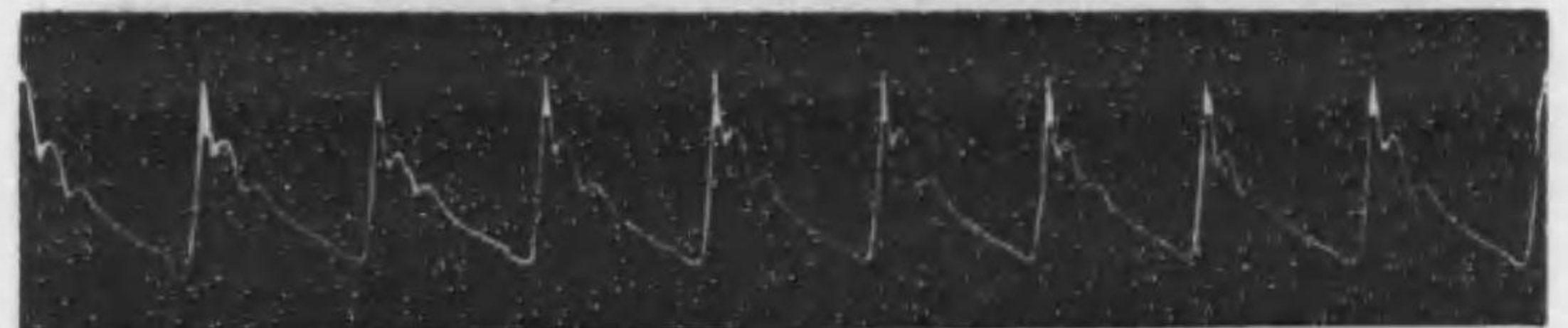
後 間 分 十 用 使 力 大



(二十六搏脈) 後 間 分 五 十 用 使 力 大



(二十七搏脈) 後 (分十四用併布温熱間此) 間分五十五用使力大



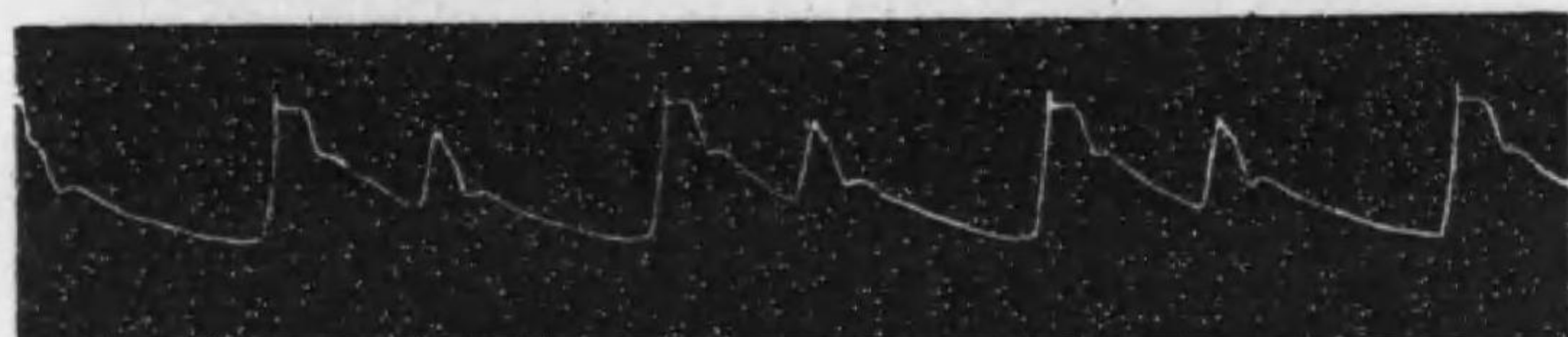
(上 同) 後 間 時 一 用 使 力 大

圖調整波脈 圖十第  
(波脈の子男歳九十四ふ云と腸脱)



1

(十七搏脈) 前 る ざ せ 用 使 を 械 器



2

後 間 分 五 用 使 力 大



3

後 間 分 十 用 使 力 大



4

後 間 分 五 十 用 使 力 大



5

後 間 分 十 二 用 使 力 大



6

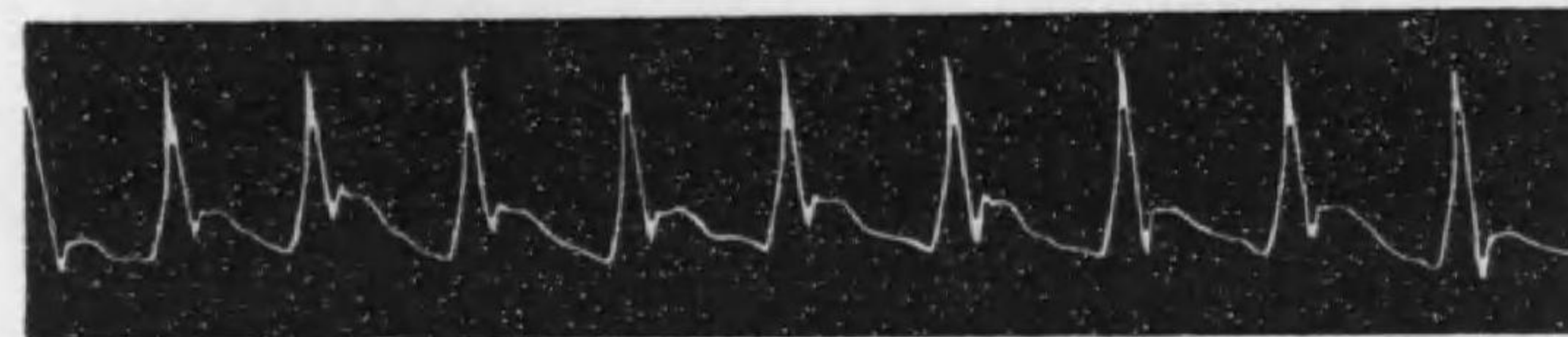
(八十六搏脈) 後(分十四用併布濕熱間此)間時一用使力大

圖調整波脈 圖九第  
(波脈の子男歳六十ふ云と病頭禿)



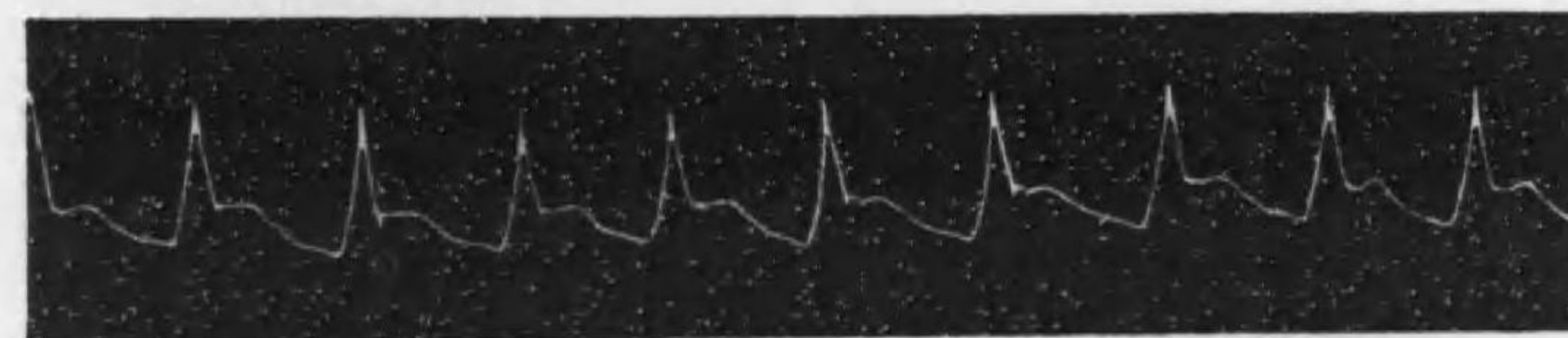
1

(十九搏脈) 前 る ざ せ 用 使 を 械 器



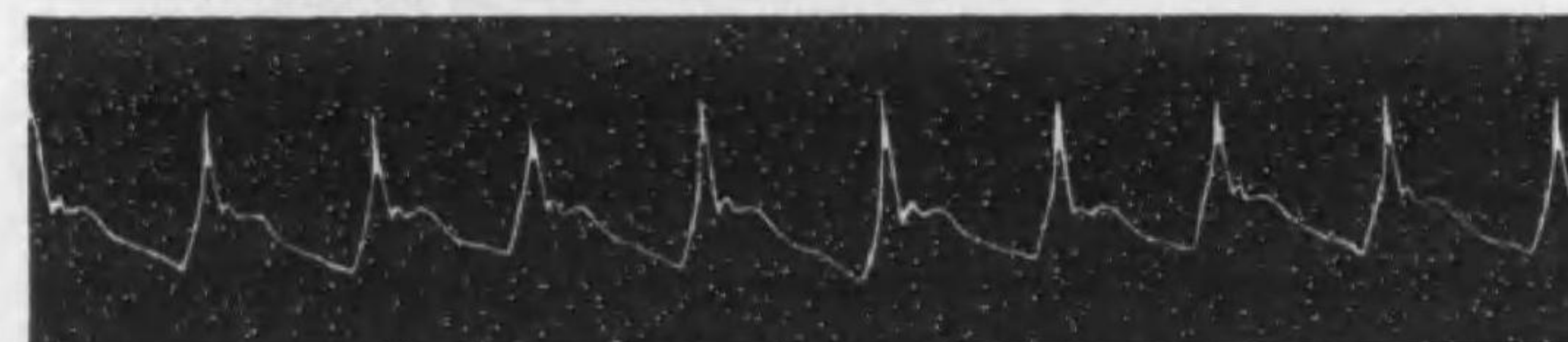
2

(四十八搏脈) 後 間 分 五 用 使 力 大



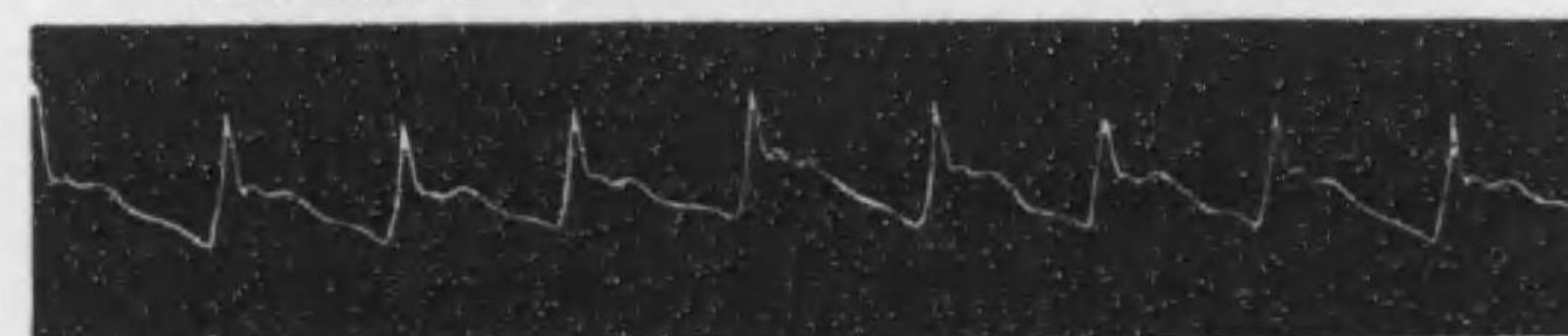
3

(二十八搏脈) 後 間 分 十 用 使 力 大



4

(九十七搏脈) 後 間 分 五 十 用 使 力 大



5

(二十七搏脈) 後(分五卅用併布濕熱間此)間分十五用使力大

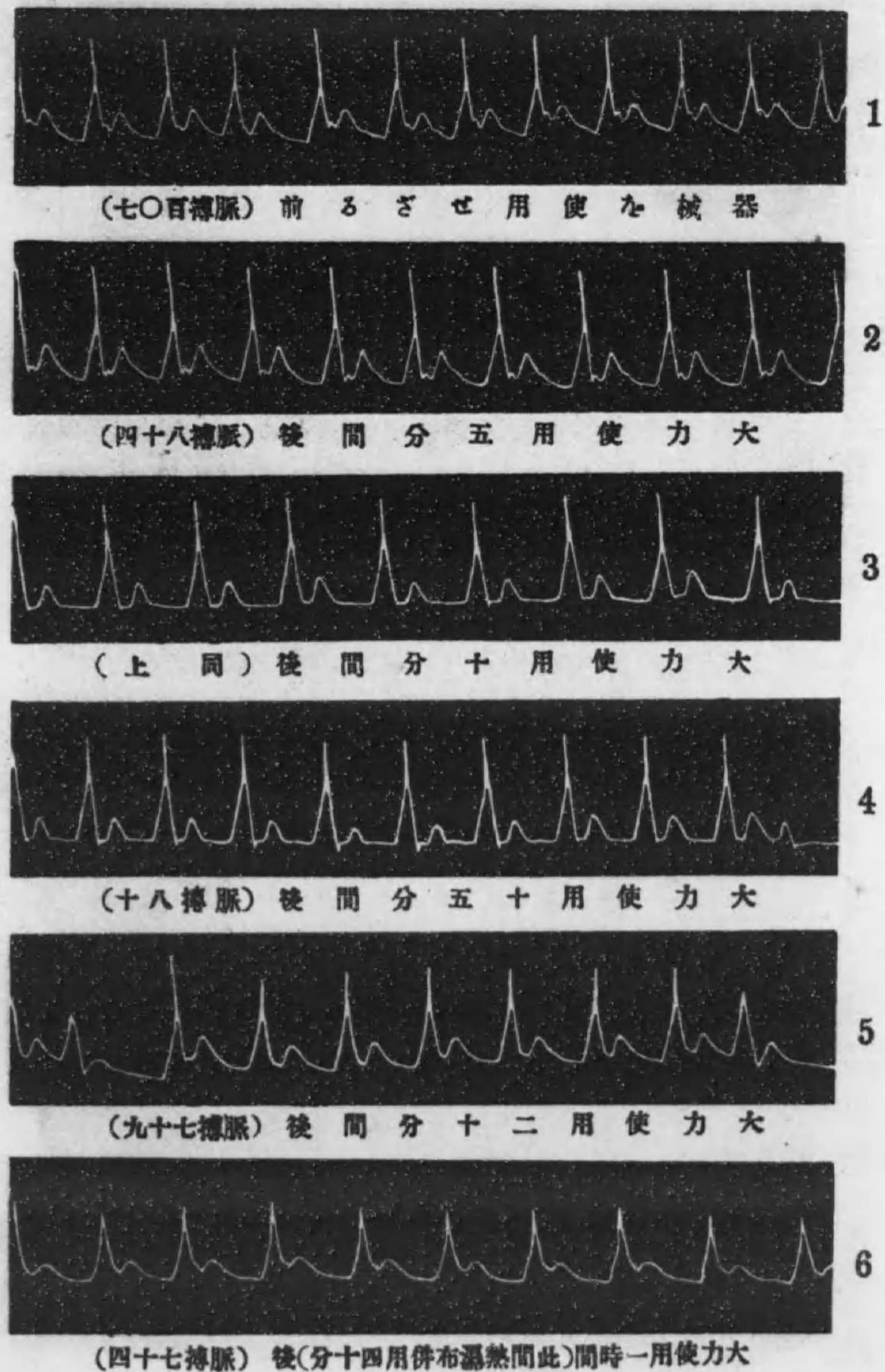


6

(二十七搏脈) 後 間 時 一 用 使 力 大

第十圖 脈波調整圖

(肺尖加答兒と云ふ九十歳男子の脈波)



上圖に示した數種の脈波脈數の調節は、獨りオキシヘーラーの使用によつて行はれる唯一の作用である。併しこれは僅か一二時間の使用による結果であるから、これを以て全く調節されたのではないが、その調節作用が、實に瞬間に行はれるとの推定はつくであらう。即ち、第四圖に示した三例中の各圖に就て見ても、器械の使用前後に於ける脈波脈數の變化調節に從つて生活力の刻々に整ひ行く状態が、一目にしてわかるであらう。第一例は最も調節された脈波で、先づ標準脈と云つてよろしい。斯様な脈波を持つ人は、常に呼吸は深大に行はれ、體温は三十七度を保ち、脈搏又七十二を算し、血壓の如きは實に百七十ミリメートルと云ふ稀に見る旺盛な抵抗力を有する人である。が、更にオキシヘーラーを三十分間使用した後の第二例を見ると、脈波は一層整調強實して、生活力の愈々旺盛になつたことを示してゐる。これを第一例の本器使用前に較べて、その脈波の高くなるのは、心臟の働きの盛になると同時に、血壓の増加したことを示し、その數の同じきは心臟機能の頗る健全で、抵抗力の極めて強き人であることがわかる。先づ斯様な心臟の所有者は病氣に罹るやうなことは、絶對にないと云つてよい。第三例は心臟病と云ふ人の脈波でその頂點が尖つて居り、脈搏の數が甚しく増加してゐるのは、心悸亢進の徴であるが器械

四十分間使用後に於ける第四例を見ると、脈波の頂點が低くなり、形状も調ひ、且つ幅の廣くなつて波と波との間隔の長くなつたことがわかる。波の低くなるのは、病的に亢進した心臓機能が安静になつて、血圧の低下したことを示し、幅の廣くなつたのは脈搏の調節した徴である。第五例に肺結核病者と云はれる人の脈波で、一見してその人の心臓が如何に微弱であるか、わかるであらうが、本器使用四十分後の第六例を見ると、直に健康者と變ることなく、且つ脈數さへ略々正數に復して呼吸も著しく緩和したことがわかる。第五圖は、喘息を病みつゝある人の發作中の脈波で、最初のうちはその形と云ひ脈數と云ひ明にその苦悶の狀を示してゐるが、器械を使用して數分間を経る毎に脈波脈數の漸次調節されるに従ひ、苦悶刻々に和ぎ、流石の喘鳴も全く止んで、遂に十二例に見るが如く、器械使用二日後の脈數は、六十六を算し、脈波も平素と變りなく、全然發作苦痛はやんだのである。第六圖の心臓に異狀のある神經衰弱者の如きは、最初器械使用前の脈波を見ると一分間に十回位の結代があつたが、本器使用一時間三十分後には、更に結代を見ざるまでに調節したので、その歡喜云ふべからざるものであつた。第七圖の關節炎、第八圖のヒステリーも、病名こそ異つて居るが、實際は皆心臓に故障のある脈波に過ぎない。それがオ

キシヘーラーを一時間も使用すると、脈形は健康體のものと同様になり、脈數は七十二に調節して、非常に精神の爽快になつたことがわかる。次に第九圖の禿頭病の如きも器械を使用した結果、著しく心臓の調節を來したもので、謂はゞ生活力の刻々に復活する有様を現はしたのである。現にこの脈波の所有者は、本器使用五箇月にして、禿頭病を回復し漆黒の毛髪を簇生せしめたのである。次に第十圖の脱腸、第十一圖の肺炎加答兒も皆平素心臓が弱く、呼吸の不十分より起因する結果に外ならないのであるが、本器使用一時間で、略々心臓が生理的に調節せられたので、これまでの病は、殆んど忘れられたかの如き氣分の爽快を覺えたのである。

然るにオキシヘーラーを使用すると、概して脈搏の強實するのを見て、血圧の亢進するなきやの疑ひを起す人と、又は必ず亢進すると誤解してゐる人もあるやうであるが、生活力の調節作用を目的とする本器の效力は、微弱なる脈搏は、これを強實にし、病的に高過ぎる脈搏は、これを緩和して順調ならしむるのである。(第四圖第三例の心臓病参照)故に血圧(詳細は血圧の項参照)も亦それと同様、低きに過ぎるものは高く、高きに過ぎるものは低く、常に生理的に調節するのが本器獨特の作用である。斯く短時間にして脈波脈數が

各人各自に對し容易に、生理的に調節されると云ふことは、即ち心臓の運動が強く正しくなり、血液の循環が滞りなく行はれた生理上當然の歸結である。尙又病勢に伴ふ脈搏の變化、脈搏に従ふ血壓の状態等は、實に微妙な關係を有するのであるから、千差萬別にて各人各病に就き、一々これを詳述せんとすれば、本書全部を埋むるも尙且つ足りりとせぬ然し脈波脈數の調節するに従つて、健康の回復する時間順序等は、前に列記した、數種の圖解に依つて、略々諒解せられるであらう。これ、本器あつて初めて行はれる生理的調節作用で、本器の一般健康上に對する解決は、全く、この一律に存するのである。使用者は能くこの事實を精査研究せられて、生理上の調節と云ふことが、健康の増進と疾病の回復とに缺ぐべからざる、唯一の方法であることを諒解せられたいのである。

**呼吸** は生活體の生存中、外界の空氣或は水より酸素を攝取して炭酸を排出する機能である。凡て生活體は動物たると植物たるとを問はず、皆この機能を有してゐる。その呼吸の目的はかの酸化作用に必要な分量の酸素を體内に輸入し、新陳代謝によりて形成した炭酸を體外に排出するのである。たゞ動物に於ては、この機能が最も活潑に営まれる器官があつて、これを呼吸器と名づけ、吾人は日常これに由つて生存を維持してゐるのである。

**呼吸**の數は、一分間に十二乃至十六或は二十四を算し、平均脈四搏に就き一至の比較である。幼時にあつては呼吸の數多くして一歳までは四十四、五歳までは平均二十六、十五歳以上は大人の平均數に等しい。又場合により増減するもので、臥する時最も少く、坐する時これに次ぎ、起立する時最も多いものである。その他動作の際及温熱の空氣中にてはその數を増すのが普通である。古より息は生に通ず。又呼吸は人の生氣なり呼吸なければ死すと云つて、人の養生の道は一に氣を調ふるにあり。世に幾多の呼吸法が行はれるのは實にこれが爲である。少しく注意を拂つて之を實驗すれば、各自に判ることである。例へば生兒は教へずして腹式呼吸を行ひ、老年に至つては漸次胸部で小さく浅く呼吸するやうになる。又病氣になるのも同様で呼吸が浅く頻數になり、又常に鼻にて呼吸すれば勢ひ深く大きく行はれ、口にて呼吸すれば浅く小さくなつて、自然不健康者の呼吸状態となることは、今も古も變りない不養生の第一である。然るにオキシヘーラーを使用すると、少しの努力も拂はず、無意識に何人も直に呼吸状態に變化を及ぼし、今まで胸部で小さく浅く行はれてゐた呼吸は、見る／＼中に、大きく深く正しく、肩より腹部に於て行はれるやうになる。これは使用者自身よりは、傍觀してゐる人の方がよく氣づく程である。又鼻孔で

呼吸の出来ぬ人は、忽ち鼻孔のみで大きく深く呼吸するやうになり、その數も漸次に調和されて、初め多きものは少なくなり、少なきものは多くなつて、普通一分間に十八前後の深大なる呼吸に調節される。これが最も正しい健康の人の呼吸作用である。實に無害で有益なる自然療法の眞意は、これによつても明瞭であるから、よく實驗して見るがよい。

**體溫** は人體中に攝取したる榮養物の分解及び酸化に因つて生ずる化學熱で、新陳代謝に伴ふ生活の現象である。而して三十七度を以て健康の標準としてある。即ち心臓の働きの強く正しくなれば、吸酸除炭の作用が順調に行はれて、燃焼作用が盛になり、常に生理的體溫たる三十七度を保ち得るのであるが、然し反對に心臓の働きの弱く不正になれば吸酸除炭の作用も不活潑となり、體溫常に低く夏期中にあつても厥冷を感じる程に燃焼力が弱くなるのである。これが即ち身體を虚弱に導き萬病を誘發する原因ともなるのである。元來體溫は外氣の溫度、食物、運動等によりて多少の影響を來すも、普通健康體の溫度は三十六度五分乃至三十七度までと云はれてゐる。而して、朝の體溫は最低を示し、夕刻は大抵五分乃至一度位上昇するのが普通である。且つ、年齢によりて多少の相違はあるがこれを表示すれば左表のやうである。

健康者の體溫と年齢

年齢	平均體溫	檢溫部位
初生兒	三七・四五	直腸
自五歲至九歲	三七・七二	口腔及直腸
自十五歲至二十歲	三七・三七	腋窩
自二十一歲至二十五歲	三七・二二	同
自二十六歲至三十歲	三六・九一	同
自三十一歲至四十歲	三七・一〇	同
自四十一歲至五十歲	三六・八七	同
自五十一歲至六十歲	三六・八三	同
八十歲	三七・四六	腸

これは澤山の人からとつた平均の體溫であるが、眞の健康者と云はれる人は、脈搏七十二、呼吸十八、體溫三十七度を保つべきである。それ以上であつて

も以下であつても、眞の完全な健康者とは言へないのである。それは、オキシヘーラーを使用して、漸次、生活力が旺盛になり、完全な健康に進んで來ると、脈搏、呼吸の整調するに従ひ、その人の體溫は、高過ぎる場合も低過ぎる場合も、恰度三十七度に近い數に調和されて來るのでわかる。これオキシヘーラーを使用すると、燃焼作用の盛に行はれるよい證據である。

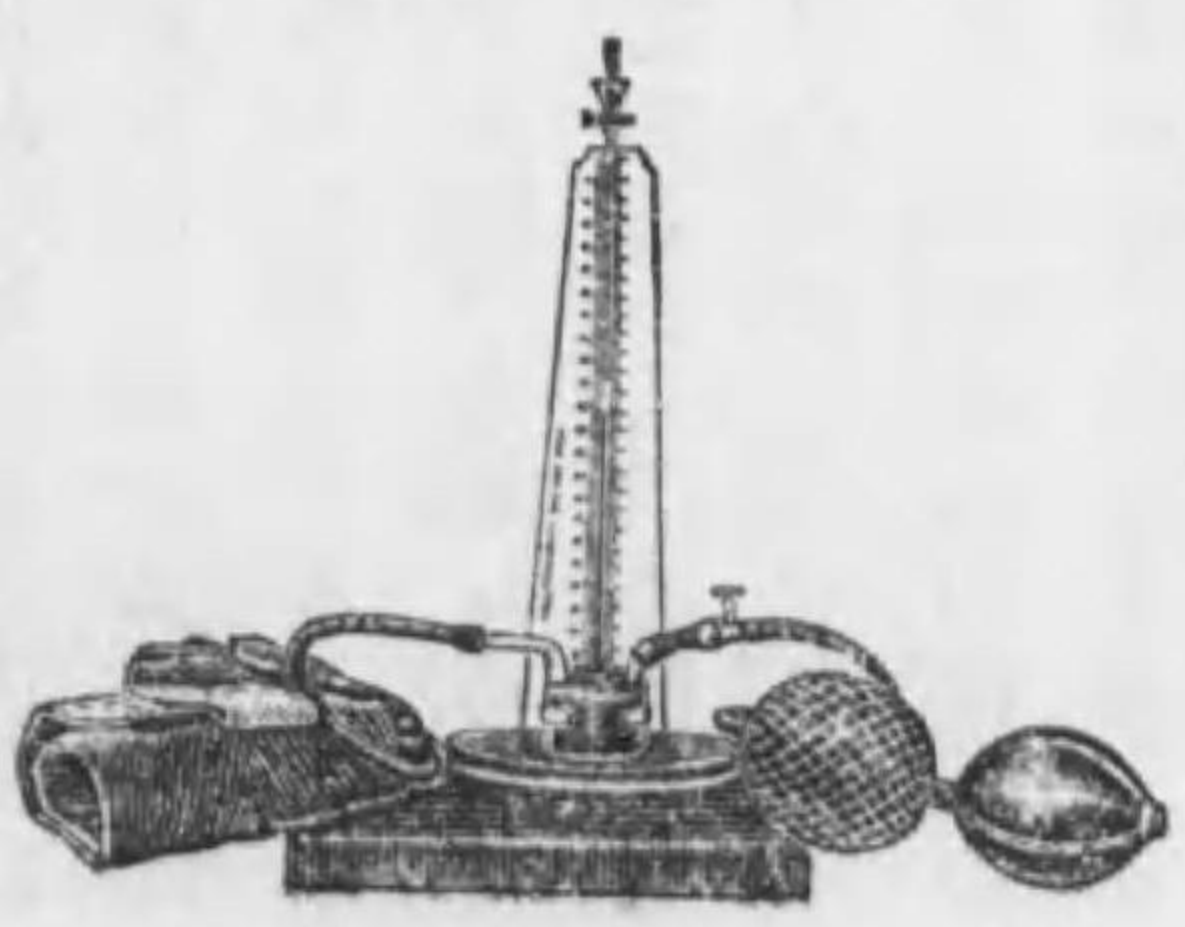
以上脈搏、呼吸、體溫は生理上最も大切な表徴であつて、これによつて各自皆生活力の實在を知るのである。故に前に述べた第四圖の一項二項に現はした如き脈搏の所有者は

呼吸も體温も亦必ず調節した人で、何等生理上の缺陷のない、無比の健康者である。若し人が少しにても不調和の徴候あれば、必ず幾分かの苦痛不快は免かれない。故に少しにても苦痛不快の感ある人は、必ず、その脈搏、呼吸、體温の調節してゐない人であることは疑ひない。實に有ゆる疾病の原因は、皆悉くこの不調和に胚胎し、漸次、亢進して大患重症ともなるのである。決して最初から偶然に突發するものではない。既に四千六百餘年の昔に於ても、黄帝素問（内經）に左の如き一節がある。

黄帝問曰。平人何如。岐伯對曰。人一呼吸脈再動。一吸脈亦再動。呼吸定息。脈五動。閏以大息。命曰平人。平人者不病也。

實に眞理は古今を通じて更に變ることがない。前項に述べた、一分間に脈搏七十二、呼吸十八、體温三十七度と云ふことは、今日、働き盛りの健康者には、なくてはならない數で東西古今を通じて、自然に與へられたる健康の、標準である。故に、平素若し少しにても脈搏、呼吸、體温等の何れにも、異狀あることを認めたらば、直にこれが回復の方法を採るがよい。さすれば未だ病氣となつて現はれない内に、容易に防遏することが出来るであらう。尙發病の原因に就ても、同書に左の如く書いてある。

圖 二 十 第  
計 壓 血 子 口 水



百病生於氣。怒則氣上。恐則氣下。喜則氣緩。悲則氣消。思則氣結。驚則氣亂。寒則氣收。暑則氣泄。勞則氣耗。

これ即ち、身體不調和の原因である。これに氣付かずして、たゞに健康のみを保たんとするは、全く間違ひである。近來不健康者の多き又不治の疾病に苦しむ者尠なからざるは誠に故なきにあらずである。よく自然に與へられたる生活力の意義と、疾病のよつて來る起源とを考察せられたらば、何時も健康を維持することが出来るであらう。

● 血 壓 ● は心臟が唧筒のやうに一張一縮する作用によつて送り出す血管内の血液の壓力であつて、その血壓の差は血液運動の原因となる。これを第十二圖に示す血壓計を以て檢すれば、その血管の緊張の度を容易に測ることが出来る。即ち血液によつて緊張した血管壁は、水銀柱を何れ丈の高さに押し上げる力を有するかをミリメートルで表した器械である。左記の血壓表はその器械で測つた健康者の年齢に應じてその血壓を示した成績である。この表に依れば健康

呼吸も體温も亦必ず調節した人で、何等生理上の缺陷のない、無比の健康者である。若し人が少しにても不調和の徴候あれば、必ず幾分かの苦痛不快は免かれない。故に少しにても苦痛不快の感ある人は、必ず、その脈搏、呼吸、體温の調節してゐない人であることは疑ひない。實に有ゆる疾病の原因は、皆悉くこの不調和に胚胎し、漸次、亢進して大患重症ともなるのである。決して最初から偶然に突發するものではない。既に四千六百餘年の昔に於ても、黄帝素問（内經）に左の如き一節がある。

黄帝問曰。平人何如。岐伯對曰。人一呼吸脈再動。一吸脈亦再動。呼吸定息。脈五動。閏以大息。命曰平人。平人者不病也。

實に眞理は古今を通じて更に變ることがない。前項に述べた、一分間に脈搏七十二、呼吸十八、體温三十七度と云ふことは、今日、働き盛りの健康者には、なくてはならない數で東西古今を通じて、自然に與へられたる健康の、標準である。故に、平素若し少しにても脈搏、呼吸、體温等の何れにも、異狀あることを認めたらば、直にこれが回復の方法を採るがよい。さすれば未だ病氣となつて現はれない内に、容易に防遏することが出来るであらう。尙發病の原因に就ても、同書に左の如く書いてある。

體と稱すべき人の普通血圧は、一〇〇乃至一五〇ミリメートルであるが、この標準内に於ても、百ミリメートルは低く過ぎるとか、百五十ミリメートルは高過ぎるとか云ふことは

健康者の血圧と年齢

年齢	日本人	西歐人
七歳	八五	八五
八歳	九二	九二
九歳	九九	九九
十歳	一〇九	一〇九
十一歳	一一一	一一一
十二歳	一一一	一一一
十三歳	一一一	一一一
十四歳	一一一	一一一
十五歳	一一一	一一一
十六歳	一一一	一一一
十七歳	一一一	一一一
十八歳	一一一	一一一
十九歳	一一一	一一一
二十歳	一一一	一一一
二十歳以上	一一一	一一一

単に數字の上ばかりで秤定することは出来ない。何故ならば、血圧は心臓が血液を押し出す力であるから、心臓が強く健でその力が強ければ強い程、血圧は高くなる譯であり、又何等かの故障のために心臓の機能が著しく亢進する

場合にも、血圧は病的ではあるが矢張り高まる譯けである。また心臓の力は同じでも、小血管乃至毛細管に於ける血行が、何にかの場合で妨げられることがあれば、その中間にある血圧は膨脹するから、その部の血圧は高まる譯けである。故に血圧が高いからと云つて必ずしもそれが健康體の證據にはならないと齊しく、低いのも同様である。然るにオキシヘーラーを使用すると、脈搏呼吸體温の調節すると共に、血圧も亦調節されることが判る即ち普通健康體に使用した場合は五分間もたつと五ミリメートル程昇り、更にこれに熱濕

布を併用すれば、三十分間にして約十ミリメートルを高め、一時間を経れば遂に發汗を促して生活力を愈々旺盛ならしむるが通例である。即ち左表の第一例は心臓の極めて強健

血 壓 試 驗 表

オキシヘーラー使用前の血圧	使用五分後血圧	使用十分後血圧	使用一時間後血圧	病 名	年 齡 及 男 女 別
一一二	一一一	一一一	一一一	健	五十一歳 男
一一一	一一一	一一一	一一一	健	四十一歳 男
一一〇	一一一	一一一	一一一	健	三十一歳 男
一〇九	一一一	一一一	一一一	健	二十歳 男
一〇八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
九〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
八〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
七〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
六〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
五〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
四〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
三〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
二〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
一〇	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇九	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇八	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇七	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇六	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇五	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇四	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇三	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇二	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女
〇一	一一一	一一一	一一一	健	十八歳 女

な人であるが、オキシヘーラーを使用すると、更にその度を強め時間を経るに従つて血圧は益々高まつて来る。これが全身の血行が愈々旺盛となつたのを證するもので、斯う云ふ人にあつては本器の感應は一層顯著である。即ち汗も早く且つ多量に出る。腹も空り便通がよくなるなどは的確に之を認めることができる。第二より第六に至る五例は病勢と體質



とによりオキシヘーラー感應の度に多少の差あるは免かれぬが、何れも血圧の上昇を示してゐる。之は本器が血行を促進して、生活機能を活潑ならしめる證徴であることは前例に示す處に同じで、第七と第八の二例は久しき慢性病のために一般の生活機能が鈍り心臓の力も衰へてゐる人の場合であるが、それでも使用十分時の後には、五乃至十ミリメートルの上昇を示してゐる。第十一例に至つては本器效力の最も奇抜な所で、前諸例とは全然血圧變化の趣を異にし、前者に比して血圧は却て低減してゐる。元來糖尿病、腎臓病等の諸病は血圧の病的に昇る病で、その甚だしきものに至つては二三〇ミリメートルにも昇るこの病で血圧の昇るのは、甚だ危険の徴候であるのに、十一例に於て血圧一六〇なる糖尿病者が、本器使用後一時間で一四〇に減つたと云ふことは、實に本器獨特の作用で、これによつて如何なる場合に使用するも、有效無害のものであることを知るであらう。

然るに本器が脈搏を亢進することは、同時に血圧をも亢進するものと思ふ人もある。専門家さへも、脈搏が亢進すれば血圧が昇るべきものと速断されて、往々誤解を招くことがあるが、是等は、脈搏の項に於ても既に述べた如く、心臓の收縮が盛になつて血液が強く血管内に送り出されるから、一般に血圧が上昇するのが普通である。が若し何等かの原因

で血管が硬化して居る人に對しては、心臓から血液を押し出す力が強くなれば血行が盛になつて、その血管の硬化が減じ、従つて血圧が下がらねばならぬのである。本器はこの調節作用を主としてその特效を説くのであるから、平素血圧の低く過ぎる即ち生活力の弱い人に使用した時は、血圧は上昇するが、糖尿病とか腎臓炎とか乃至動脈硬化症とか云ふ病的に血圧の高き人に對しては、却てこれを生理的にまで下らしめることが出来る。これ本器は心臓の働きを強く正しくして、内から生理的に調節作用を喚び起すのが、本器の主眼であるからである。故に本器を使用して脈搏の強實するのを見て、徒らに血圧の上昇するものと速断するは、全く誤解である。よく體験せられて、その真相を認め、病的に血圧の亢進を恐るゝ人は、一時も猶豫なく盛に使用するがよい。

●發汗 發汗とは汗腺より汗を分泌することである。汗の分泌少量なるときは、その皮膚面に出づるや、忽ちその水分と揮發成分とを蒸發し去つて毫も汗の痕跡を留めない。これを見るべからざる汗と云ふ。されど汗の分泌増加するか、或は蒸發の防害せられるときは球状を成して汗腺孔より流れ出るものである。これを見るべき汗と云ふ。發汗は、諸般の作用から來るもので、即ち外圍の溫度亢進、血液中の水分増加、心臓及び血管の機能旺盛

發汗劑、傳染病の經過中例へばマラリヤ、リウマチス、膿毒症等に見る現象である。然るにオキシヘーラーを最強度の使用にて二時間も行へば、貧血性の人にあつては見るべからざる發汗に止るも、大抵の人は見るべきの發汗を催す。これは體内の燃焼作用の盛に行はれる結果で、體温の高低と密接の關係を有するものである。更に完全な熱濕布(參照)を應用するか、或は本會附屬の保全堂療院で行ふやうな、全身の要部に大なる熱濕布を併用するときは、半時間を出でずして、如何なる人も襦衣を捲るが如き大發汗をなす。この發汗は熱濕布の爲であると解する人もあるが、試に本器を用ゐずに熱濕布のみを施して見ると發汗は甚だ不十分で且つ冷え易く、不快なものであることがわかるであらう。就中心臟の悪しき人などに對し、單に熱濕布だけを用ゐると、入浴運動の際に感ずると同様に、心悸亢進を感じたり、胸部の壓迫を訴へたりするが、本器を使用しての熱濕布は、決して左様な不快を興ふることなく、却て心身を安靜ならしめ、謂ふべからざる爽快を感ずる。然し嬰兒若くは衰弱者には、本器中力(參照)の使用でも往々發汗することもあつて、熱濕布の必要もないが是等は數回實驗を重ねるに従つて自ら會得されることである、實に本器使用に依る發汗は解熱藥或は發汗劑服用後の發汗に於けるが如き不快と疲勞を伴はず、發汗

後は解熱すること速に、且つ安靜爽快を覺えて、食慾進み兩便快通し、安眠も出来るやうになるのが常である。實に斯の如く簡單に生理的に發汗を促す本器の作用は、解熱に對し天下無比の稱ある所以である。

皮垢 は人體の新陳代謝に因りて、皮膚の上皮細胞が枯死し、表皮の上下部の剝離するもので、言はゞ極く薄く皮の表面が剝げるから出来るのであつて、外から汗膩などの塵に汚れて皮膚に附著するものではない。故に皮膚機能が亢進すれば、その新陳代謝も從つて促進されるから、皮垢は澤山出来る道理である。これ壯齡者は、皮膚脂肪多く垢が澤山に出るが、老人となると皮膚乾燥して、垢が餘り出なくなる所以である。オキシヘーラーを使用すれば、その頻繁なるに従ひ、最初の内は入浴の時必ず皮垢の量の著しく増したことを感知するであらう。これ本器使用によつて、その人の新陳代謝機能が盛になつたよい證據である。本器の體質改善は、多くこの理由に由つて行はれるのであるから、長く使用すればする程、緊張したる體質の所有者となる譯である。

皮臭 人には、皆各人特有の臭氣がある。特に平素胃腸の悪しき人などは、その臭氣は最も甚しいのである。然るにオキシヘーラーを使用すると、直にその臭氣を發して自分

よりは、傍人にはよく感ぜられ、懸て、その人の襯衣や寝具に臭氣を増し、人によりては實に甚しく強烈となるは著しい事實である。併し腋臭の如き臭氣ある人にこれを使用すれば、却てその臭氣を減ずる。これ前者は、新陳代謝旺盛になつた爲で、後者はそれに依つて汗腺の異常分泌を調整して、臭氣を減ずるからである。

以上は、オキシヘーラー使用に於ける反應の中、何人も必ず感知せらるゝものであるが反應は決してこれだけに止まらず、各人各種に現はれるものである。例へば常に便秘の人に使用すれば便秘が整ひ、下痢勝の人に用ゐれば硬便となり、小水の近き人に用ゐれば遠くなり、遠き人に用ゐれば近くなり、食慾の振はざる人に用ゐれば、俄かに食氣を増し腹の空かぬ人が、一回の使用で著しく空腹を感じ、不眠の人に用ゐれば、容易に安眠を得暑氣酷しき時にこれを使用すればその暑さに堪へ、寒氣酷しき時に用ゐれば、その寒さに堪へることの出来るが如きは、可なり萬人に通ずる反應であつて、少しく注意を拂へば皆悉く知ることが出来る。然し非常な難病者にあつては、使用直にその効果を認め難き場合もあるであらうが、これもよく注意を拂つて使用すれば、從來の療法の如く副作用もなく又衰弱を來すやうの恐れもなく、大氣中の酸素が自ら體內に攝取せられて、漸次順調の

生活力を回復することが出来るであらう。

## 一〇 オキシヘーラーの反動と休養

オキシヘーラーの身體に作用するや否や、何人も直に呼吸が盛になる。然しその呼吸は普通營んでゐるやうに、肺に於て行はるゝのみでなく、皮膚面無數の氣孔より營まるゝことは久しき以前より實驗家の認むる所である。動物及一種の植物が、その外皮或は葉片に依つて生命の一部、若くは全部を維持してゐるから見ても、人體の皮膚呼吸の必要なるは敢て不思議ではない。若し人體にして皮膚の全面に漆するときは、數分間にして窒息すると云ふことも明である。或る生理學者は皮膚に依つて營まれる呼吸を、全呼吸の百分の一乃至百五十分の一と算したと云ふ。實に皮膚の主なる機能は呼吸と排泄とにあることは事實であるが、本器を使用して皮膚呼吸を活潑にすることはこれを使用すると、その脂垢の著しく多くなること、又臭氣を發することの烈しきによつて十分に立證し得る。

オキシヘーラーの使用に依る全般の呼吸は、酸素を吸收すること迅速且つ多量であるから、虚弱者がこれを適度に使用すれば、血液中に酸素の飽和を來すが、尙使用を繼續する

時は過多の酸素を吸収して人體に同化し能はざる程度に至り、往々筋肉の疼痛、悪感を伴ふ發熱、神經の過敏若くは衰弱、或は頭痛眩暈等不快を催すことを免れない。又偶々鼻孔より出血を催すこともあるが、是等は本器を餘り長時間使用したか、或は餘りに強力を用ゐたかに原因する一時的反動で、決して惧るべきものではないが、若し斯の如き徴候を感じた時は、暫く使用を中止して、入浴或は冷水摩擦を行へば忽ち回復する。或はこの場合少量の酒類を飲むのもよろしい。

**休養と使用** 漫性病に對しオキシヘーラーを強力にて過度に使用し、或は使用後の休養を行はずして引續き長時間使用するときは、過度の酸化を來すを免れないから、若しその徴候を感じた時は、一時使用を中止し、少くとも二三時間を経過した後、再び、使用せらるゝがよい。例へば野外に出で、活潑なる運動をしようと、一時快感を得るも、暫時にして疲勞を覺え休養を要するが如く、本器を使用して呼吸の深大となつた所から、吸収した酸素を同化せしめて、新規の状態に應ずべく、その使用者の健康状態に應じて或時間の休養は缺くべからざるものである。

**休養に要すべき時間** オキシヘーラーを大力若くは強力にて使用すべき急性病のとき

は、なるべく使用時間を短縮して使用度數を増されたい。尤も夫れに従ひ休養の方も頻繁にして、その使用と休養とを調節して使用するやう注意せられたい。例へば一回に二時間續けて使用するよりも、これを一時間づゝ二回に使用し、亦一時間使用したときは、少くとも同時時間を休養するがよい。これ重病者や衰弱者に使用するときは、一時に長時間の使用を避け、その吸収せる酸素のよく同化する時間を與へる必要あるためである。

**反動中の徴候** 反動は使用者に著けた導子を取り去ると同時に始まり、再びその導子を身體に著けるまでと、或は又、その吸収せる酸素の全く同化されるまで繼續するのである。その反動徴候中には、使用者は、或は病にあらざるかと疑ふ程の苦惱と疼痛とを感ずるところがある。又尿と汗とに異臭を伴ふこともある。その尿は概して濃厚なる色素を帯ぶると共にその量を増加するから、若し水腫などある時は著しく輕快を感ずる。尤も反動の激烈なるときは膽汁を含める下痢、多量の瓦斯發生、舌に異常な味感のあること、或は鼻及び咽喉に類似感冒に罹りたるやうの症状を見ること、或は癩癧、濕疹等特に梅毒の如き血管を冒す諸病、或は血液中に種々の毒素を多量に混入するときの如きは、皮膚に著しき發疹を免かれざること、或はその導子の下、及びその周圍に、その甚だしきは全身に發疹する

人もあるが、何れも本器の奏效を主張すべき経過であるから、寧ろ熱心に使用を続けられて、内部より一切の病毒を排除しなければならぬ。

又オキシヘーラーの副作用とも云ふべき反動としては、罕に脈搏が亢進し、又體温の上昇することがある。然し一般の容態は決して不良でなく、食慾は進み精神は爽快となるのであるから、これ亦寧ろ奏效の一表徴として見るべきものである。これ諸機能の旺盛となるに伴ひ起るところの一時的現象に過ぎないので、決して心配するに及ばないのである。斯る人は一時使用を休止すれば、反動は直に消えて平常に復し、何等、不快を貽すやうのことはない。勿論、危険などを生ずるの虞れはないから、二三時間を経た後、器械の力を弱くして再び使用し、漸次身體に慣れるに従つてその力を強め時間を長くすれば、三四回目には更に反動を見ないやうになる。

オキシヘーラーの愛用者には近來休養の不必要を説く人もあるが、その使用中別に反動を感ぜざる限り敢て休養せざるも差支ない。然し使用當初の人或は衰弱した病人の中には使用期間に達せざる、然も二三十分にして、内に烈しき反動を感じ、使用を繼續し得なくなるものも尠なくない。かく反動ある人は多少辛抱して使用を続けらるれば、一二週間後

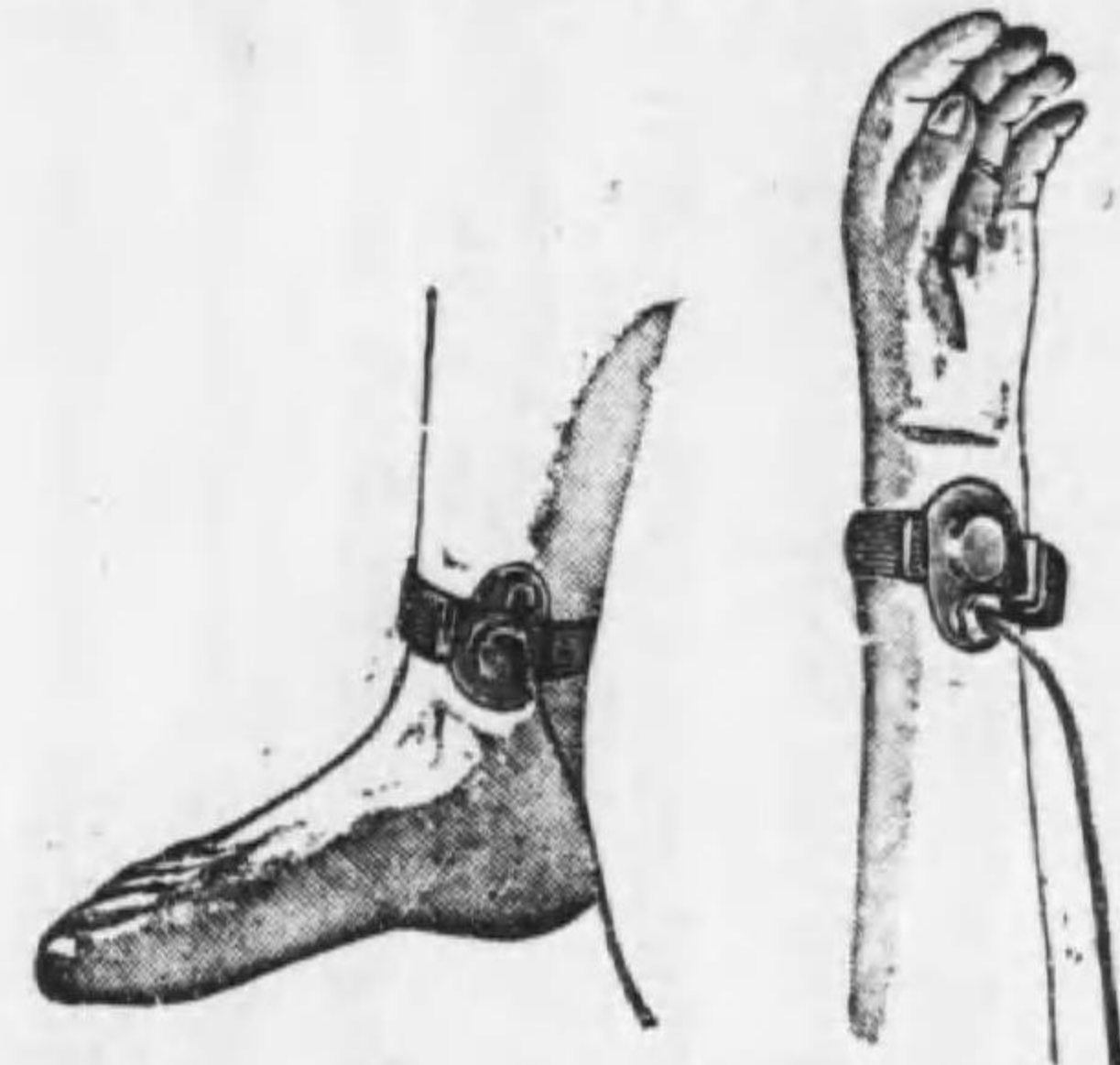
には格別の反動なきやうになる。實に或る人には使用を続けることは必要なるも、或る人には休養しつつ使用するのが有利の場合ありて一定し難きも、畢竟するに使用者の健康状態にあるので、豫め一定することは出来ない。然し概して云へば、衰弱して居る人に使用すると、最初は多少の反動を免かれないが、少しく使用を続ければ、自然と反動を覺えなくなるのが普通である。尤もその反動とて格別恐るべきものでないことは、十年以來幾多の實驗例が證明する如く、全く一時的のものに過ぎないのであるから、餘り強き反動を認めざる限りは、飽くまで使用を繼續するがよい。餘り規則や理論に拘泥して使用を中止してはならぬ。

### 第二章 オキシヘーラー使用法

#### 一 使用法

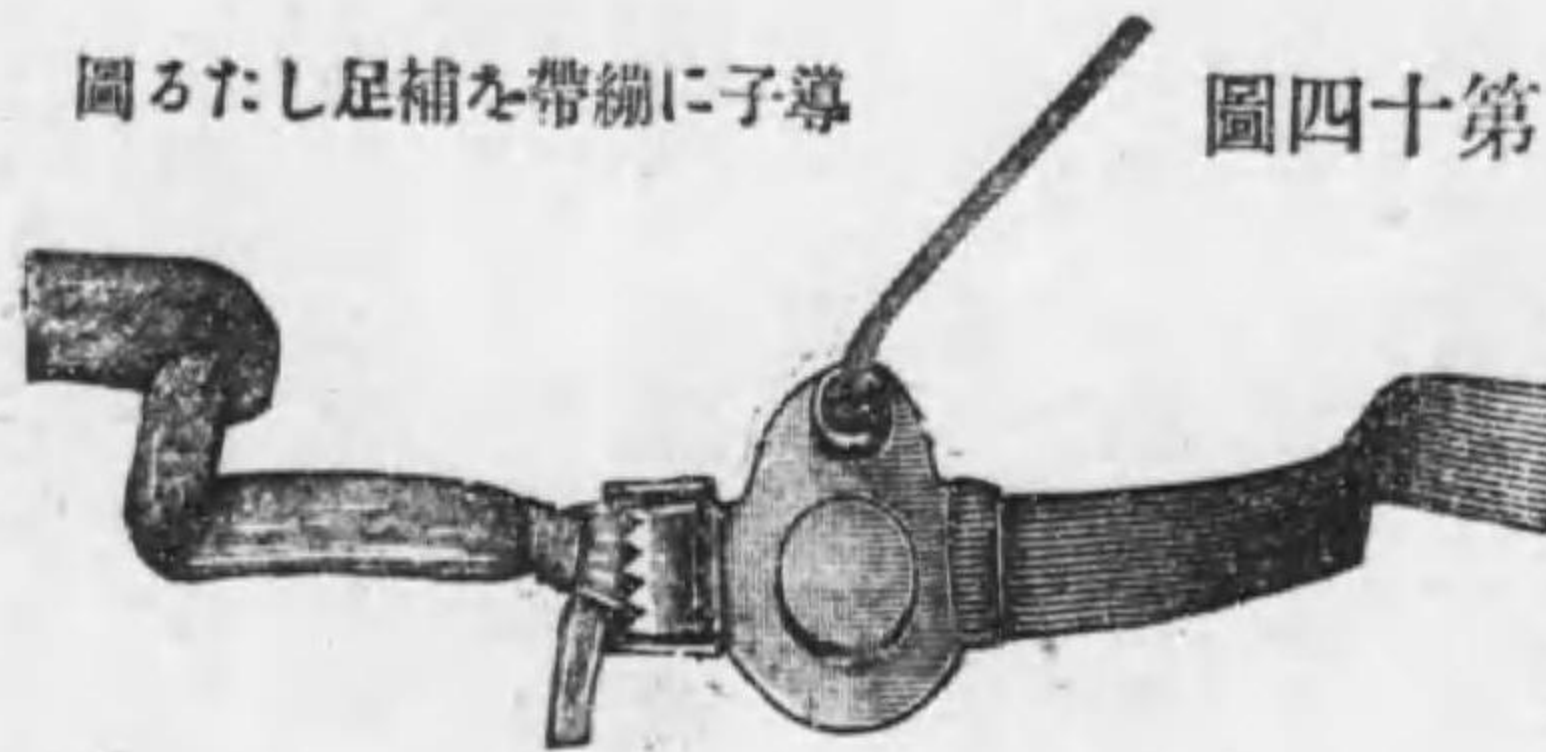
オキシヘーラーの使用法は、これを全身療法と局所療法との二種に區別する。  
全身療法とは、導子の一箇を手頸の内側に、他を手頸とは反対の足頸の内側に接觸し

圖三十第 圖るたし觸接にと頸足と頸手の子導



て使用する**局所療法**とは、導子の一箇若くは二箇を（一箇の場合には他の一箇を足頸又は手頸に）患部或はその附近に接觸して使用する**導子接觸法**先づ、微温湯又は石鹼水を以て、兩導子を著くる所の皮膚面を清潔に拭ひ、その脂垢を除き温湯又は清水を以てよく潤したる綿繻を、導子の凹所に少し盛り上る程に詰め、餘り壓迫を感ぜざる程度に

圖四十第 圖るたし足補を帶繻に子導



その護謨紐を以て目的とする場所へ纏縛するのである。例へば全身療法の場合は、手頸と足頸とに導子を接觸せしめ、第十三圖に示すが如く、手頸なれば内側の中央の平面な處へ又足頸なれば内踝の上の中央の平面な處に於てするがよい。又局所療法に於ては、一導子を足頸或は手頸に著け、他導子をその患部に著けるのが普通であるが、或場合は二導子を患部のみに或距離を保ち、即ち胃と腸とか或は大腸と腎臓と云ふやうに著けるのである。而して導子をその局所に著けるに際し、護謨紐の不足する場合は、第十四圖に示すやうに、導子の齒形をなせる方に繻帯なり細紐なりを補足するか或は導子上より繻帯を施して導子の餘り移動せぬやうにするがよい。尤も多少の移動は差支ないので、接觸してさへ居ればよいので、餘り堅く縛らぬがよい。尙原器の方は、強弱所要の度によつて水若くは氷の中に浸し、或は單に外氣中に放置した儘でもよいのであるが、オキシヘーラーの使用力の強弱は一に原器の温度と、身體の温度との差によつて發生するものであるから、原器を冷却すればする程、身體との温差を生じて、本器の作用は益々強

くなるのである。故に本器使用に際しては、本章四項に「オキシヘーラー感作力の調節」と題して説ける所に則り、その所要の力に應じて、原器の温度を加減しなければならぬ。尤も後にも云ふ如く、如何に強力を用ゐても、十中の八九は、最初は殆んど感じのない程のものであるが、少しく使用に慣れて來れば、兩導子を身體に著くると直ちに、全身の組織の活躍する様が明かにわかるやうになるであらう。

## 二 オキシヘーラー使用法則

豫め断つて置くが、こゝに説かうとするオキシヘーラーの使用法則は、一般的な方法であつて、謂はゞ唯標準を示したものに過ぎない。前章にも述べた如く、各人の生理状態は千差萬別で、一樣には云ひ難い。故に本器使用に際しては、使用者は宜しく各自の生理状態に鑑み、それらに相應せる程度を勘考し、大體こゝに示す標準に據つて應變自在に用ゐらるゝべきで、必ずしもこの法則を墨守する要はない。現に或會社員は結核と診られた難症を、オキシヘーラーを三年著け通しにして回復したと云ひ、或同症の醫學生は日々五六回づゝ休みなしに熱濕布を併用して是も生れ更つた程の健康者となり、又或學者は

讀書中終日殆んど身から放したことがないと云ふ程の、甚だ不規則なる使用にても十分に健康を保持して、その偉大なる効果を認めて居るかと思へば、或者は僅か二三分にして逆上の氣味を感じ、甚だしきは發汗して、それ以上の使用に堪へない程の衰弱者もあるから、各人各種の生理状態、若くは時と處との相違により、多少加減しながら使用するの最も適當にして然も時宜を得たる有效なる方法である。尙各病に對しての詳細は後章「使用細説」に記述してあるから、使用者は同一似寄りの症状を見出して、これを參酌し、前述の通りその身に最も適切なる、従つて最も効果ある方法を選んで採用せらるゝがよい。

### 第一法 活動者

晝間常に活動しつゝあつて、使用の時を得ざる人は、夜間就寢時より翌朝の起牀時まで、約七八時間中力若くは弱力を以て、全身療法を行ひ、これを一週間續けたならば一週間休止するといふ風に、始終繰返へして用ゐるのである。

### 注意

全身療法としてのオキシヘーラー使用法は、前に述べた如く、先づ、二箇の綿襪を温湯又は清水にて潤し、これを各導子の凹所に詰め、その導子の一箇を一方の手の内側に、他の一箇をこれと反對の足頸の内側に、血液の循環を妨げざる程度に接觸せしめるのである。(第十八圖參照) 又、中力、弱力乃至大力の感作力の調節に就ては後

に説くところを参照せられたい。(第八三頁参照)

**第二法 平常強壯なる者** 平生強壯なる人が、一時身體に不調を生じたる時、例へば

宿醉、風邪、頭痛、疲勞等の場合は、中力又は弱力を以て、四時間乃至八時間の全身療法を施せば、一二回で平生に復するであらう。又急性腸胃加答兒、流行性感冒等に罹つた

場合は強力又は大力で、熱濕布併用の局所療法を日に二三回、一回二時間程行ひたる後は引續き強力

の全身療法を一二時間行ひ、病猶去らざる時はこの方法を反覆するのである

注意 局所療法は、導子の一箇を手頸或は足頸に、他の一箇をその病患の局所に例へ

ば胃加答兒ならば胃部に(第十九圖参照)或は二導子共に局所に接觸するのである。熱濕

布の製法使用法等に就ては、後節に詳述してある。(第八六頁熱濕布参照)

**第三法 平常虚弱なる者** 平生虚弱にして頭痛、消化不良、便秘等の痼疾を有する人は

弱力又は中力にて、晝間は四五時間、夜間は就寝時より翌朝まで全身療法を行ひ、十日

目頃に至りて中止し、中止後四五日を経て又使用し、始終これを反覆するのである。

**第四法 衰弱者** 病氣の爲に甚しく衰弱し、第三法の使用に堪へ得ざるものは、華氏七十度の弱力にて、一日二回づゝ三十分乃至二時間の全身療法を施し、斯くて二週間使用を

續けて後、一週間休止し、同様にして何回も繰り返へす。されど病者の體質著しく本器の作用に刺戟され易い時は、更にその力を弱め、且つ使用時間を短縮し、追々使用に慣れるに従ひ、徐々に力を強めつゝ、使用時間を延ばすやうにすれば、少しも不快を感ずることなく、使用の目的を達することが出来る。

**第五法 慢性病** (一)慢性病に罹れる人は、大抵心臓の働きの弱つて居るのであるから

これを回復せしむるには、更に一層の熱心と努力とを以て使用を持續せねばならぬ。若し

炎症、疼痛等のなき場合は、中力或は弱力にて晝間は四五時間、夜間は就寝時より翌朝

まで全身療法を行ひ、約十日間連用して一週間休止したる後、又前法を幾度も反覆する。

**第六法 慢性病** (二)炎症、疼痛、發熱等を伴ふ慢性病にあつては、大力或は強力を

以て一時間乃至二時間づゝ、その局所に當てたる導子の上方より、繰返し熱濕布併用の

局所療法を日に二三回乃至五六回行ひ、尙その間に強力若くは中力の全身療法をも絶

えず施し、漸く苦痛の緩和するに至りて、第五法の全身療法を熱心に反覆するのである。

**第七法 急性病** (一)急性病は大力にて局所療法を施す。即ちその局所に熱濕布を施し一時間乃至二時間づゝ、二三時間を隔て、二三回反覆使用する。又その間にも強力或は



大力の全身療法を絶えず併せ施して、病勢の進行を阻止したる後は第三法を反覆する。

**第八法 急性病** (二) 劇痛苦惱を伴ふ急性病は、華氏三十二度の大力にて一時間乃至二時間、その局所に當てたる導子の上より、繰返し熱濕布を施した後は、熱濕布を廢して、更に二三時間大力の全身療法を續け、猶疼痛止まざる時は、更に前法の熱濕布併用の局所療法を反覆使用するのである。

**小兒嬰兒** 以上の八法は普通の大人に對する方法であるが、生後一箇年未満の嬰兒には以上各使用法の項に従ひ、その約三分の一時間を使用し、一歳より五歳迄の小兒には、その約二分の一時間を使用するを適當とし、それ以上の年齢からは、大人並に使用しても差支ない。然し又大人にありても、比較的體質の虚弱なるものは前定法の弱き力と短き時間を、體質の強健なる者は、強き力と長き時間を使用するがよい。尙繰返して云ふが本器は自然療法で、元來無害のものであるから、藥物の量を過した如く、或は電氣の使用を誤つた如き害は全然ない。故に使用時間の多少、使用力の強弱と云ふことは重病者衰弱者の外は、餘り嚴重に守る要はない位である。尙本器の反動と云ふことも、使用の初期に於ては感ずる人もあり感じない人もあるが、少しく使用に慣るれば是等の心配は、全然無用であることも了解せられるであらう。兎に角本器は、如何に使用するも全く無害のものであるから、使用し得る人は、出来る限り使用して差支ないのである。

### 三 オキシヘーラー使用上の注意事項

あることも了解せられるであらう。兎に角本器は、如何に使用するも全く無害のものであるから、使用し得る人は、出来る限り使用して差支ないのである。

**使用する場所と時** オキシヘーラーを使用する場所は、室の内外に拘らず何れの處にも差支ない。然し病人は勿論健康者にありても、臥牀中暖りながら使用するのは、最も便利で且つ有効である。又、その時間も極めて自由であつて、執務中、勉強中、坐談中等に使用することもできるし、常に疲れ易き人はその歩行中にも、或は病者の旅行などには乗車乗船中に使用するのもよいのである。或は小兒が戶外に遊戯中にも使用することが出来る等、隨時隨處にその效力を發揮することは、本器の自然的な一大特徴であつて全く時代の要求に應じたものと謂ふべきである。

**獨臥** 何人にも病氣の時は、その室を隔離して獨り臥し、安靜を保つことは必要であるが、若し場合により獨臥することのできない時は、窓を半開にし、或は障子に隙を作るかして、可成空氣の流通をよくするがよい。そは云ふ迄もなく本器を使用すると、新陳代

謝の機能を増進して、皮膚の氣孔及び肺を通じて悪い瓦斯や不純物が、多く排泄せられるから、若し同室者のある時は、不知不識その人の呼吸する所となり、健康を害ふ虞れあるからである。併し普通健康者が使用する場合はそれ程のこともなく、殊に我國の家屋は外國のそれの如く密閉されず、殆んど開放されてあるから、自然に空氣の流通が行はれて居るにより、獨臥しなればならぬといふ程のこともあるまい。然し發熱ある場合の如きは獨臥といふことは必要である。

**換氣** オキシヘーラー使用中は、晝夜を問はず新鮮なる空氣の供給を十分ならしめなければならぬ。新鮮なる空氣は本療法に缺べからざるものであるから、使用中は可成障子を開放して空氣の流通を良くするやうにしなればならぬ。是れ本器は、前述の如く器械そのものが酸素を發生するのでなく、その感作する力が人體をして空中の酸素吸収をより多く盛ならしむるのであるから、克く効果を致たさしめんがためには、その攝取すべき酸素を含める、流通よき空氣の中に於て用ゐるのがよい。寒冷の季節などには、餘りに空氣の流通よき處に病體を曝し、風邪に冒さるゝなきやを懸念する人もあらうが、本器を使用して居る間は、身體の抵抗が強くなるから、決してその虞れはないのである。

**入浴** 前述の如く、オキシヘーラーを使用する時は、色々の排泄物が全身の氣孔を通じて多量に排出される。故に發熱を伴はない病氣、例へばリウマチス、神經痛、慢性胃腸病ヒステリー、子宮病、梅毒、レブラ等の病者にありては、毎日入浴することが肝要である。若し入浴出来ない時は、溫湯を以て身體を拭ひ、常に皮膚呼吸の十分に行はるゝやう清潔にして置くことを怠つてはならない。これを怠る時は、往々皮膚に發疹を來して、癢痒を感じ、且つ本器の奏效を妨げることがある。

**酒精** オキシヘーラー使用中は努めて酒類の飲用を避けなければならぬ。約一食匙位の酒精は、二十四時間内には何人の體內にも酸化せられて無害のものであるが、過量の飲酒は神経系を障礙し、消化を妨げ、身體の抵抗力を減殺するものであるから、本器使用中は成べく一切の酒類を絶つた方がよい。又、茶、コーヒー、コ、ア等の如き、神經を興奮せしむる飲料も同様である。是等興奮性飲用物のため、往々本器の効力が減殺さるゝことあるを免れないからである。勿論、何れも健康衛生の爲にはよくないものである。

**藥物併用** 元來オキシヘーラーは、急性慢性の諸症に對して、その原因を匡正する效力を有するものであるから、本器使用中は、別に藥物の必要もないのであるが、若し醫師の

診断によつて服薬せらるゝ時は、その量を最少限度にしても足りる譯で、特に劇薬を服用する時の如きは、少量にても尚よく効果を奏するから、その量を過さぬやう注意を要するのである。これ本器は心臓の働きを強く正しくし、血液循環を盛にして、新陳代謝を促進せしむるが故に、薬劑は少量にても、その効果を増すことになるのである。

**食物** 過食は何れの場合も絶対に禁じなければならぬ。オキシヘーラーは消化機能を活潑にし、食欲を増進する特効を有するから、一般の場合、食欲は必ず増進するが、この場合濫りに暴食してはならない。特に病ある人は努めて消化し易き且つ滋養に富める食物を、適當に攝取することが必要である。清水は欲するならば適宜飲用して差支ない。

**睡眠** オキシヘーラー使用中は、血液の循環を良好ならしめ、神経系を平靜にし温感を増加するから、使用中は爽快なる睡眠を催すを常とする。安静の睡眠は健康上最も必要な條件であるが、併し、その爲に定時の睡眠を妨げらるゝ、恐れあるを免れないから、なるべく不規則の睡眠は避けるやう注意しなければならぬ。

**運動** 健康者は勿論、虚弱者、腺病質、ヒステリー、神経衰弱、胃腸病、脳病等の人はオキシヘーラー使用前後に、適當の運動をする必要がある。然し發熱のある場合、或は甚

だしく衰弱せる場合は、成べく身體を安静にして、本器弱力の使用をなしつゝ、成べく新鮮なる空氣を深く呼吸するに勉むれば、運動に優る効果を見るであらう。

**導子の移動** 急性病にオキシヘーラーを使用するに當り、時々右の足頸の導子を左の足頸に、左の手頸の導子を右の手頸に、或は局所器官療法（第一八七頁参照）の如く、各部に兩導子を交互移動せしむる時は、比較的短時間にて、全身の吸酸作用を一層均等にすることあるから、導子は時々移動せしむることを必要とする。殊に卒中その他痲痺病者にあつては、必ず導子を移動せしめ、全身の機能を均等に鼓舞せしむる必要がある。慢性諸症一般衰弱者に對しても亦その事が必要である。

**高地及寒地に於ける使用法** 高地にありては、空氣中に含有するオゾンが多量に故に普通低地に於ける場合と同一の力にて使用する時は、餘り強きに過ぐる虞れあるから、斯かる場合は、稍弱き力を以て用ゐ、なほ使用時間を短縮する必要がある。寒地にあつては原器に加はる冷氣自と激しいから、特に冷却の方法を採らなくとも、却てその反應は大力以上にも上ることがあつて、反動の烈しきに困ることがある。故に、高地に於て使用すると同様の注意を拂はねばならぬ。

● 綿縛 綿縛は導子を當たる場所に、常に適當の濕潤を保たしめ、オキシヘーラーの感作力の傳達を容易ならしめ、又其處に酸化作用を盛ならしむるためのものである。その材料は脱脂綿、ガーゼ、海綿等の類を以て作り、導子の凹所より少々盛り上げる位の大さとなしそれを清水又は温湯に濕し軽く絞つて用ゐる。然るに綿縛は皮膚よりの排泄物に依て汚れ易いもので、古きものを幾度も使用すると、導子を當てた處に、往々發疹を見ることがあるから、使用ごとに新しきものを用ゐるか、熱湯に浸し消毒して後用ゐらるゝがよい。

● 原器を浸す容器 オキシヘーラーを大力乃至強力にて使用せんとする場合は、原器を冷却せねばならない。原器を冷却するには、水又は氷に浸すのであるが、その容器は陶器ガラス、甕、若くは木製の桶類を用ゐるに限る。パケツ、金盥、瀬戸引洗面器等、金屬製のものは絶対に用ゐてはならない。これ金屬製のものは原器の磁性を減殺するからである。

● オキシヘーラー消毒法 本器を流行病、皮膚病等に使用した時は、必ず消毒を行はねばならぬ。その消毒法は二十倍の石炭酸水中に原器、導線、導子、ゴム紐等を浸し、十五分間も放置した後、各部をよく拭ひて水分を除き、一時間程、日光に曝らして乾燥するのが最も簡便にして且つ完全なる消毒法である。但し普通の場合は導子の螺旋を外して、導子

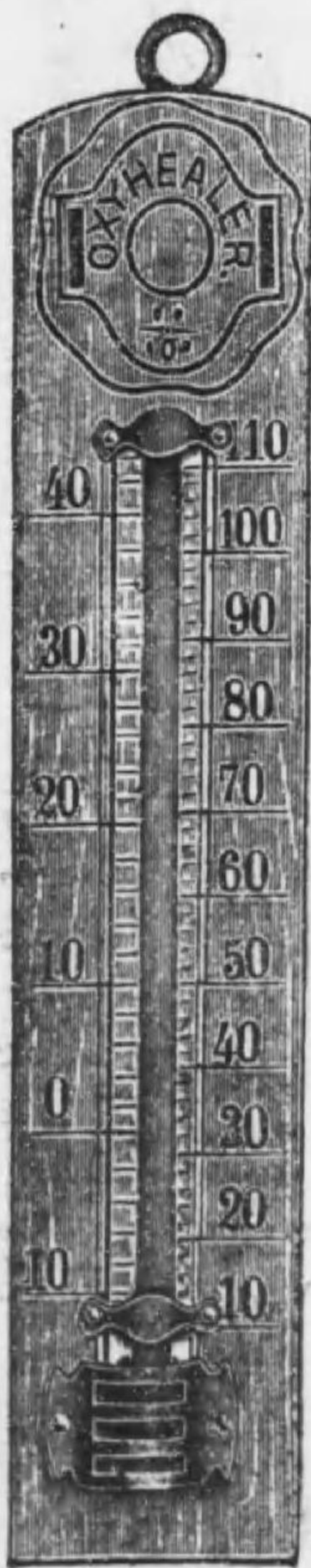
螺旋及びゴム紐等を熱湯の中に約五分間も浸すか、或は器械全體を太陽直射の下に置いて十分に日光消毒を行ふことにしてもよいのである。

#### 四 オキシヘーラー感作力の調節

オキシヘーラー感作力即ち作用の強弱は、前にも述べた如く、原器に與ふる温度の差に依つて調節するのである。即ち原器の温度を下げれば強き力を發し、漸次温度を上騰せしむれば弱き力となる。今、原器に與ふる温度と感作力との關係を示すと

弱	中	強	大
力	力	力	力
華氏七十度前後	六十度前後	五十度前後	四十度以下氷點迄

第五十圖 寒暖計



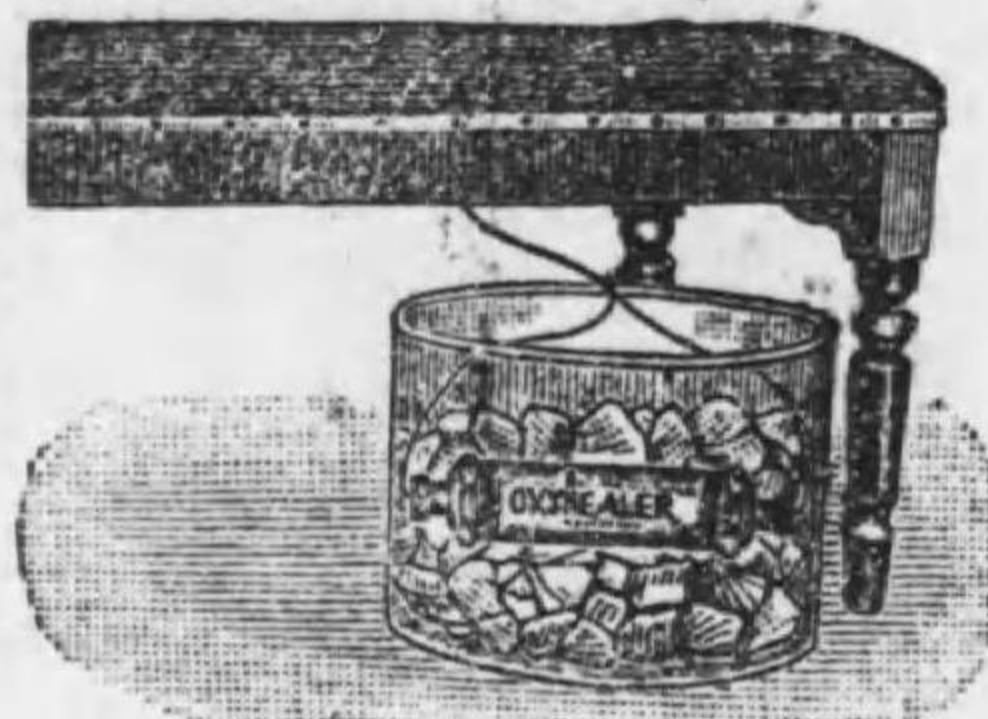
華(右)はフオーレンハイト、攝(左)はセンチグレイドの温度を示す。

以上の如くとなる。若し華氏氷點三十二度前後の溫度に原器を冷却する時は、オキシヘーラーはその作用の最大力を示す。更に氷點以下に降らしむる時は、その作用餘りに激烈に過ぎ、抵抗力の弱き人は反動多くして、殆んどこれに堪へられぬであらう。然しその弱力は、夏季八九十度の溫度にあつても微かに認めることが出来るから、全身療法を施すには大抵の場合、原器をそのまま、放置しただけでよい。溫度は高くとも效力はないと云ふ譯ではないが、若し重症者にして神速に最良の結果を得やうとするには、大體本表に示すところを標準として用ゐなければならぬ。

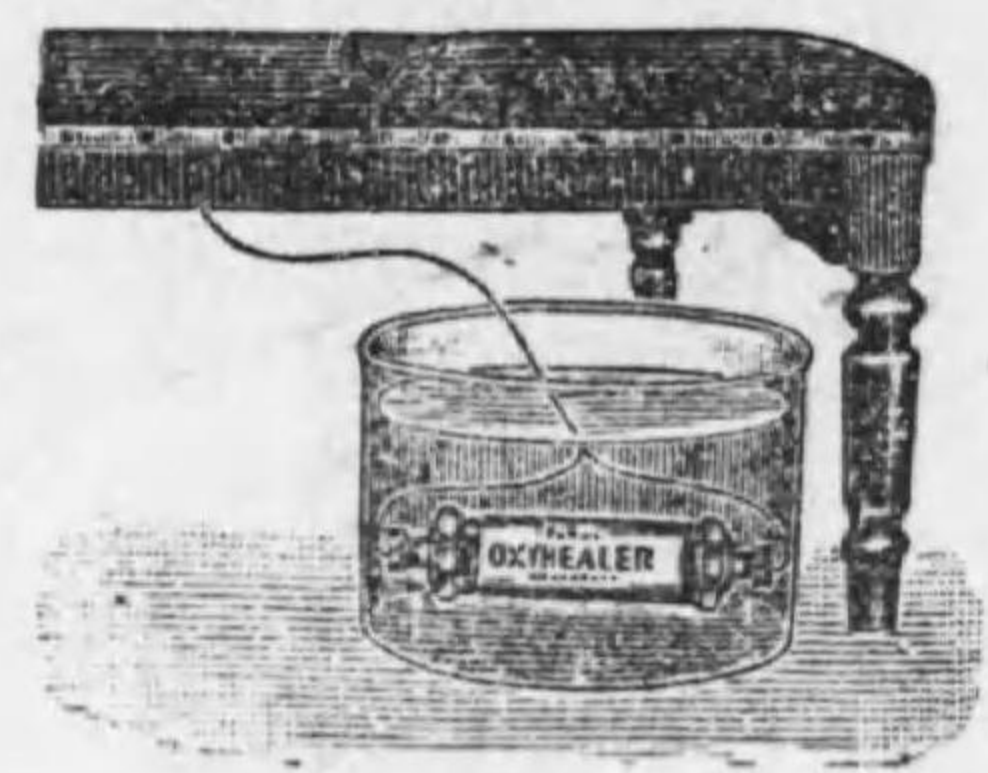
然しオキシヘーラーの使用に際して溫度を調節する場合は、四季に於ける氣溫の關係を考慮することを忘れてはならぬ。即ち夏季に於てその大力(華氏四十度以下三十二度)を得やうとするには、粉碎せる多量の氷塊中に、原器を埋めて置けば(第十六圖「イ」参照)氷の溶解し終るまでは、潛熱の理によつて、略々同一の溫度を保つものであるが、極めて重大な疾病にあつては、時々寒暖計を以て氷水の溫度を驗し、氷塊を補給しつゝ、嚴に同一溫度を保たしめなければならぬ。嚴寒の候には、原器を室内に放置するだけでも強力を得るが(第十六圖「ニ」参照)又冷水約五升の中に投入すれば、十分大力を保つことが出来る

圖六十第

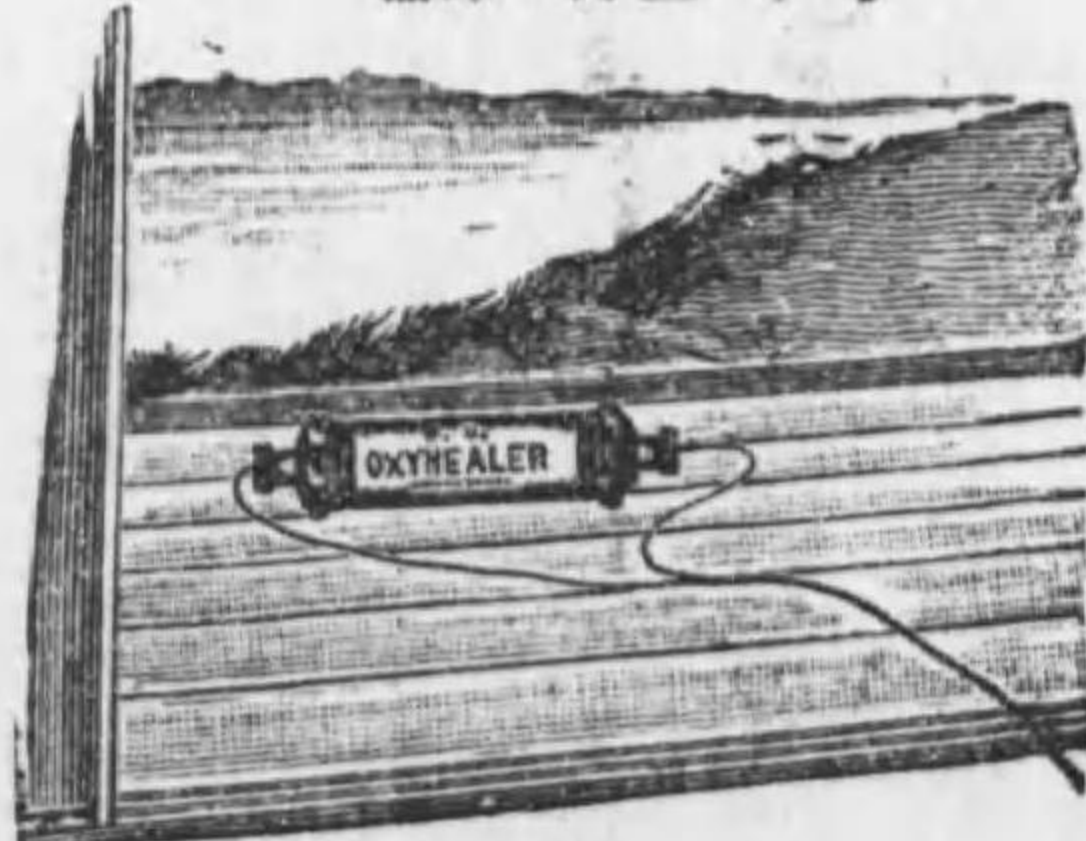
器原の中氷碎 (イ)



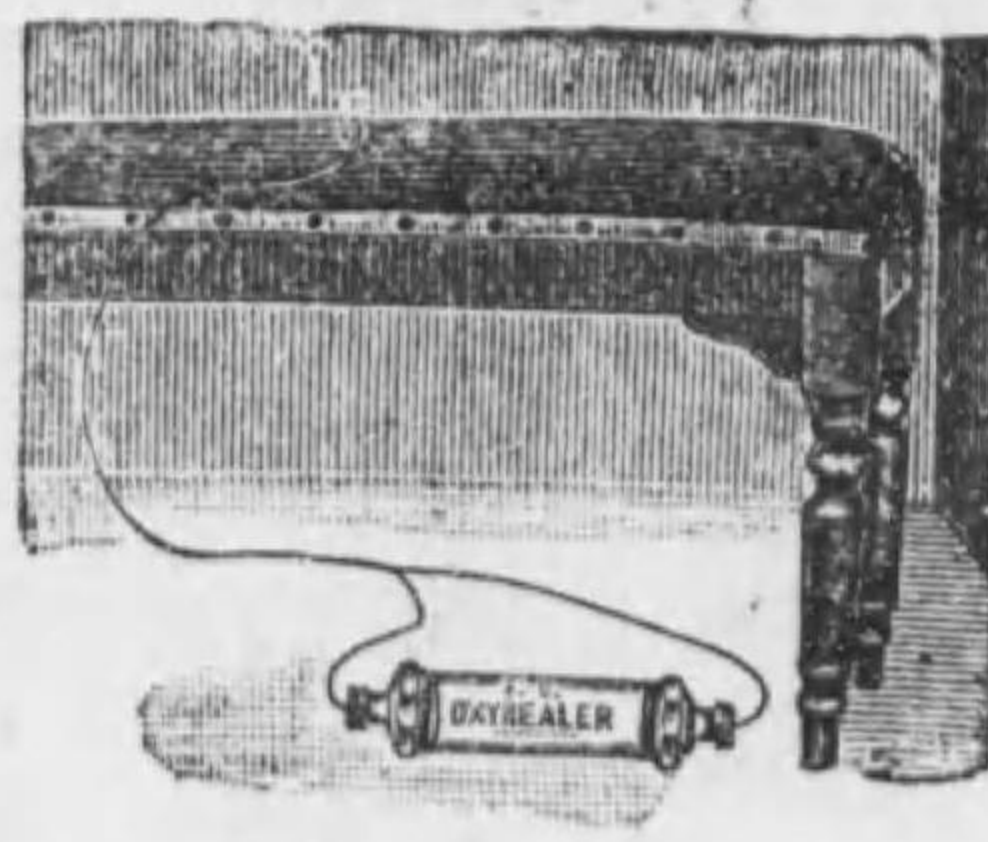
器原の中水冷 (ロ)



器原の外室 (ハ)



器原の内室 (ニ)



(第十六圖「ロ」参照)尤も室内の溫度氷點を降る七八度の寒國にあつては、却て原器を毛布或は蒲團にて包み、感作力が人體に堪へ得る限度を超えて、激しきに至らぬ様注意しなければならぬ。若し北海道滿洲の如き寒地に於て、氷點下十度位の氣溫に低下するときは

使用者の身體は殆んど燃えん許りの苦痛を感じることがあるであらう。また内地に於ても春秋二季の如きは夜間氣溫の劇變すること多く、従つて最初弱力乃至中力に置いたつもの原器も、不知不識大力になつて發汗逆上等を來たすことがあるから、抵抗力の弱き人衰弱せる者乃至子供などは、よく注意して大體に於てその調節を誤らぬことが肝要である

尙言ふ迄もなく、氣温は四季に依つて異ると共に、又晝夜によつて異なるもの故、晝と夜とでは自ら原器に加へる温度を異にしなければならぬ譯である。が、斯く四季晝夜の氣温に應變して、原器に加ふる温度の加減を嚴重に守れば、勿論それに越したことはないが一般の場合を約言すれば、先づ夏期なれば氷に埋めた時が大力、氷水に入れた時が強力冷水に投じた時が中力、そのまゝ疊に放置するのが弱力といふ位に考へて宜しい。然し漸次使用の經驗を重ねるに従ひ、身體に感ずる強弱の度は自とわかつて來るし、又呼吸の深く大なることに依つても自覺される。尙繰返して言ふが大患重病若くは極めて衰弱して抵抗力の弱き人に使用する場合だけは、上述の注意に従つて、出來得る丈け嚴密に温度の調節を守り、その感作力を適法に使用するやうにしなければならぬ。

### 五 局所療法に用ゐる熱濕布及び冷濕布

**局所用熱濕布** 身體に炎症、疼痛を感ずる症狀或は痲疾に對して、その局所に熱濕布を施すことは、オキシヘーラーの效力を知らんとする、最も大切な要件の一である。その局所へ熱濕布を施すことは疼痛を緩和し、興奮せる神經を鎮靜し、緊張せる筋肉を弛緩せ

しめて、漸次局所の血管を擴大し、血液の循環を促進して局所の酸化力を増加し、體內毒素の撲滅に資す等多大の效果がある。元來酸素は最もよく寒冷の場所に發生するやうであるが、熱が化學的作用を盛ならしむといふことも亦著しい事實で、酸素と他物との化合は熱に依つて亢進される場合が多い。本器を使用するに熱濕布の必要なる所以は茲に存するのである。即ち熱濕布を患部に接觸せしめた導子の上から覆ふのは、恰も水が鐵材に鏽を生ぜしむると同理で、その局所或はその附近に多大の酸化力を起さしむるからである彼の實扶的里亞、肺炎、喉頭格魯布、盲腸炎、膽石、腰痛、膀胱加答兒、關節僂麻質斯或は細菌の侵入に基くといふ炎症及び疼痛の如き専ら局所だけを冒すものにあつては、熱濕布は最もよく患部の酸化作用を増進し、迅速に且つ的確に效を奏することは、その導子に附著する酸化物の多いのや、導線の腐蝕することの速かなのを見ても明かである。

然るに神經炎或は深腔中に生じたる膿瘍などに熱濕布を施すときは、體温亢進して冷汗を發し惡感戰慄して却て大なる疼痛を訴ふことがある。斯の如き場合には、直に外科醫に就きて手術を受け膿汁を排除して後に、本器使用と共に熱濕布を施せば、奏效迅速であらう。又潰瘍或は腫物の如き、皮膚面に於ける炎症に熱濕布を施す時は、必ず先づその

患部に脱脂綿又はガーゼを薄く濡らして置き、その上に導子を著けて、繰返し〜熱湿布を施さねばならないのは、その局所に酸化物の排出多きためである。

**熱湿布使用法** オキシヘーラーの使用に熱湿布を併用するには、その疾病の程度に應じて體質に従つて、使用時間を伸縮するの必要はあるが、普通の場合一回に三十分乃至二時間間を限度とする。熱湿布は大なるタオルの類を五六枚折りたゝみ、度々熱湯に浸して絞り繰返し〜その温度を保持する時は、大凡一時間の後に發汗を催すが、その熱湿布の完全ならざる場合は、發汗するまで二時間以上を要するのが普通である。若し、斯くても尙發汗せず、解熱鎮痛せず、その反應を認め得ざる時は、更に使用時間を延長するも差支ない然し、大凡二時間位を限度としなければならぬと云ふは、概して衰弱者には、疲勞や逆上を感じるからである。尤も本器を併用する時の熱湿布は、一回よりも二回三回と使用度數を重ねるに従つて、その反應が速かに且つ著しくなるものであるから、最初一二回の使用に十分の反應がないからと云つて、その効果を疑ひ中途に廢してはならぬ。尤も發汗するにしても最初は甚だ緩慢なものであるが、三四回目になつて初めて發汗らしき發汗を見るのが常である。尙熱湿布の冷却するを防いで、その温度を保たしめんには、その上より油

紙を置き、これを乾いた毛布の類を以て覆ふがよい。

熱湿布を長時間使用する際には、その反應を速かならしむる爲めに、十分乃至二十分毎に局部の導子を取り除き、四五分間、その局所に冷湿布を施して後、再びそこに導子をつけて又熱湿布を施すがよい。この際使用者が冷湿布を厭はゞ、手又は冷水に浸せる手拭を以て局所の皮膚面を徐々に摩擦するもよい。これは外部の血管竝にこれに關聯せる内部の器官を鼓舞興奮せしむる一助となり、又病者に快感を與ふるものである。

**熱湿布製造法** 熱湿布を造るには大きなタオル、毛織物類、綿フランネル等を厚さ一二寸位に成るべく厚く廣く折り疊み、患部及びその附近を覆ふに足る程の大きさとなし、これを蒸釜等にて蒸熱するか、或はその兩端を握つて中程丈を熱湯中に浸し、堅く絞つて用ゐるのである。また普通の手拭代用のタオルを二三枚合せて折り疊み熱湯中で絞り、それにて局所一面を覆ひたる上に熱湯を入れた護謨湯タンポ或は煮熟したる蒟蒻をその中に入れて置けば、幾分永く温度を保つことが出来る。或は又場合によりビールの空罎に熱湯を十分に詰め込みたるもの四五本を束ね、湯タンポの代用とするも簡便な方法である。

**冷湿布** オキシヘーラー使用に於ての冷湿布は、心臓の亢進を鎮靜し、神経系を緩解し

體温を下降せしむるに必要である。或はその炎症局部の血液を冷却し、或は弛緩せる筋肉及び血管を好調ならしむる爲に、熱濕布使用中は、時々冷濕布をその局所に代用し、四五分間その局所を冷却することは、極めて有効な方法である。冷濕布を施すときには決して導子の上より行うてはならぬ。必ず一時その導子を取除いた後に施すのである。尙心臟の亢進する人に本器を使用する場合は、始終心臟の部に冷濕布を施して置き、その兩導子は胃腸の部或は手足等、心臟より離れたる處に著けるがよい。

**オキシヘーラー** 使用中に各種の發疹或は發熱等ある人は、咽喉部或は頭部を除く外は決して冷濕布を用ゐてはならぬ。尙冷濕布を施した後は、その局所の何れの部分を問はず成べく外氣に觸れしめず、乾燥した手拭を以て能く拭き取り、且つ摩擦して皮膚の抵抗力を強めることが必要である。然らざれば慢性癩麻質斯、痛風、神經痛の如き疾患に對しては却て疼痛を復活せしむる虞れあるからである。

**冷濕布製造法** 冷濕布は新しい手拭又は白木綿類を五六枚折り疊み、その患部を覆ふに足る大さとし、これを冷水に浸して堅く絞つて造るのであるが、その大さは略々熱濕布と同様のものとし、厚さは少しく薄くもよいのである。

### 第三章 使用細説

#### 一 オキシヘーラーの使用範圍

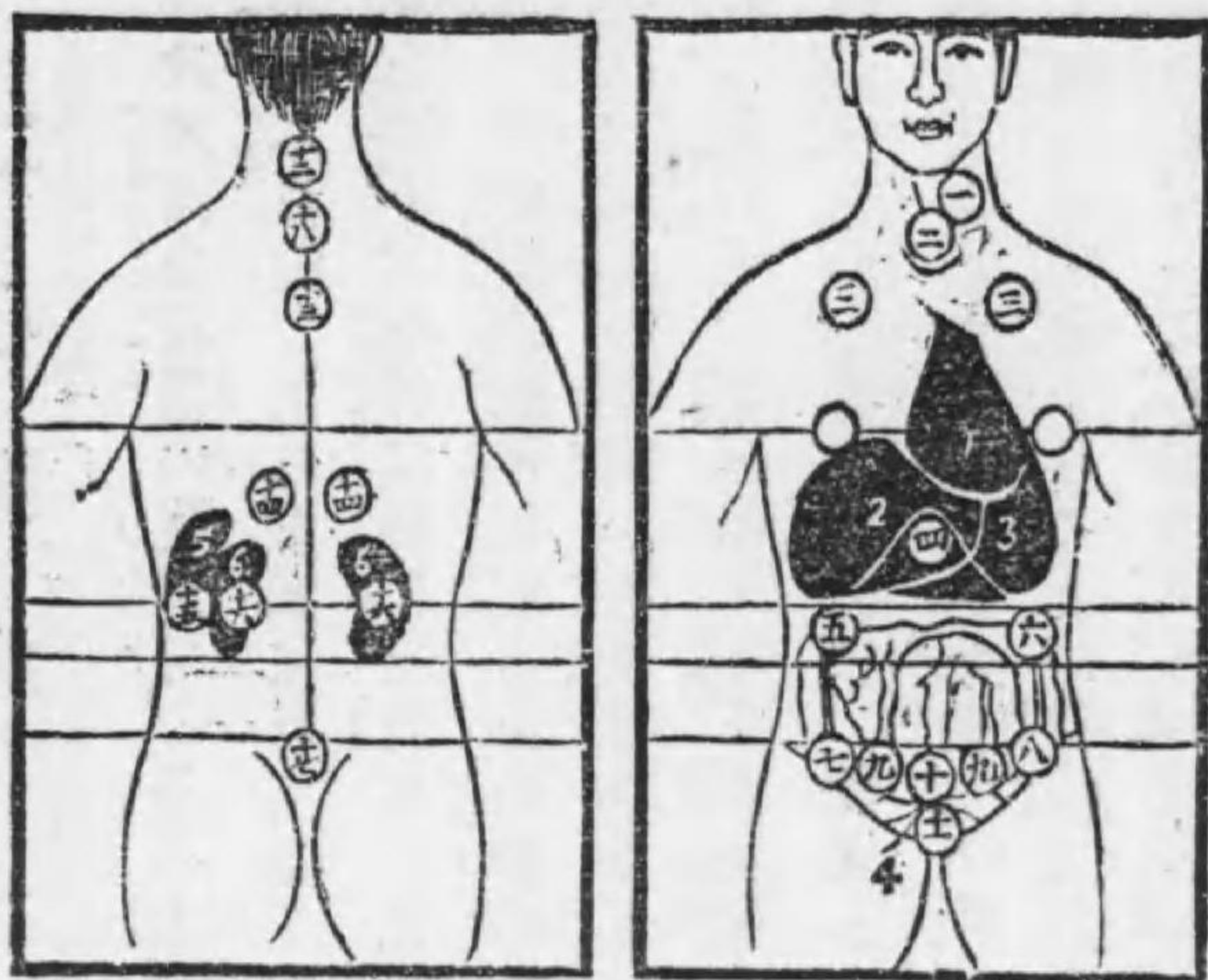
前章に於て既に述べたる如く、オキシヘーラーの作用は疾病の内部的なると外部的なるとを問はず、急性と慢性とを問はず、その症状の重きと輕きとに拘らず、既にその組織を缺損し、心臟機能が再び喚起し能はざるまでに破壊せられざる限りは、必ずその生活力を回復せしめることが出来る。彼の老衰病、心臟諸症等の如く、較々組織の破壊に近きものにしては、全くそれを回復せしめざるまでも始終、生理上の調節を保てば日常の生活には差支なき健康を維持することが出来る。併し急性病は往々にして豫期せざる併發症を惹き起すことがあるから、豫め醫師の診断を受け、その経過を明確にして成るべく病症に適應せる使用法を施すがよい。肺炎、肋膜炎、實扶的里亞、流行性感冒、扁桃腺炎、赤痢腸胃加答兒、消化不良、その他の急激危険なる疾病に對しては、一時の猶豫もなく神速に本器を用ゐれば、概ね二十分乃至一時間にして脈搏、呼吸、體温等が著しく調節して思はぬ良好の結果を見ることが出来るであらう。然し最初から本器のみを使用するに疑懼の



念あらば、藥物を併用するも差支ない。本器は速かに使用すればする丈け経過のよきことは、その脈搏の刻々に調ひ行く現象を見ても明白なる事實であつて、恐らく何者か斯の如き具體的の速效を現すものあらうか。前にも謂へる如く、本器はまた藥物の奏效を顯著にし迅速にする化學作用を助くるから、服薬しつゝ、本器を併用することは更に差支なきのみならず、却て藥物は少量にてもよくその效を奏す。尙本器を使用すれば病後の衰弱は全く無いと云つてもよい位で、病牀にあつても元氣衰へず、良好の経過を見ることが出来る如何なる場合でも使用を躊躇したり、怠つたりしてはならぬ。飽まで使用を繼續されたい。而して本器によりて奏效すべき諸疾病を一々列挙すれば限りがないのみならず、本器は元々、生活力を盛ならしめ、その自然良能を喚び起して、自ら病根を驅逐するものであるから、一々病名などを尋ねるよりは、一時も忽にせず、早く本器を使用して、唯その脈搏、呼吸、體温が健康者の如く、規則正しくなつて生理上の調和が行はれるやうになれば、本器使用の目的は達するのである。然し病名が判然し、その局所が知られた場合はオキシヘーラーの應用上それに越したことはないから、初めて、本器を使用せられる人の便宜のため、或は病名は判然してゐても、應用の方法を知らざる人のため、又は診断不明

にして困難を感せられる人などのため、以下主なる疾病に對し、その應用方法の一斑を説かうと思ふ。

圖七十第  
解圖所局の用使—ラーヘシキオ



- |       |                             |   |
|-------|-----------------------------|---|
| (一)   | 心臓                          | 1 |
| (二)   | 胃                           | 3 |
| (三)   | 脾臓                          | 5 |
| (四)   | 肝臓                          | 2 |
| (五)   | 膀胱                          | 4 |
| (六)   | 腎臓                          | 6 |
| (七)   | 扁桃腺及喉頭加答兒、實扶的里亞、甲狀腺腫        |   |
| (八)   | 百日咳、喘息、氣管支加答兒               |   |
| (九)   | 肺諸病(左右とも疾病の所在により位置を更ゆ)      |   |
| (十)   | 胃肝諸病、便秘、神經衰弱、頭痛             |   |
| (十一)  | 便秘、肝臟病、膽石、黃疸                |   |
| (十二)  | 便秘、神經衰弱、腸加答兒                |   |
| (十三)  | 盲腸炎(盲腸部、蟲様突起部)              |   |
| (十四)  | 便秘、神經衰弱、下痢、赤痢               |   |
| (十五)  | 卵巢炎、ヒステリー(本症の多くは生殖器の異狀多し)   |   |
| (十六)  | 子宮疾患                        |   |
| (十七)  | 膀胱加答兒                       |   |
| (十八)  | 鼻加答兒、眼病、後頭痛、腦膜炎             |   |
| (十九)  | 喘息、喉頭炎(殊に發熱或は惡寒ある時)肺諸病の交互療法 |   |
| (二十)  | 胃病、肩強硬、胃性眩暈(四)の交互療法         |   |
| (二十一) | 脾疾患(貧血症(四)(五)(六)等と併用すべし)    |   |
| (二十二) | 腎臟炎                         |   |
| (二十三) | 子宮病、膀胱加答兒等、坐骨神經痛は局部と及稍上部    |   |
| (二十四) | 氣管支加答兒、喉頭炎、喘息等(三)と併用して可     |   |
| (二十五) | 正中線は脊髓の徑路、脊髓諸症、脊髓性痲痺癱瘓等     |   |

## 二 心臓病

**心臓病** は所謂血行器の疾患で、その主なる原因は痲瘋質斯、猩紅熱、實扶的里亞、腸窒扶斯及消化不良等であると云はれてゐるが、夫等は本病の近因であつて主因は心臓の運動が不調和となり、血行に障礙を及ぼした結果に過ぎない。吾々の長き實驗に依れば、何等かの原因で、神経に故障が起ると心臓の運動が急速となり、或は緩慢となつて、血行器の調和を失ひ、種々の疾病が誘發されるものと見るのが至當のやうである。その證據には有ゆる病者に對して、第三圖に示す脈波計を以てその脈搏を検すれば、必ず心臓に異状のあることが歴然とわかると同時に、オキシヘーラーを使用すれば心臓の働きの時々刻々に調節されることがわかる。これ如何なる疾病も血行器が調節されて生活力が盛になれば期せずして健康の回復することが當然であらう。實に心臓は生命の中樞動力で疾病の難易も健康の良否も、一に心臓の調節如何に係るものである。然るに従來の療法はこの點に重きを措かず、偶々考慮を拂ふ人はあつても、何等の有害を伴はないで、自然に心臓の働きを強く正しくする方法がなかつたのであるが、この問題はオキシヘーラーに依つて容易に

解決されるやうになつたのである。事實は誠に明瞭である。即ち本器を使用すれば、何等の有害を伴はないで、頗る自然的に吾人の原動力たる心臓の働きを強く正しくすることは多くの説明を要するまでもなく、使用瞬間にしてその脈數脈形の調節されることは、第四圖以下に示す通りである。故に従來難治と見られてゐた心臓病に對しての本器の効力は全く天下獨歩と稱しても差支ない。その種類が心臓瓣膜であれ、心臓肥大症であれ、或は狭心症であれ、心悸亢進症であれ、それらは深く問ふ必要はないので、少しく熱心に使用すれば何れもその違和を去つて健康に回復するのは容易である。但し病勢著しく進行し器質的に破損した後では、如何に本器を以てしても、これを回復するは困難であるが、然るも血液の循環を良好にし吸酸作用を盛にして、生活力を増進する本器の作用は、從つて心臓の代償機能を盛ならしむるから、病勢を制止し、病苦を和げ得ることは事實で、幾多の實驗例が證明してゐるからよく参照せられたい。

**使用法(一)** 本病者は、身體の運動、精神の過勞を避け、食物は極めて消化し易いものを選んで少量づゝ攝り、一度に多量を食べることを避け、酒、珈琲、茶、煙草等の如き刺戟性のものは成るべくこれを禁じ、また便通に注意しなければならぬ。使用法は第五

法に據り一導子を手頸に他導子を足頸に接觸し、中力を以て二三時間の全身療法を行ひ  
 二三時間休養の後、又前法の如く一二回これを行ふ。然して夜間は就眠より翌朝起牀ま  
 で、弱力の全身療法を續けるがよい。

(二) 病勢進行して、呼吸困難となり、尿量減少して浮腫を生ずるに至つた時は、必ず  
 心臓部に冷濕布を施し、又は氷嚢をつけてこれを冷さなければならぬ。器械は第六法  
 に據り一導子を手頸なり或は足頸なりに接觸し、他導子(患部に接觸する導子を他導子  
 と云ふ、以下これに倣ふ)を胃、腸、肝臓等に交互に接觸して、その上に熱濕布を施し  
 各所に三十分間づゝ約一時間行つた後は、中力を以て二三時間全身療法を行ふ。斯くて  
 先づ第一回の使用を終へ、その後は三四時間を過ぎて、又前法を反覆使用する。

(三) 心臓性神経衰弱症に伴ふ軽症の心悸亢進は、就眠より翌朝起牀までの間、第五  
 法に據り弱力の全身療法を行ひ、尚毎日一回づゝ強力を以て一導子を足頸に他導子  
 を胃腸に著け、二時間前後の局所療法を行ふがよい。

### 三 パセドール氏病

**パセドール氏病** は甲状腺の機能障碍より來る中毒症であるが、原因は心臓機能の衰弱に  
 ある。その症状は脈搏急速にして一分間に百乃至百八十に至り、甲状腺腫大し、眼球突  
 出す。その他兩手の震顫、下痢等を發し、また間々糖尿病、ヒステリー、癲癇、精神病等  
 を併發することもある。從來は殆んど不治の病氣とされてゐたが、オキシヘーラーは、よ  
 く瞬間にして、その心臓機能を調節し血液循環を良好にする事實に徴しても、本病は  
 必ず憂ふべき程の難治でない。然し本病の徴候が明になるまでは、相當の病路を経て居  
 るのであるから、持久的の覺悟で使用せられたい。日夕怠らず使用すれば、難症も格別の  
 時日と費用を要せずして、遂に回復し得るであらう。

**使用法** 第七法に據り導子を手頸又は足頸に結び、他導子を甲状腺の腫脹部に當て、そ  
 の上より一時間位熱濕布を施す。次に他導子を胃腸の部に移動し、又一時間程熱濕布を  
 施した後は、中力の全身療法を行ふこと二時間にして一回の使用を終り、これを毎日二  
 三回繰返へし、夜間は終夜全身療法を行ふ。かくして倦まず撓まず持続的に使用すれば  
 必ずその効果を擧げ得るであらう。

### 四 瘰癧

**瘰癧** は附近の結核より來るもので、主として十歳乃至二十五歳までのものに多く見る病氣である。初期は一二の淋巴腺が硬結腫脹して頑固に癒えず、それに次で附近の淋巴腺が腫脹し、互に癒著し、特有な腺塊を構成するが、遂に破れて膿液を分泌する。

從來本病の療法としては、多くはその化膿を俟つて切開を行つて來たのであるが、その結果は大概不良で、一つの硬結を取除けば、後から又、新しい硬結が出來ると云ふ風に何回手術を行つても決して回復せず、遂には顔色蒼白、形容枯槁し、結核性を帯びたる肺病、肋膜炎を誘致することは、殆んど同一の徑路である。然るにオキシヘーラーを使用すると、忽ち心臓の働きが強くなり、血液の循環が良好に行はれて、吸酸作用が盛になり自然良能が活潑に働いて來るから、この難病も漸次その痕蹟を潛め、切開手術の危険苦痛を味はずして、よく回復することは、幾多の實驗例が證明する通りである。實に瘰癧に對するオキシヘーラーの効果は、特に顯著のものであるから、本病に罹られた人は先づ何を措いても本器を使用し、一生拭ふべからざる不具者となるなかれ。

**使用法** 第七法に據り原器を大力乃至強力とし、二導子を頸部の局所に當て、その上より患部全體を捲き得る熱濕布を一二時間施し、終つて二三時間全身療法を行ふ。この方法を毎日二回繰返し、時々頸部の代りに胃腸にも熱濕布併用の大力局所療法を施し熱心反覆すれば、難治と云はれたこの疾患も少しの痕蹟も残さず、除去するのである。

### 五 不眠症、神經衰弱、生殖器衰弱、貧血症

**不眠症** は多くは神經衰弱の一徵候として現はれる。この病氣は肉體上の苦痛であるよりは、精神上的の苦悶である場合が多い。それが昂じてゆくと、全く神經を惱まし心臓を傷め、遂には癒やし難さに至るであらう。又疾病の先驅症として來ることもあるから、等閑に附すべきものでない。

**使用法** 第五法の中力を以て、全身療法を行へばよいが、時々強力にて半時間位づゝ胃、肝、腸等の各部に熱濕布を施す。また、脊髓の下部にも、同様局所療法を施すがよい。もし足部が冷える場合は、温湯若くは熱濕布でこれを温むれば腦の充血を減少して血液の循環を均等ならしむるの效がある。それから時々適宜の運動をなすことと、不

定時の睡眠をなさぬことは、本病には殊に必要である。

●**神経衰弱** 本病は不眠症と同じく、精神過勞、過激の勞働、喫煙過度、手淫、過淫等の悪習慣から起る。これを制するには先づその原因たる悪習慣を矯めると共に、精神を過度に使用することを禁じ、適宜に運動し、成るべく安眠を得るやうに勉めなければならぬ。  
●**オキシヘーラー**は神経衰弱の原因たり結果たる消化不良及び便秘を制遏するに、唯一無二のものである。又神経衰弱は身體の衰弱と相伴ふものであるから、常に本器を用ゐてその生活力を増進すれば、本病は、従つて回復する。然しこの病者ほど、自分で自分の病氣を重らせる傾きがあり、或はその甚しきは平素脈搏が八十位の人でも、自分でこれを檢する時は忽ち百前後に上つてゐたり、輕微の發熱の場合にも、自分では高熱の様に感じたりして、自ら努めて病勢を亢進せしめることがある。實に人間の神經程繊細で感じの鋭いものはないのであるが、それが病的になると一層鋭敏になつて、僅な外來の刺激にも些々たる精神衝動にも、直に影響を受け易くなるのである。而してこの刺激は同じ細胞の連續である心臟に忽ち波及するから、この病氣の特徴として必ず心悸亢進が伴ふ。即ち心臟と密接なる關係のあることがわかるのである。故に、この病氣を除かんとするには、何より

も、先づ心臟の働きを強く正しくし、血液の循環を良好にして、生活力を盛にせねばならぬ。さうすれば全身の神經は自ら強靱となり、榮養を回復して、遂に數年惱まされて百方回復の效なかつた、陰慘な疾病から脱がれることができるのである。全く本器は本病の原因たり結果たる心臟の働きを強く正しくし、消化不良及び便秘を制遏するに唯一無二のものであるから、常に本器を使用して、食慾、便通、安眠等を順調ならしめ、その榮養を攝取するに差支なければ、この病氣に罹るやうなことはないのである。

●**使用法** 第五法の中力を以て全身療法を施すがよい。又その病勢に應じては第六法を以て、日に一二回づ、他導子を脊髓の上下、胃、肝臟、腸等の各部に交るゝ接觸し、胃に半時間、肝臟に半時間と云ふが如く、強力きやうりきの局所療法を施すがよい。悪性の消化不良を伴ふものに於ては、食後直に凡そ半時間乃至一時間胃部に局所療法を施せばよい。  
●**生殖器衰弱** 本病は陰莖の器質的變性、或は情慾缺乏、恐怖、憤怒、耻羞等の精神感動房事過度、手淫、慢性痲疾、脊髓癆、糖尿病、疲勞、老衰、或は臭剝又は忽布腺の中毒等もその原因である。

●**使用法** 輕症は第五法に據り、その重きものは第六法を以て前療法の如く繰返し行へば

漸次その不眠症、神經衰弱は輕快となり、自然榮養回復し、生活力旺盛となりて、本病は自と驅逐さるるであらう。

**貧血症** 本症は、専ら消化不良、榮養不足、空氣日光の供給不足、心身の過勞、その他漫性の疾患等が近因である。而してその症候は、一般に皮膚蒼白く、動もすれば呼吸促進心悸亢進等を來すのである。

**使用法** 第五法の中力を以て全身療法を施し、尙、一日二回は第六法の強力を以て胃腸、肝臟等の各部に他導子を移動し、その上より三十分間、交るゝ熱濕布を併用して、諸器諸臟を鼓舞するがよい。

### 六 頭 痛

**頭痛** は、主として血液或は、神經系の故障より起るものである。腦髓の血管に入つて來る血液が甚だしくその量を増し、頭蓋内の容積が、これを容るゝに堪へられなくなる時は忽ち頭痛を惹き起す。而して、斯かる血行不調の原因となるものは、心臟病、消化不良齒痛、眼病、鼻腔病、腎臟病、便秘、婦人ならば卵巢炎、月經不順等の諸病である。また

各種の熱性病及び脊髄炎症等も、血液中に毒素を醸し出すことにより、頭痛を誘發し、儂麻質斯、痛風等も、神經系に故障を來すことによつて頭痛の誘因となる。

**使用法** (一) 頭痛は以上述べたやうに、他の疾病の一徵候としてあらはるゝ現象であるから、これを回復させんが爲めには、先づ、その原因たる諸病を制遏しなければならぬ即ち一導子を足頸に接觸し、他導子はその、原因をなすところの諸疾病の患部たる脊髓胃、腸、肝臟部等に接觸して、中力乃至強力を以て三十分乃至一時間の熱濕布を施し然る後二三時間の全身療法を行ふのである。

(二) 便秘の場合には灌腸を行ひ、脚部を温めることを忘れてはならぬ。その他、便秘の條下に説いた療法を施し、その便秘を絶やす時は、便秘から來た頭痛は從つて直に除去されるであらう。(第一二八頁便秘參照)

### 七 神經痛、坐骨神經痛、神經炎

**神經痛** は主として、梅毒、儂麻質斯、惡液質、慢性便秘等から、或は感冒、濕氣に冒されたるため、或は神經の外傷、齶齒、骨間に通ずる神經幹の壓迫等から、或は舊い創痕

や、筋肉の緊縮及び硬化等からも起るもので、従来は一般に治療困難と云はれてゐた。

●**使用法(一)** 本病に使用するには、第一排泄機能の活動を盛にし、血液中の有毒物を排除しなければならぬ。又本病は常に腸衰弱を伴ふ故に、便秘に對する使用法と同じく一般に胃、腸、肝臓等に局所療法を施して、その排泄機能を盛ならしめなければならぬ。先づ本病には、凡て第八法に據り、一つの導子を肝臓の部分に、他の導子を疼痛の局所に接觸せしめ、兩所共に大なる熱濕布を施し、且つ頭部を冷やし、脚部を温めて、所謂頭寒足熱の法を併せ行ひながら、本器を反覆使用せらるゝがよい。

(二) 肋間神経痛の場合には、他導子をその局部及び背部の中央なる脊髄上に接觸し、腰部神経痛の場合には腰部に、顔面神経痛の場合には、顔面のその局所に接觸し、その導子の上より熱濕布を施すのであるが、顔面の場合には眼球の充血を招く恐れあるから、他より時間を短かくし、その後導子を腹部に移して、そこだけに多く熱濕布を施すがよい。又頭痛ある場合は、概して胃部に局所療法を施すと神速に效を奏する。

(三) 坐骨神経痛即ち脚部の大神經幹に於ける神経痛にありては、他導子を脊髄の下端若くは臀部に當て、局所療法を施し、且つ膝關節の下端に至るまで、大腿後面に沿うて

交互に同法を行ひ、熱濕布を熱心に施せばよい。

●**神經炎** 神經炎は、神經或は神經鞘に炎症を生ずる病氣で、屢々神經實質の消耗、並にその病的神經によつて支配さるゝ部分の筋肉の消耗を來し、且つ神經の腫脹により近隣の筋肉が壓迫せられて疼痛を起す。又、多發神經炎にあつては、身體諸所の神經に炎症を起し、その炎症を起したる神經の支配する筋肉の痲痺、知覺の減退或は消失を來し、脚氣にありては水腫を呈することが多い。而して是等神經の炎症は、大抵血液中の毒素に基因するもので、例へば、酒類、鉛、砒石の中毒とか、糖尿病、痛風とかの如きは著しき例である。又、腸室扶斯、實扶的里亞の如き病氣に於ても、血液中に、毒素の生ずる結果として、神經炎を續發することが屢々ある。

●**使用法** 本病に對しては、第五法の中力を以て全身療法を施すがよい。然し、こゝに注意すべきは、本病に對しては、その疼痛の局所に、決して熱濕布を施さぬがよい。若し使用の際却て惡徵候の益々著しきを感じた場合は、これ器械の一次的反動であるからその使用時間を短縮し、餘り永く使用せざるがよい。此様な徵候ある人は、四五日間休養した後、再び使用を始め、漸進的に時間を延長しなければならぬ。導子は時々左右

の手頸足頸とに移し換へ、又時々強力を以て局所器官療法（第一八七頁参照）をも行へば、一層顯著なる効果を見るであらう。

### 八 急性及び慢性儂麻質斯竝に痛風

**儂麻質斯**の病源に對しては、未だ一定の學説がないと云ふが、その徴候として著しきは、關節或は筋肉に、疼痛若くは腫脹を來すことで、これは毒素が血液中に侵入せる爲め、或は毒素を體外に排除すべき機能、即ち新陳代謝に異常を呈する爲めと考へられる。  
**痛風**は、四十歳以上の人を冒すところの、遺傳性の病氣で、主に安逸坐食の人に多い初めは、手足等の小關節を冒し、その關節の疼痛は夜間に於て發作するを常とする。而して、儂麻質斯も痛風も、共に消化器の障礙がその誘因となる場合が多い。故に、本病に方キシヘーラーを使用するは、血液に多くの酸素を供給して、血管中に停滯せる毒素を除くと共に、消化機能を鼓舞して消化器の障礙を除き、併せて肝臟及び腸等の器官の活力を増進せしめんが爲である。現に多年、頑固に手足のきかぬ人で、元の通り回復したのも尠くないことは、毎回の實驗例に見る通りである。

**使用法(一)** 急性に對しては第八法の大力使用法を、慢性に對しては第六法の強力にてよい。即ち一導子を左右の足頸に交るく著け、他導子は疼痛、炎症のある局所へは勿論、胃、腸、肝臟等の各部にも移し、その上より熱濕布を行ふことを怠つてはならぬ。尙反動少き人は、平素中力の全身療法を撓まらず用ゐるがよい。

**(二)** 慢性儂麻質斯の頑固なものを急に回復するの困難であるのは、その病氣の結果たる骨膜及び軟骨の肥厚が短時日に於て回復することのむづかしいからである。然し本器の使用によつて體中に吸収せられたる酸素は、本病の病源たる血中の毒素を驅逐する作用をなすから、辛抱よく使用を續けるならば、必ず快方に赴くことは疑ひ無い。而して慢性儂麻質斯に對する使用法は、第六法の強力と局所器官療法とに據るがよい。

**(三)** 補助療法としては、オキシヘーラーの使用後、柔い手拭で患部を摩擦し、時々入浴するがよい。食物の攝生は、他の疾病に於けると同じく十分に注意を拂はねばならないが、殊に榮養の缺乏は、本病の回復を難からしむること一層甚だしい。

### 九 水腫、白腫、陰囊水腫、靜脈腫



**水腫** は血液中の水分が、毛細血管を通じて、弛緩せる組織及び體腔に滲み出したるものである。即ち水腫は、毛細血管の側壁が脆弱なることを示す、一つの徴候と見て宜しい水腫は本来、これを獨立の疾病として見るよりも、他の疾病の一徴候として見る可きものなのである。例へば、心臟、腎臟等の如き重要な器官の衰弱、或は、全身の衰弱、過勞不攝生、貧血、血液中の毒素等の爲め血管壁が變質し、又は炎症を發すること等の原因から水腫は生ずるので、根本的に水腫を回復させんが爲には、その原因をなすところの、以上の諸症を先づ制遏せなければならぬ。

**使用法(一)** 慢性心臟病、慢性腎臟炎、肝臟硬變、或は癌腫等の重病に起因する水腫は甚だしき組織の變化を伴ふを以て、それ等の諸症を先づ以て除かぬ限り、ひとり水腫のみを取るといふわけには行かぬが、その他の水腫に對しては、第六法の強力に據り肝臟及び腸の上に他導子を接觸せしめ、熱濕布を併用して後、毎日一回づ、第五法の中力に據りて全身療法を行へば、效果の著しきものがあるであらう。

**(二)** 肋膜炎後の水腫に對しては、胸廓の患部に第六法の局所療法を施すがよい。或は使用中に、血液と粘液とを含んだ咯痰を見ることがあるが、それは却て喜ぶべき徴候で

速かに、回復すべきことを示すものに外ならないから、心配するには及ばない。

**(三)** 慢性の疾患に伴ふ難症の水腫には、第五法の中力を以て全身療法を行ひ、又一日に一回づ、強力を以て一導子を足頸に、他導子を腹部に接觸せしめて、その上より熱濕布を施して後、二三時間中力の全身療法を行ふがよい。

**(四)** 肺炎又は猩紅熱の如き、熱病乃至衰弱過勞等に起因する水腫に對しても、オキシヘラーを使用すれば、必ず著しい效果を示す。その使用法は、猩紅熱、肺炎の場合と同じ。(第一四〇頁及び一一〇頁参照)

**(五)** **白腫** は、結核菌の侵入に起因する慢性の炎症で、皮膚面に蒼白い腫脹を來すを以てこの名がある。本病には第七法の大力に據り、一導子を患部に、他は同じ側の鼠蹊部に接觸せしめて、これに熱濕布を施して、股動脈の活動を促し、輕快に向つたならば更に第三法の中力全身療法を、根氣よく反覆使用するがよい。

**(六)** **陰囊水腫** は、その局部に他導子を接觸せしめ、前と同様、第七法の大力に據り繰返し、熱濕布を熱心に併用するがよい。

**(七)** **靜脈腫** は、水腫とは全然無關係であるが、使用法は、**白腫(五)**に對するものと

全く同一で宜しい。本病に於ては特に便通に注意し、便秘するものには必ず灌腸を行はねばならない。發病當初に於て逸早く本器使用を開始すれば、從つて效を奏することも速かであるが、手遅れになると非常に回復しにくくなる。因に、本病者は長時間起立を續くることはよくない。

(八) 直腸内の靜脈腫(痔)及び陰囊内の靜脈腫に對する使用法は、よく便秘の條を精讀して應用せらるゝがよい。(第一二八頁參照)

### 一〇 肺炎、流行性感冒

肺炎 これも、一種の細菌によつて起る病氣で、麻疹、百日咳、流行性感冒、實扶的里亞、窒扶斯、感冒、氣管支加答兒等より併發し、又、吐瀉物飲食物等の誤嚥(食道に入るべきものを氣管に入れる)により起る場合もあつて、専ら榮養不良、抵抗薄弱なる小兒及び老人に多い病氣である。本病に罹ると、呼吸が促進し、胸部に鈍痛を感じ、高熱ありて咳嗽頻發し、粘液性の痰が盛に出るやうになる。その初期に於ては、脈搏急速となり、脈數は繼續的に増加し、往々百二三十に達することさへある。而して、胸部に耳を當てると

鋭い水泡音が聞かれるが、それは氣道の側面に粘着した粘液が、空氣の侵入によりて側面を分離する時に發する音なのである。

使用法(一) 本病に罹ると、肺部に充血を來すものであるから、第一に血液の循環をよくしなければならぬ。先づ灌腸を行ひ、兩脚を温め頭部を冷やした後、強力の使用法を以て一つの導子を足頸に、他導子を手頸に接觸せしめ、足部の導子の上に熱濕布を施し、一時間以上を經過したならば、導子を各々反對の手足に移し、又三四時間全身療法を行ふ。而して後、微温湯を以て胸部を拭ひ、更に手頸の導子を炎症ある局部に移し、その上から約半時間熱濕布を行ふ。但し熱濕布交換の際は、四五分間導子を取除いて冷濕布(第八九頁參照)を行ふがよい。斯の如くして、一回の使用を終へたならば二三時間休養して後、前回と同一の方法を繰返すのである。使用中は、屢々脈搏呼吸體温等の経過を考慮し、若し良好に赴かざる時は、更に肺の側面背部肩胛骨等に胸部の導子に移し、成るべく廣く局部全體を覆ふ丈の熱濕布を用ゐるがよい。かくて、體温殆んど平常に復し、すこしく輕快に赴いたならば、一日休養し、その後は朝夕三時間づゝ、中力又は弱力の全身療法を行ひ、尙夜間は終夜全身療法を行ふ。これを全快するまで繼續

し、全快後も尙第二法の強壯者の使用を怠つてはならぬのである。

(二) 使用中は常に幾分汗ばむものであるから、二三時間毎に微温湯で全身を拭はなければならぬ。又、悪寒を催す場合は、必ず腹部には熱湿布を施すがよい。食物は全快するまで強ひて攝らす必要なく、寢室は晝夜共に空氣の流通を良くし、酸素の不足したる病者には、十分新鮮な空氣を供給しなければならぬ。室内を開放して置くも、オキシヘーラー使用中は、毫も感冒に罹る虞れはないのみならず、空氣の流通よきは、本器の奏效を速かならしめる。

元來酸素療法たる本器の效驗は、酸素に不足せる本病の如きに對して、最も著しく現れる。即ち本器はその自然良能を喚起して、十分に酸素を吸収せしめると共に、本病の原因たる細菌を絶滅するに、著しい效果を有するものであるから、發病の當初に於て迅速に使用を開始すれば、容易に效を奏することは勿論、呼吸器に關するあらゆる疾病の再發を防ぐことが出来るのみならず、病後に有り勝の永き神經衰弱に苦しむやうなことはない。

**流行性感冒** 本病に對しては、大力或は強力を以て三四時間宛の全身療法を四時間置きに繰返すだけで十分である。若し反應なきときは足頸に當てたる導子の上より約一時間

餘熱湿布を施して發汗を促し、又、日々一二回づつ、三四十分位手頸の導子を、腸、肝臓、脊髄等の中央に交るく移し、これに熱湿布を施したならば、永くも二日位にて輕快するのが普通である。かくて激烈なる徵候を制止し得たときは、中力にて日々四五時間の全身療法を繰返し、全く健康が回復するまでこれを繼續すればよい。尙鼻かせ、咽喉かせ等の輕症の場合は、二導子を手頸足頸に、若し咳が出れば足頸の代りに、咽喉に一導子を著け原器は懷中、又は袂なりに入れて使用して居れば、決して病牀に就く程に至らず、日常の用務を果しつゝ、容易に回復せしめることが出来る。又、四五歳の子供にて牀に就くを嫌ふ如き輕微な感冒の場合は、一導子を咽喉に、他導子を腹部などの邪魔にならぬ所に著けて置き、原器は風呂敷に包みて背負はせ、或は腰に巾著の如く下げさせ、自由に遊ばせて置いても、必ず良好の経過を見るであらう。

一一 感冒、氣管支加答兒、肺結核

**感冒及び氣管支加答兒** は普通寒冷の候に流行するものゝやうに思はれてゐるが、實は寒暖のうつりかはりの季節に多い。温暖な季節にあつては、皮膚その他人體の器官が一般

に弛緩して抵抗力が減じてゐるところを、急に寒氣に襲はれるので、感冒となり、氣管支加答兒となるのである。而して此等の病氣には消化不良、便秘等を伴ふを常とする。古より感冒は萬病の基と云はれてゐるから、これを急速に制遏せざれば、思はぬ餘病を併發する。必ず輕卒にしてはならぬ。

**使用法** 便秘を伴ふ場合は、灌腸を施し、兩脚を温め、導子を著けたる手頸に或は足頸に熱濕布を施しつゝ、大力乃至強力の全身療法を行ふ。すると直に鼻孔の通りを良くして呼吸は次第々々に樂になり、約一時間の後は大抵發汗を催し、一夜で回復するのが常である。が、それでもなほ病勢衰へぬ時は、第六法に従ひ、一導子を足頸、他導子を胃部に接觸して、その上より再三熱濕布を施すがよい。然し、輕い感冒ならば力の全身療法を就寢中に一晚續け行へば、熱濕布を用ゐるに及ばない。

**氣管支加答兒** 前法と略々同様の使用法でよろしい。もし夫で十分の効果が無かつたならば、一日二回程他の導子を咽喉部に當て、その上から一時間位熱濕布を行ふ。又咳嗽頻發して止まない場合は、その背部に他導子を當て、一時間位熱濕布を行ふ。かくても尙咳の已まぬ時は、大力にて一導子を手頸なり足頸なりに、他導子を咽喉部に著け通して置け

ばよいのである。

**肺結核** 本病に於て發熱を伴はぬ場合には、第五法に據るがよい。本病の後期にありても、新鮮なる空氣と、十分なる滋養とを供給しつゝ、繼續的に根氣よく本器の使用を續けて、心臟の働きを鼓舞すれば、病勢を防止するに困難でない。衰弱甚だしく發熱を伴ふ病者にありては、先づ弱力を以て一時間の全身療法を行ひ、續いて中力にて胃腸の邊に兩導子を接觸し、その上より繰返し熱濕布を施すこと三十分間、然る後又兩導子を手頸足頸に移し、一時間の全身療法を行ふ。以上の療法を終つてから三時間休養し、更に弱力にて約三時間の全身療法を行ふ。斯て第一日の使用を終る。翌日も同じ順序方法にてその使用を續くる時は、漸次、身體の抵抗力を増加する。身體の抵抗力増加すると共に次第に原器の作用力を強め、使用時間を長くし、尙局所器官療法(第一八七頁參照)をも併せ行ひて辛抱強く本器を繰返し使用する時は、幾多の實驗の證明する如く、醫藥に見捨てられた難治の本病者も、その健康を回復するに難くない。いかなる病氣に對しても、オキシヘーラーは、一回に長時間使用するよりも、短時間の使用を反覆する方がより効果があるといふことを、常に記憶されたい。殊に衰弱し或は咯血を伴ふ本病者に、應用

する場合などには、當初成るべく弱き力から、追々強き力を使用することを忘れてはならないのである。

### 一一一 喘 息

**喘息** 本病は、迷走神経の刺激による發作性の氣管支筋の痙攣に起因し、呼吸困難、顔面蒼白、冷汗、咳嗽等の徴候を呈し、全治甚だ困難な病氣と稱せられてゐた。本病は氣候の變り目、或は氣壓の低き雨模様の時などには、時々發作して堪へ難き呼吸困難を訴へるが、何時もオキシヘーラーを使用すれば、呼吸を緩和し咳嗽を止め、苦痛を去らしめることが出来る。若し常に本器を愛用して措かざれば、細胞機能を活躍せしめ、氣管支の血管を鼓舞せしむるが故に、再發の患ひなからしめる。これ、いかなる慢性症でも、根氣よく撓まず本器を使用すれば、容易に健康を回復し、再發の患ひなからしむ。

**使用法** 第八法の大力に據りて、一導子を足頸に他導子を胸部に著けてその上より熱濕布二三時間を施して後、二三時間大力の全身療法を行ひ、又前の通り局所療法を繰返すのである。又時々胃腸、肝臟、腎臟等の各部に、他導子を接觸せしめ、三四十分間づゝ

交るゝ熱濕布を施して、各器官を鼓舞し、これが了つたならば、中力にて五六時間全身療法を行ふ。尙病の發作なき時も、常に第五法を用ゐて全身療法を行へば、漸次發作を見ざるに至るであらう。且つ使用中は成るべく空氣の流通をよくし、酒類及び煙草等は、絶対にこれを禁じなければならぬ。

### 一一三 肋 膜 炎

**肋膜炎** 本病は感冒から發することが多く、循環及代謝機能の障礙、又は胸部の打撲外傷乃至肺部に於ける病毒の侵入等がその主因である。殊に本病は壯年者に多く、壯年者の呼吸器病中、その六割は是であるといふ。要するに、本病は血中に酸素の飽和完からぬ爲め病毒を驅逐する作用、毒素に抵抗する作用が衰へたるに、原因するものであるから直接心臓の働きを強く正しくし、呼吸を深く大きくするオキシヘーラーの力は、本病に對しては、特に絶好の効果を示すことは、實驗例寄稿者の大半が、本病に關係したものであるを見ても知られる。實に肋膜炎の如きは、逸早く本器を使用すれば、必ず所期以上の奏效を見ることは明かである。然し本病者には、殆んど生活力を失つたやうな、極めて



つてゐれば、少しの過食にも忽ち胃腸は害されるのである。故に、心臓と凡ての疾患とは何れの場合にも密接の關係あることは争はれない。本病の如きは其の豫防にも、治療にも常にオキシヘーラーを使用して怠らざれば、容易にその目的を達することが出来る。

本病の特徴としては、消化不良、胃酸嘈雜、嘔心嘔吐、胃腸の膨滿疼痛、下痢又は便秘等であつて、動もすれば漫性に陥り、榮養は障碍されて神経衰弱を伴ひ、容易に癒え難いものであるが、オキシヘーラーは心臓の運動を強く正しくし、血液の循環を良好にして總體的に生活力を旺盛にし、局部的には、胃腸に蠕動作用を與へて、胃液の分泌を促し又便通を調へて、新陳代謝の機能を促進せしめるから、急性症の如きは三四回の大力使用にて、よくその効果を現はし漫性病と雖も、根氣よく繼續使用すれば、漸次榮養を回復することを得、尙、不治の疾患と看做されてゐる、胃癌、腸結核の既に進行せるものに至つても、急速にこれを回復せしむることは困難であつても、反覆使用して倦まざれば、この難治の疾病も遂には驅逐することが出来るのである。

●用法(一) 急性の場合は第七法の大力に據り、二導子を胃と腸とに當て、その上より腹部全體を覆ふに足る熱濕布を一時間乃至二時間行ひ、終つて大力の全身療法を一二時

間續行する。この方法を一日二回乃至三回繰返し、夜間就寢時は、翌朝まで中力の全身療法を施せば、何等藥物を用ゐずして、大概は二三日で回復することが出来る。

(二) 漫性症に對しては、如何に大力の使用を施すも、急速には反應を見難いことがあるから、第五法若しくは第六法により、胃腸の局所療法を一日一回施し、その他は専ら全身療法を行ひ、夜間就寢時は、一導子を手頸又は足頸に、他導子を胃なり腸なりに著けて、翌朝まで使用するも宜しい。この方法を怠らず熱心に繼續すれば、數年來の痼疾漫性も遂に本復せしめ得るであらう。

(三) 胃癌、腸結核には第七法を施し、慎重の態度にて倦まず撓まず熱心に使用せられたい。尙胃腸病には本器の愛用を續けると同時に、嚴に飲食の攝生を守り、又病狀に應じて、溫浴、冷水摩擦、適宜の運動等を勵行さるゝがよい。

### 一五 黄 疸

●黄疸 本病は、肝臓の膽汁分泌及び排泄に異狀を呈せる結果として生ずるもので、消化不良、胃腸加答兒、若しくは磷、水銀、甘汞等の中毒から來ることもあり、肝臓硬變、膽石

肝臓部の腫瘍等から來ることもある。又、時には熱性病より併發することもある。

●**使用法** 不治の腫瘍若くは回復すべからざる組織の破壊に起因するものでない以上、本病も亦本器使用に依て容易に回復し得らるゝであらう。使用法は第七法に據り、一導子を手頸又は足頸に、他導子を肝臓部に接觸して熱濕布を行ひ、尙引續き全身療法を施す。又、時々肝臓及び腸部を冷水を以て十分に摩擦し、且つ、清水を多量に飲用するの、頗る有効な方法である。

### 一六 膽石

●**膽石** 本病の原因は、石灰質多き飲食物、膽道内の凝血、膽囊及び膽道の加答兒性分泌物、膽積分解、美食、逸居等によつて膽囊内に生じた、膽石といふ固形物が輸膽管の中に入つて來るのにある。その徴候としては、膽囊部に起る錐で刺すやうな、激烈な發作性の疼痛及びこれに伴ふ惡心、嘔吐、腹筋痙攣、皮膚厥冷、苦貌、憔悴、寒戰、腓瘻、便中の膽石、膽囊部に於ける硬固物存在の感觸、黄疸、或は便秘、糞便の失色増臭、肝臓の腫脹をあげることが出来る。これは婦人に最も多い病氣である。而して膽石には、大小種々で

小さいのは砂粒程、大きいのは鵝鳥の卵位のがある。

●**使用法** (一) 本病を回復せんが爲めには、先づ本病の病因たる各種の障礙を除かねばならない。膽囊及び膽道の加答兒状態が、本病の主因である。その加答兒状態を除くには新陳代謝を盛ならしめねばならぬ。オキシヘーラーの作用は、要するに新陳代謝であるから、すべての加答兒状態に對しては、著しき效驗を示すものである。使用法は、第八法の大力に據り、一導子若くは二導子を肝臓上に接觸し、大なる熱濕布を施すこと、一日二三回乃至四五回に及び、撓まず使用を續くれば、その苦痛を緩和することが出来る。又時々一導子を手頸又は腹部に移著し、同時に深呼吸を行ひ、肝臓の働きを盛ならしむることが必要である。

(二) 食物は果物、野菜等を選び、純軟水を十分に飲用して、肝臓及び輸膽管を洗淨せしめ、常に便の快通を計ることは、最も必要である。

(三) 右肋骨の下端より右肩胛骨に互る背部の激痛は、輸膽管中に膽石の存在することを證據立てるものである。これを除くには膽囊上に兩導子を接觸し、熱濕布を施し、第八法を採用するがよい。第八法は、痛みの止まで、繰返し〜忍耐して幾日も反覆使用する



るときは、始めて緊縮せる筋肉を緩和し、次第々々に膽石を腸の方に送り出し、遂に大便と共に排出せしめる。尙一度排出されても、オキシヘーラーの使用を怠つてはならぬ。よく連用する時は遂に再發し易き本病を驅除し、全く健康を回復せしむるであらう。

### 一七 腹膜炎

**腹膜炎** には、急性と慢性との二種類ある。急性は主として化膿菌より發し、慢性は主として結核菌より發す。急性は發熱四十度に達することありて、腹痛、嘔吐、便秘、鼓腸、吃逆等を伴ひ、慢性は日哺潮熱して腹部膨滿し、處々硬結あつて漸次衰弱を來す。  
**使用法(一)** 急性症には第八法の大力を以て、一導子を足頸に他導子を腹部に著け、その導子の上より成るべく大なる熱濕布を施し、一回約一時間づつ、疲勞を感ぜざる時は二時間位一日に二三回行ひ、その間強力の全身療法をも施すがよい。若し腹部の疼痛甚だしく、患部に導子を當て難き場合もあらば、最初、大力の全身療法を施し、その時足部に熱濕布を行ひ、膨滿疼痛の稍軽減するを待ちて、前記の通り、腹部の局所療法を行ふもよし。

(二) 慢性症には、第七法を用ひて反覆使用すれば、榮養を進め抵抗を増し、遂に回復せしむるであらうが、慢性症になると、他の諸機能も隨つて非常に衰弱してゐるものであるから、餘程の熱心と忍耐とを以て使用せねばならぬ。熱心に使用を繼續さへすれば難治と云はれてゐる本病も、遂に回復することが出来るのである。

### 一八 盲腸炎

**盲腸炎** は腸部の右側下部にある大腸の起始部即ち盲腸に於ける炎症で、急性のものは激烈なる疼痛、嘔吐、高熱、發汗を來し、同時に患部に多少の腫脹を伴ふを以て、容易に知ることが出来る。また往々慢性盲腸炎あり、これは慢性炎症の反覆に起因し疼痛、腫脹衰弱等を伴ふのである。

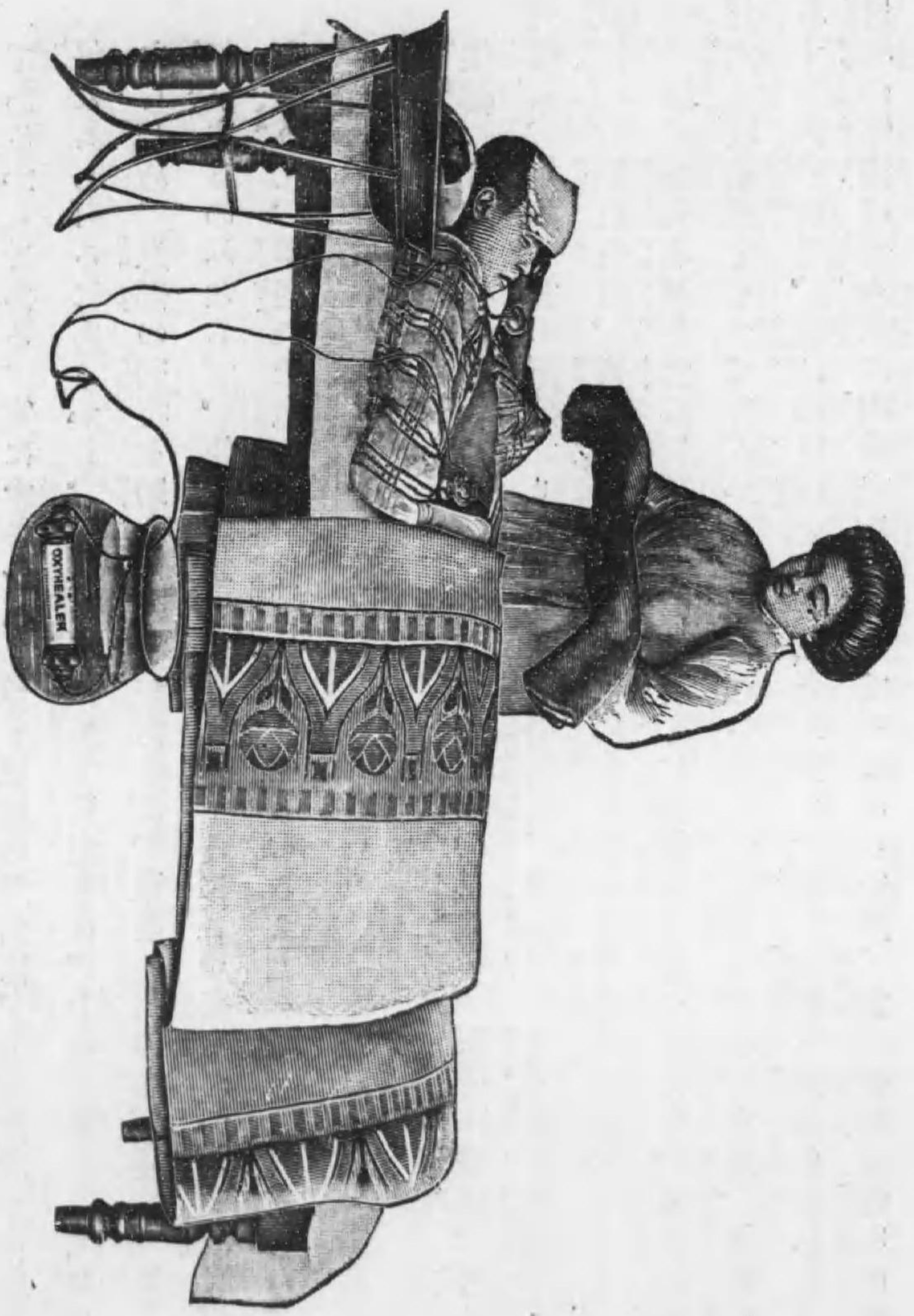
本病は主として盲腸内に停滯せる異物、特に硬い糞便の刺戟から起り、又、結核、潰瘍感冒、及びその近傍の炎症の結果として起ることもある。便秘並に不消化物の攝取は硬い糞便を形成せしむるものであるから、従つて盲腸炎の誘因となることが多い。

**使用法(一)** 本病の徴候を見た時は、第八法の大力により、速に使用を開始せねばなら

ぬ。直腸に停滞物がある時は、灌腸によりてこれを排出せしめなければならぬが、極めて初期の場合には、灌腸せずとも頓服下剤を以てすればよろしい。而して、使用中は兩脚を温め一導子を足頸に、他導子をその疼痛部に直接に接觸せしめて、成べく大なる熱湿布(腸の全部を覆ふと共に、右鼠蹊部の下方に及ぶ丈の大きさのもの)を施して疼痛の鎮静するまでは、再三再四繰返し〜て使用すれば、大凡一週間乃至十日間前後で軽快に向ふべく、次第に軽快に向つて来たならば、今度は器械を氷より上げてその力を弱め、第三法の中力によつて根氣よく繼續すれば、遂に病根を驅逐し去るのである。

(二) 發病以後一週間以内に化膿するといふことは極めて稀であるが、若し手後れの爲め化膿に至らしめた場合には、直に熟練な外科醫に就いて、切開して貫はねばならないが、然し、本器の作用は、よく病菌を撲滅し得るもの故、當初に於て逸早く熱心にこれを用ひさへすれば、切開せずしてよくその目的を達し得るのである。

(三) こゝに特に注意せねばならぬことは、本病の治療中は患部に冷湿布を用ひてはならぬといふことである。本器使用中を中止してゐる間に於ける冷湿布は、此限りでないがその使用中に於ける冷湿布は局所を麻痺せしめ、血液循環の回復機能を阻碍するもの



第十九圖 盲腸炎局所療法の圖  
 一導子を盲腸の疼痛部附近に接觸し(他導子を手頸に)其上より暖く熱湿布を施さんとす

であるからである。實にオキシヘーラー使用の目的は、遅緩澀滯せる血液の循環を良好ならしむるにあるから、熱濕布後に施す冷濕布は、その反動として血液循環を佳良ならしめ、患部の回復を助くるの效があるが、單なる冷濕布使用は、寧ろ本器の目的に相反するのみならず、使用者却て苦痛を感ずるによつてもわかる。故に慎重にその眞偽を試みて、手後れなきやう、速に回復せしむることを計らねばならぬ。

### 一九 便秘

**便秘** は不消化性食物、收斂性飲食物、膽汁分泌減少、腸管の痙攣、若くは痙攣、腫瘍、佝僂病、妊娠子宮の壓迫、ヒステリー、脊髓病、腸管の狭窄或は閉塞等より起る。その原因の七割五分は、直接間接に拘らず、腸内に於ける有毒物の停滯であり、堆積である。多量の鹽化石灰を含んだ硬水、鐵管若くは鉛管中に滯つてゐて、多少の鐵又は鉛を含んだ水は收斂性をもつてゐるから便秘を起させること多く、茶、珈琲、酒精の如き收斂性を有する飲料物は、便秘の誘因となることが多い。若し人體を蒸氣汽罐にたとふれば、その廢物の停滯は恰も灰に相當すると云つてもよろしい位、常習便秘は體中の燃焼作用を閉塞

して、いろいろの疾病を醸す原因となるから、注意してこれを除去しなければならぬ。便秘から來る疾病の中、最も著しいものは痔疾である。痔疾は直腸に於ける痔靜脈の充血に伴ふもので、便秘の常習の無い人は、殆んどこの病氣に罹ることは無いのである。凡て便秘者は、常に皮膚蒼白く、呼吸に惡臭を伴ふのは、腸内に發生する腐敗瓦斯が血液に混じて肺臓に送られ、又、氣孔を通じて排泄せらるゝからである。

**使用法(一)** 便秘に使用するには、第七法の大力に據り、一導子を足頸に他の導子を右肋骨の下端なる肝臓の上に接觸せしめて熱濕布を施すのである。而して使用中熱濕布をとりかへる度毎に、必ず導子を除いて、そこに四五分間冷濕布を施すか、(第八六頁参照)冷水で拭ふかして後、再び導子を元の通りにつけ、又熱濕布を用ゐて、再三同方法を繰返せば、奏效が速かであらう。

(二) 局所使用中、時々肝臓の上につけた導子を、肝臓と腸との血行を司る神經中樞の基點たる脊髓部の中央、腰部等にも移して熱濕布を施すがよい。

(三) 尙第五法の全身療法をも併せ行ふ時は、血液中の有毒物を除去して、全身の生活機能を敏活ならしむるに著しい效がある。若し輕症者ならば、本法の全身療法のみ

據つても、十分效を奏することが出来るであらう。  
オキシヘーラーは、直接に腸の蠕動を活潑ならしむるが故に、もし熱心に本器使用を續ける時は、如何なる便秘勝の人も、數週を出ずして何等藥劑を要しないで、軟便を快通せしめ、遂に年來の痼疾も忘れたやうに根絶することが出来る。

### 二〇 痔 疾

**痔疾** 本病は、腫瘍又は腸壁に於ける血液の循環を妨ぐる、他の疾病に起因することも無いでは無いが、前述の如く主として便秘から起るものである。便秘即ち便の停滞は、腸壁に於ける靜脈血の循環を妨げて靜脈を怒張せしめ、腸壁は爲めに腫脹と共に炎症を起し、往々破裂して所謂痔の出血を來す。かくして、痔疾を患ふるものは直腸の内面に突起物を生ずるを常とする。激しくいきむか、下劑を用ゐるかして、硬い便を無理に押出す時、この突起物が肛門の括約筋を通じて脱下する時には、多大の苦痛を感じる。  
**使用法(一)** 前項の便秘使用法に同じ、便秘さへ絶やすことが出来れば、痔疾は従つて自ら去り苦痛を感せぬであらう。而して幾分重き人は、便秘の治療法を行ふと同時に

一面直腸部即ち肛門に局所療法を施し、そこに再三熱濕布を用ゐるがよい。

(二) 若し重症の場合は便通毎に、石鹼を以て肛門を洗滌し、少量のワセリンを塗布しおく。若し脱肛した時は、徐々に原位置に復し、肛門に脱脂綿を當て、堅く下帶を締めて置けばよす。

(三) 食物は果物、野菜、牛乳、その他脂肪質に富むものを攝り、成るべく軟便を計るに勉めるがよい。酒類、茶、珈琲等の刺激物收斂性は前述の如く、便秘を助成する虞れがあるから、成るべく禁止した方がよいのである。

### 二一 耳 下 腺 炎

**耳下腺炎** 本病は一種の病原不明の接觸傳染病であるが、主として幼兒及び少年を冒し易い疾病である。その症状は耳下腺部腫脹して疼痛甚しく、嚥下困難となり、體温は三十九度以上に昇りて、顎下腺腫及び舌下腺腫、口内炎若くは咽喉加答兒等を併發することがある。俗に「お多福風邪」といふはこれである。

**使用法(一)** 第七法に據り、一導子を足頸に、他導子を炎症の局部に接觸して、その上

圖 十 二 第

圖るたし用使を子導用喉咽



れた酸素は、本病の病源たる細菌を撲滅する、偉大の效力を有するが故に、初期に於て本器を用ゐれば、義膜が形成せられぬ。義膜が既に形成されんとした場合には、温湯或は食鹽水を與へて嘔吐を催させ、嘔吐によつて自然義膜を離剝させるやうにするがよい。また屢々含嗽吸入を行ひ、休養中咽喉部に冷濕布を施すの

(一) 本病に於けるオキシヘーラーの局所療法は、危険なる義膜を除去し、その吸収された酸素は、本病の病源たる細菌を撲滅する、偉大の效力を有するが故に、初期に於て本器を用ゐれば、義膜が形成せられぬ。義膜が既に形成されんとした場合には、温湯或は食鹽水を與へて嘔吐を催させ、嘔吐によつて自然義膜を離剝させるやうにするがよい。また屢々含嗽吸入を行ひ、休養中咽喉部に冷濕布を施すの

(二) 本病に於けるオキシヘーラーの局所療法は、危険なる義膜を除去し、その吸収された酸素は、本病の病源たる細菌を撲滅する、偉大の效力を有するが故に、初期に於て本器を用ゐれば、義膜が形成せられぬ。義膜が既に形成されんとした場合には、温湯或は食鹽水を與へて嘔吐を催させ、嘔吐によつて自然義膜を離剝させるやうにするがよい。また屢々含嗽吸入を行ひ、休養中咽喉部に冷濕布を施すの

に熱濕布を施し、一回三十分位づゝ一日二三回使用する。且つ腫脹及び疼痛の全然絶ゆるまでは、朝夕二三時間づゝの中方全身療法をも施すがよい。

(二) 本病は、動もすれば卵巢炎、副睪丸炎等を併發することがある。その徴候を見出した時は、第七法に據り、その箇所に數回の局所療法を施して怠らざれば、併發症も從つて全快されるであらう。

一 二 一 實扶的里亞、格魯布、百日咳、扁桃腺炎、

喉頭炎、其他各種咽喉の炎症

實扶的里亞は、實扶的里亞細菌の感染から起る病氣で、春秋二季の候に流行し、専ら小兒に多い。發病の當初は惡寒發熱を來し、咽喉部殊に扁桃腺の粘膜に灰白色の斑點を生じ、遂に所謂義膜を形成し、咽喉の炎症、乾燥、顎下腺の腫脹を來し、聲が嘎れ、犬が吠えるやうな咳が続けて出、更に嘔吐を催し、呼吸が困難になり、そのまゝに捨て置く時は、遂に窒息して死に至ると云ふ、頗る危険な病氣である。

使用法(一) 本病の徴候が見えた時は、一刻の猶豫なく何を措いても、オキシヘーラー

も、良好の補助療法である。(咽喉用導子は第二一八頁参照)

(三) 本器使用中病人に多量の冷水又は氷の小塊を與へ、或は流動性の食物を攝らしめるは差支ないが、消化し難き食物や刺戟性の飲料物は、一切與へてはならない。

(四) 病人が激しく下痢を催す場合には、三時間毎に冷水或は微温湯を以て灌腸を行ひ又、若し脈搏が衰へ、悪寒を催した場合には、兩導子を左右の横腹に著けて、その上より一面に熱濕布を施さねばならない。

(五) 本器使用の際、實扶的里亞血清を注射するも敢て妨げないが、オキシヘーラーがその危険を豫防し、生理上の調節を全からしむるに於て、何者にもまさる效驗を有することは、その萎靡した細胞を喚起し、切迫した呼吸を安靜にする程、心臓の運動が刻々に強く正しくなるのを見ても、亦過去幾多の實例に徴しても明かであらう。

格魯布、扁桃腺炎、喉頭炎 前記實扶的里亞に於けると同様の方法を以て使用するとき、大事に到らずして、安全に制退せらる。而も扁桃腺炎の如き、動もすれば切開するが甚だ取返しのかぬ輕擧である。本器さへ熱心に使用すれば容易に制止すべきものであるから、切開などして、却て後患を貽すやうのことは避けねばならぬ。

百日咳 これも前記實扶的里亞の使用法と同一で宜しい。唯本病に於ては、局所の氣管支の處に他導子を接觸するのである。が、本病はその名の示す如く、極めて頑固な疾病であるから、輕快後も第三法を用ひ、再發の虞れないやうに勉めねばならぬ。本病も難治の一として、從來適法なきが如く思はれたが、本器を使用すると、見る内に呼吸が樂になり深大になりて、漸次咳嗽の減ずるを見ただけでも、如何に效驗の的確なるかと判るであらう。なほ小兒には小兒の適法(第七六頁)を參酌せられよ。

二二三 虎列刺、小兒虎列刺、霍亂、下痢、赤痢

虎列刺及び赤痢 は主として、傳染により、その細菌が體內に侵入するに原因する。而して、飲食の不攝生とか、不良の飲料水とか、寒冒とか、凡て腸加答兒を誘起するものも是等が媒介となるのであるが、結局、平素胃腸の弱き人の罹り易き病氣に過ぎぬ。

使用法(一) 虎列刺、赤痢、霍亂その他急激性の腸の病氣には、一導子を足頸に、他導子を腹部に接觸せしめ、その腹部全體に成るべく廣く熱濕布を施し、大力を以て約一時間の使用をなしたる後、今度は腹の導子を手頸に移し、同じく大力を以て約二時間全身

療法を行ふ。以上の使用が了つたならば、二三時間休養し、更に前法を繰返し、激烈な徴候がなくなるまでは、それを幾度でも反覆すれば、大抵一晝夜で病勢を制退することができやう。尙腹部に使用中は、十分毎に熱湿布をとりかへるとき即ちその交換の都度必ず導子を取除きて、其處の皮膚を冷水にて拭ひ、以て血管を鼓舞し反動を促すことが必要である。以上の方法によつて、激烈な徴候が減退した時は、尙中力を以て一日四五時間づゝの全身療法を繼續しなればならない。

(二) 以上の疾病に對しては、看護婦は常に體溫、脈搏及び一般容態に注意し、使用二三時間に及んでなほ身體が温まらぬ時は、一盞の葡萄酒、又は數滴のブランデーを水に混ぜたものを飲ませ、同時に腹部に絶えず熱湿布を施し、又足部は湯タンポを以て温め體溫稍騰りたる後は、尙前法の本器使用を續け用ゐるがよい。

斯くして尙嘔吐及び下痢が、一時に遇まないときは、大力の全身療法或は局所療法を交るゝ繼續使用するがよい。一度衰弱した胃腸の障礙は、急には除き難い場合もあるから氣永に徐に、前法を繰返し使用して、その經過を待たなければならぬ。その下痢に對しては、屢々温湯の灌腸を施せば、炎症を著しく緩和せしめる。

(三) この種の病人には、絶対に肉食をさせてはならない。卵子の黄味、蜜柑水その他多少の酸味を帯びた果汁に、相當の水分を混ぜたものなどを飲ませ置き、すこし輕快に向つた時粥汁を與へる位がよい。若し腸の排泄物に酸敗的臭氣を帯びてゐる時は、特に少量の牛乳を與ふるがよい。

(四) 排泄物は、殊に嚴重に法規を守り、消毒を行はねば傳染の危険がある。故に十二分の注意を拂はねばならぬことは、凡ての傳染病皆然りである。尙、以上の病氣にして小兒の場合は、小兒の適法(第七六頁)を参照せられよ。

## 二四 腸窒扶斯、バラ窒扶斯、黄熱、マラリヤ熱

其他一般に發疹を伴はない熱性病

### 腸窒扶斯

本病は、病原菌を含める飲食物、殊に飲料水より傳染するものであると云ふ

から、その點にさへ十分に注意すれば、豫防もさまで困難ではない。この病氣の病菌に冒されても、最初の中は何等の異状もないが、大凡二週間後に至ると、倦怠、頭痛、食慾不振、睡眠不安等の前驅症を呈し、ついで惡寒、發熱、口内の乾燥、便秘若くは下痢等の徴

候を呈する。而して發病第一週の初め五六日は、日々體温が徐々に昇つて、遂に三十九度乃至四十一度に達し、二週或は三週の後より弛緩し始め、輕症は三週、重症は四五週間で常温に復するを常とする。本病に對しても、オキシヘーラーの效果は殊に著しい。

**使用法(一)** 病者の脚部を温め、頭部を冷やすやうにし、大力を以て全身療法を行ひ發汗するに至るまで足部に、繰返し繰返し熱濕布を施す。かくて三時間も続け用ゐたならば四時間位休むといふ風に、何回も繰返し反覆し、その激烈なる徴候の減退するまで使用し減退後は中力を用ゐて、健康の全く回復するまで怠らず使用するがよい。

**(二)** 發病當初に於て逸早くオキシヘーラーを使用すれば、遅くも一週間で殆んど離脱することは、既に幾多の實驗上誤らざる所であるが、尙ほ熱が退かず、病勢衰へぬ場合は、病者は避くべからざる窒室扶斯の攻撃を覺悟し、益々反覆使用しなければならぬ然し、本器に信賴して、よくこれを用ゐて捲まず、且攝生を怠らざれば、安全に難關を通過し得るであらう。

**(三)** 使用中、手頸の導子を時々下腹部に移動して熱濕布を施す時は、下腹部の疼痛を凌ぐことが出来る。かく下腹部の疼痛が幾分緩和されたならば、又手頸に移して撓まず

全身療法を續行するがよい。以上の使用にて十分に發汗があつた時は、微温湯又は冷水を以てその身體を拭ひ、後乾いた手拭で、更にその濕氣を拭ひ去る。又病者が堪へ得るならば、柔い手拭で脊髓をこすると、心氣を興奮し爽快を感じる。又大力の全身療法の場合には、腹部には冷濕布(第八六頁参照)を施すことは肝要である。又毎夜一回灌腸を施す時は、最も良い経過を見ることが出来るであらう。

**(四)** 熱が退いて來ても、なほ根氣よくオキシヘーラーの使用を繼續し、體力が十分に回復し、榮養が完全に吸収し得るまでやめてはならぬ。健康が稍常時に回復した時には第三法の全身療法を怠らず行ふがよい。

**(五)** 食物は専ら牛乳、ソップ、粥汁、卵黄、果汁等の流動物を用ゐ、固形物は絶対に禁じなければならぬ。又、病人に食欲が無い時、強ひて與へても、その食物は消化されず、腹中にあつて腐敗醱酵して、却て害をなすものであるから、注意せねばならぬ。まして、腸室扶斯の如き急性病には、饑餓の危険を伴ふ虞れは無いのであるから、決して無理に食物を與ふる必要はない。

**パラ窒室扶斯** これも腸室扶斯と同じやうに細菌の侵入による傳染病であるが、腸室扶斯



に比すれば、大に輕症にして、その経過も大抵二三週間で癒えるが、攝生を怠る時は、腸出血膿症等を起すことがあるから、注意せねばならぬ。故にこれに對するオキシヘーラーの使用法は、腸室扶斯の項に説いた所に據れば間違がない。

**●黄熱** 本病の激烈なる期間に於ては、強力或は大力の使用を要する。一導子を足頸に他導子を腹部に著け、熱濕布をも用ゐて、二三時間使用し、時々、腹部の導子を脾臓部と肝臓部とに移して、同じく熱濕布を施し、餘病の併發を豫防するがよい。激烈なる徴候が減退せる後は、第三法の全身療法を行ふがよい。黄熱は、往々肝臓を冒すことがある故に一日一二回強力を用ゐて、殊に肝臓部に熱濕布を施す必要がある。

**●マラリア熱** 前療法に同じ、この他、すべて非發疹性熱病の使用は、腸室扶斯と略々同様の使用法で、専ら腹部、肝臓部等に局所療法を施して、後は出來得る限り、大力の全身療法を行ふことは、各器官を鼓舞するに最も有效である。

## 二五 猩紅熱、麻疹、痘瘡其他一般に發疹を伴ふ熱性病

以下の病氣は皆、細菌の傳染によるもので、發疹及び發熱を伴ふを常とする。而してそ

の細菌は、概ね接觸によりて傳染するものと云はれてゐる。

**●猩紅熱** 専ら、抵抗力弱き幼兒に起る病氣で、殊に二歳乃至三四歳の小兒を冒す。その發病の初期には惡寒、發熱、嘔吐、咽頭痛、頭痛等の徴候を呈し、幼兒にあつては、時に痙攣を發する。斯くて約二十四時間にして紅色の發疹が頭部、胸部、四肢等に現れ、それが次第々々に全身に及ぼして鮮黄色に變り、遂に身體一杯に蔓つて紅斑となる。その狀は麻疹とよく似てゐるが、麻疹は傳染後三四日經つてから發疹し、その發疹に平行せずして新月狀の群をなし、先づ顔面に始まつて漸次に軀幹や四肢に及び、又著しく加答兒の症狀を呈して噴嚏を伴ひ、目鼻から分泌物を出し、顔面に腫脹を來たすことがあるが、猩紅熱は傳染後二日で發疹し、約一週間に形跡を沒して、漸く表皮が剝げはじめ、五週乃至八週に互ることがある。また痘瘡は初め頭部及び顔面、ついで軀幹四肢等に發疹し三四日の後水泡に變じ、六七日經つと膿疱となり、遂に所謂痘瘡となり、打ち捨て置くと、それがあばたになつて終生癒えざる斑痕を残すのである。

**●使用法(一)** 病者に灌腸を施し、兩脚を温め、第五法により中力を以て全身療法を行ひ、發疹及び發熱のひき去るまで使用を續ける。

(二) この際、發疹は直には止まないが、熱のさがると共に次第に消失する。發疹が急に減ずるのは、却つて衰弱を來す前兆であるから、發疹前は強力を用ゐるとも、發疹後は直ちに中力乃至弱力に弱め、發疹は自然に止まるを待つがよい。

(三) 使用中に悪寒を催す時は、胃部又は腸部に熱濕布を施すがよい。熱度あまり高く昇る虞のある時は使用を中止し、高熱を發しなくなるのを待つて再び使用するがよい。又下痢の激しい時は、冷水灌腸をすれば解熱を容易ならしむべく、或は病者が渴を訴ふる時は、時々氷片を與へても差支ない。又表皮の剝離期には、酒類又は稀薄の錯酸類を以て朝夕二回づゝ身體を拭へば、癢痒を防ぐことが出来るが、この場合には弱力の全身療法を繼續使用することは大切である。

(四) 使用の時機を失つて腎臓炎らしい徴候を見た場合には、その炎症が退くまで強力を以て一導子を手頸なり足頸なりに、他の導子を腎臓部に接觸して、腎臓の方には最も強き熱濕布を再三施し、一時も早くその炎症を去らしめねばならぬ。

(五) 食物は、牛乳、ソップ、粥汁、卵黄、果汁の如き消化し易きものを選び、消化し難き固形物は、一切用ゐてはならない。

(六) 本病は、無理に發疹を抑へてはならない。順當なる發疹は、寧ろ喜ぶべき現象として、これを促進する方がよい。故に發疹前は大力乃至強力を用ゐ、全く發疹し終つた後には(二)に述べた如く、中力乃至弱力にして使用するがよい。本病は傳染の恐れあれば、使用中の消毒には十分注意せねばならぬ。

麻疹、痘瘡の如き疾病にも、上記と同様の使用法を用ゐればよいが、平素虚弱の人は餘病を併發する恐があるから、十分に注意して豫め局所器官療法(第一八七頁参照)を時々行ふことは肝腎である。

### 二六 皮膚病

●皮膚病 一口に皮膚病と云つても、その種類頗る多く、形態症狀も様々で、或は一部を限つて發生するものもあれば、或は全身を覆ふものもあるが、概して血液の變化に起因するものである。皮膚病は、その種類によつて原因を異にするが、感冒、寄生物(動植物)若くは或種類の藥劑乃至飲食物の攝取、又は消化不良、肝臓病、腎臓病、便秘、梅毒等は、その原因の主なるものである。

**使用法(一)** 皮膚病を驅除せんとするには、先づその病源を探究し、消化不良より來たものなれば胃腸に、腎臓の故障より來たものなれば腎臓といふが如く、その病因に應じて、その患部に、局所療法を施さなければならぬが、同時に、各種の皮膚病を通じて第五法をも熱心に行ふがよい。

**(二)** 使用中、發疹却て擴大し、且つ酸化作用増加の結果として、皮膚に輕微な炎症を來すことが多い。この場合には、堪へ得る程の熱湯で皮膚を拭ひ、更に重曹水(飯茶碗一杯に重曹一匙位の割合)で拭き去り、その迹にワセリンを塗布しておくがよい。若し炎症が餘り激烈になつた時は、三四日間使用を中止し、ある期間を過ぎて後再び開始するがよい。皮膚病の種類により、數日で回復するものもあり、數週を要するものもあり或は數箇月の永きを要するものもあるが、飽まで本器に信賴して辛抱強く使用を續けらるゝがよい。前に謂へるが如く、皮膚病は要するに、血液の變化によりて生じ、血液の變化は有毒物の侵入に基づくものである。その有毒物を驅逐するには、酸化作用を盛にするより外なく、酸化作用を盛にするのは、本器の特色とするところで、且つ最も奏效著しきものであるから、本器使用を續けると共に、食物、入浴、便通等に對しても十分

に注意を拂へば、奏效を一層迅速的確にすることができらる。

遺傳性皮膚病の主因たる梅毒の如き、全身病、濕疹、蕁麻疹、鱗屑疹、帶狀皰行疹等及び發熱を伴はざる各種の發疹、瘰癧若くは小膿疱等にも、以上の使用法を施せばよい是等のうちの或物に於ては速效を見ることの困難なるものもあるが、本器の作用はその疾病の病源を驅逐する效を有するから、持續して用ゐるうちには、必ずその効果を擧げ得ることは疑ひない。

### 二七 丹 毒

**丹毒** 本病の原因は、丹毒連鎖球菌と稱する細菌が、皮膚或は粘膜の損傷部より侵入するにあつて、その徴候としては、俄に惡寒を感じ、體溫四十度内外に昇り、頭痛、倦怠、食慾不振、惡心、嘔吐等を來し、その皮膚損傷部の周圍には、紅斑を呈して、灼熱、疼痛腫脹を呈し、又往々水泡を生ずることあり。而して、その紅斑は頗る蔓延性強く、早きは一日二十仙米突以上も蔓り、耳腔内、鼻腔内にも及ぶ。かくて、その重症にありては餘病を併發し、遂に死に到らしむることも稀ではない。

●**使用法(一)** 輕症者は第五法の全身療法に據り、重症者は第七法に據り、一導子を足頸に他導子を胃腸、肝臟等の器官に交るべく接觸してその上より熱濕布を施し、常に血管を鼓舞してその衰弱を防衛し、若し顔面及び頭部の場合には、その患部に他導子を著くその上より熱濕布を施し、約三十分使用の後は全身療法を行ひつゝ、患部に冷濕布を施す。且つ補助法として灌腸を行ふことも必要である。而して、皮膚病の場合と同じく、使用後にはその局所にワセリンを塗布して置けばよい。本病はこれを等閑に附する時は、實に生命に關する疾病であるから、一度これに冒された時は、一意オキシヘーラーに信賴して、倦まず大力使用と共に、熱濕布を用ゐらるゝがよい。熱心に本器を使用さるれば、死の轉歸を免れ得ることは、幾多の實驗例を見ても明かであらう。

## 二八 癩 病

●**癩病** 本病は、癩病菌といふ一種の細菌に起因する所の、最も怖るべき病氣である。斑紋癩、結節癩等の種類があつて、斑紋癩は顔面、臀部、四肢等に赤色の斑點を生じ、結節癩は結節を生ずる。而して、やがて斑結節の吸収、消散、或は結節の崩潰を來し、遂には

視力喪失、神經痛、癩痺癩、切斷癩となつて、悲惨な状態に陥るのである。本病は古來天刑病と稱せられ、絶對不治の病として怖れられてゐるが、然し、老朽の細胞に代る新細胞の發生を盛にするオキシヘーラーの効力は、よく本病にも及んで、永く使用する時は、これを回復せしむるに難くはないのである。

●**使用法** 中力全身療法約二時間を朝夕各一回づゝ行ひ、而して足頸の導子には熱濕布を二時間前後施し、又日々一回一時間づゝ、強力を以て脊髓、肝臟、脾臟及び直腸上に、交るべく三十分間位熱濕布を行ひ、これを一週間繼續すれば、一週間休養するといふやうに、かく反覆して數週若くは數箇月に及び輕快を覺えたる時は、漸次使用力と使用時間とを減縮して、殆んど繼續的に使用するがよい。決して悲觀すべきものでない

## 二九 脚 氣

●**脚氣** は一種の神經炎であるが、その原因は未だ明かにされてゐない。或は自家中毒となし、或は一種の傳染的な細菌に因るものとなし、或は青魚科の魚肉中毒となし、或は榮養の障礙即ち食物中の含窒素物と、含炭素物との配合不適當によるものとなすなど、諸

説區々である。然し、その原因が何れにあるにせよ、本病が一種の神経炎であることは確かであるから、本病には、前の神経炎の條下に説いた使用法を、その儘に用ゐれば宜しいかくて、本器の使用と休養とを交互に反覆して、二三週間續くる時は、必ず輕快に向うであらう。尙その徴候に應じ、從來各病下に説き來つた、使用法を參照して適當に採用せらるゝがよい。殊に便秘とは大關係があるもの故、便秘使用法を施して先づこれを制する時は本病の回復は甚しく促進せらるゝであらう。(便秘第一二八頁、神経炎第一〇三頁參照)

### 三〇 腦溢血、腦充血、腦貧血、日射病

**腦溢血** 本病は一種の遺傳關係とも云はれてゐて、居常酒を嗜む人、餘り肥え過ぎた人即ち心臟機能の弱められて居る人に起り易い疾病である。身體に脂肪の蓄積が多くなると血管の内膜も同様脂肪變性を來して、非常に脆くなる結果、少々血壓が強くなると、それに堪へられないで、遂にその血管が破裂する。その破裂する處は、専ら腦の貴重部に多いそれが強い時には卒中と云つて、直に一命を失ひ、輕さも半身不隨症即ち中氣となり最も危険なる病氣である。この恐るべき疾病を豫防せんとするには、先づ第一に心臟の運動を

強く正しくして、血液の循環を良好にし、新陳代謝を盛にして血管の抵抗を強め、且つ血壓の徒らに亢進するを防がねばならぬ。この目的に於てオキシヘーラーの最も有效なる事實は、本器の脈搏血壓を順調ならしむる一事に依つて、既に明白であるから、少しにてもこの病因の存するかに思はれる人は、常に本器を愛用して怠らざれば、恐るべき災害を未然に防ぐのみならず、他の疾病も豫防することが出来る。

**使用法** 不幸にしてこの電擊的發作の起つた場合は、直に第八法を應用し、原器を碎氷中に入れて最大力とし、一導子を後頭部に、他導子を腹部に當て、腹部にだけ熱濕布を施す。この熱濕布を意識の回復するまで續行しつゝ、同時に灌腸を施して排便を計るも急場の一策である。意識回復せる後は、三時間程強力の全身療法を行ひ、終つて又前の局所療法を施す。この方法を熱心に繰返へせば、死の轉歸から免かれ得やうが、中にはそのまゝ半身不隨となつて、所謂中風症となるものも多い。斯る場合は前述の局所療法を日に一回一時間位づゝ行ひ、その他は専ら全身療法と、胃腸の局所療法とを交るゝに施し、氣永に使用して倦まざれば、不治と云はれたこの難症も、遂に回春の喜びを得ることは、幾多の實驗例に見るが如くである。

**腦充血** 本病もその原因を心臓に有す。一時性のものは、精神の興奮、暴飲等に依つて起り、持久性のものは、大動脈瓣閉鎖不全、萎縮腎、神経衰弱等から起る。病状は顔部に充血して、耳鳴り眩暈を呈し、急劇のものは卒倒して人事不省となる。

**使用法** 大體腦溢血と同様でよろしい。急劇に發作せる場合には、頭部を高くして静かに臥せしめ、頭部には始終氷嚢をあて、冷やし、且つ灌腸を行つて便通の整理を計れば、本器の奏效を一層速かならしめるであらう。

**腦貧血** 本病も一時性のものと、急性のものどあつて、同じく心臓の不整衰弱に原因す平素心臓の運動が強く正しき人は、是等の疾患に冒されることは絶へてない。その急性のものは腦充血と同様卒倒するが、腦充血は顔面赤く充血するに反し、腦貧血は顔面蒼白く額部に冷汗を生ずる。尙持久性のものは宛然神経衰弱症の如き觀を呈し、顔色常に蒼白く時々眩暈して動悸亢ぶり、耳鳴りして全體倦怠し生活力が非常に消耗するものである

**使用法** これも腦溢血と同様にして、後頭部に當てたる導子の上より、熱濕布を施すがよい。卒倒せる時は、半身を高くして頭部を低く仰臥せしめ、頭部を温めつ、注意深く本器を使用すれば、間もなく意識を回復し得るであらう。

**日射病** 夏の最盛りに炎天に照りつけられながら歩行するとか、仕事をして居るとかの場合、強烈なる熱射の爲めに起る病である。

**使用法** 先づ氷塊を以て頭部を冷しつゝ、第八法を用ゐ、原器を碎氷中に投じて最大力となし、一導子を後頭部に他導子を腹部に當て、その上より熱濕布を施せば、間もなく意識を回復せしめるであらう。意識の回復した後も、數時間大力の全身療法を續け静かに仰臥して居れば、格別の衰弱を見ずして、容易に本復するであらう。

### 三三 腦性、脊髓性、及び末梢性痲痺

**痲痺** 痲痺には運動痲痺と、知覺痲痺（一般知覺及び特殊感覺）との二種があり、又冒されたる部分により、腦性痲痺、脊髓性痲痺、末梢性痲痺等に區別される。痲痺はすべて神経系疾患の一徵候として現はるゝところの病症である。

**腦性痲痺** とは、例へば卒中に於けるが如く、或は腦髓中の出血、或は血管閉塞の結果腦内の或る一部に血液の供給が杜絶する爲め、又は腦の外傷、腦内腫瘍の壓迫等の爲めにその血行を妨げられて起るものである。

**脊髓性麻痺** は、**脊髓**若くはその被膜の充血或は炎症、**脊髓**の腫脹、乃至**脊髓**に於ける細菌或は滲出毒素の侵入、又は骨折等から起る。

**末梢性麻痺** は感冒、外傷、中毒及び壓迫等に起因する。感冒より来る麻痺には顔面神経麻痺多く、中毒による麻痺は鉛、砒素及水銀等の中毒から来るものが多い。壓迫による麻痺とは肱枕して眠つた時などに起る上肢の麻痺、長時間正坐した場合の下肢の麻痺等の如きものである。又梅毒及び實扶的里亞の如きも、毒素を分泌して麻痺を來すことがある。

**使用法(一)** 麻痺は、斯くいろいろの原因から起るものであるから、これを回復するには先づ第一に、その原因が何れにあるかを確かめ、それに應じて使用法を講じなければならぬ。而して例へばそれが卒中若くは脳髓内の血塊に起因せる脳麻痺ならば、**腦溢血**(第一四八頁)の條下に於て示せる如き局所療法を施し、同時に第五法の全身療法を施すべく、尙ほ又時々マッサージを行つて、血液の循環を均等ならしめ、滲出物の吸収を促して、本器の作用を助けるやうにすれば、一層速效を見ることが出来る。

**(二)** 脊髓に起因する麻痺は、第五法に據り使用すると同時に、強力を以て一日二回づつ、一導子を足頸に他導子を脊髓に當て、その上より熱濕布を施し、尙胃腸は勿論時々

麻痺せる四肢に他導子を移し、熱濕布を施した後は、必ずその局所を摩擦して、血液の循環を促すやうにすれば、自と回復期を早めることが出来る。

**(三)** 以上の使用法を續くる時は、次第に血液の循環を促し、體質上の變化を矯正し醫藥の方からは、殆んど絶望と看做された麻痺病者をも、よく榮養を回復して、漸次快方に向はしめることが出来るから、細心の注意と、不斷の忍耐とを以て、本器の使用を續けると同時に運動及び攝生にも勉め、且つ腎臟、腸及び皮膚等に於ける排出作用にも障礙なからしむるやうに、よく注意を拂はねばならぬ。

**(四)** 顔面神経麻痺及びその他の末梢性麻痺に對しては、第七法に據り、強力の局所療法を施すがよい。然し顔面に長く熱濕布を施すと、顔面神経の場合と同じく、眼球に充血を來す恐れがあるから、一時間を超えざる程度に行ひ、然る後、後頸部に時には胃腸にも局所療法を施せば、一層速效を認むるであらう。

**(五)** 脊髓の壓迫及び骨折等より来る麻痺は、整形外科醫の手術を受けねばならぬこと勿論であるが、それと共に、本器を熱心に使用する時は、諸機能の活躍を促し、血行をよくして、その経過を最も速かに良好ならしめることが出来る。

### 三二 小兒麻痺、脊髓炎、腦脊髓膜炎

**急性脊髓性小兒麻痺** 本病はその範圍の廣狹を問はず、脊髓灰白質前部の炎症に起因する病氣で、小兒特に幼兒を冒し、大人を冒すことは稀である。本症は運動機能の障礙（麻痺）を來すが、知覺には異狀を呈することは無い。而して炎症の原因は、一種の細菌の侵入にあるもの、如く、多くは夏期に流行し、發作は極めて激烈神速で、惡寒、發熱、發汗頭痛、咽痛、口渴、頸部筋肉の強直及び脊髓部の疼痛等の徴候をあらはし、その急性なるものにあつては、僅か一二日のうちに生命を奪はれることあり、急性ならざるも病勢が衰へなければ、數日を出でずして危篤に陥る。而して、この病氣は必ず麻痺を伴ひ、麻痺は初め全身を冒すが、遂には四肢、或は一部の筋肉に固定して、その筋肉は收縮性を失ひ冒された四肢は、發育が止まり、運動不隨となり、一命丈はとりとめても、生涯不治の不具者となることを免れ得ないであらう。

**使用法(一)** 本病は、病勢の進行急劇なる故、發病するや直に、一刻の猶豫なく使用を開始しなければならぬ。使用宜しきを得ば、一日二日で熱が退く。使用法は、第七法の

大力を使用し、一導子を足頸に、他導子を脊髓の上部より腰部に至る各所に、約三十分毎に、順次に導子を移動しつつ、その上より怠らず熱濕布を併用するがよい。

**(二)** 前法の使用を終つた後は、大力にて全身療法を行ひ、その年齢に應じ(小兒なれば)使用後三四時間の休養をなして後、尙高熱の去らざるときは、その減退するまで幾度も幾度も前法を反覆使用するがよい。而して解熱の徴候の顯れた時は、第三法に従ひ全身療法を行へば、全然不具になるやうな懼れはない。

**慢性小兒麻痺** 本病は、運動神經の麻痺、筋肉の萎縮變形を伴ふに至るもので、これも容易の病氣ではない。本病を回復するには、數週乃至數箇月間、倦まず撓まず反覆持續し同時に榮養にも甚大の注意を拂はねばならぬ。

**使用法(一)** 第五法に據り、足頸の導子に熱濕布を施す。又時々、他導子を冒されたる四肢の各部に移し、強力の熱濕布を施し、患部の血液循環を促進しなければならぬ。又脊髓の上下、肝臓、腎臓、胃及び腸等の各部にも、時々他導子を移動して熱濕布併用の局所療法を施し、然る後、補助法として是等麻痺性には、時々マツサージを行ひ、血行を盛ならしむることも肝要である。



(二) 使用中は、時々灌腸を施し、兩便の快通を計ること、その他十分攝生に注意を拂ふことを怠つてはならぬ。勿論、何れの疾病にも同様であるが、小児には殊更に缺くべからざる要件であるのである。

**脊髓炎及脊髓膜炎** 脊髓炎は脊髓の炎症であり、脊髓膜炎は脊髓を圍繞する脊髓膜の炎症である。共に、悪寒、發熱、脊髓上部より下部に互る疼痛、背部筋肉の緊張感覺等の徴候を示す。その徴候は脊髓に於ける患部の位置によりて、その症状を異にするが、屢々膀胱若くは直腸の括約筋がその作用を失ふに至ることがある。

**使用法** 本病の療法は、全然小兒麻痺の使用法と同一で宜しい。發病當初、時機を失はず直に本器を使用すれば、奏效速かであるが、時機を失つては慢性になり、數週乃至數箇月の使用を要するに至るであらう。

**腦脊髓膜炎** 本病は悪寒、發熱、發汗、腰部腹部に於ける疼痛(神經痛に似た)等を來し、また頸部の筋肉が緊張短縮し、往々顔面に發疹を生じ、漸次全身に互ることがある主として小兒乃至壯年の者を冒す。

**使用法** 本病の徴候を見たならば、一刻の猶豫もなく、直に灌腸をなし、温湯で兩脚

を温め、頭部に冷濕布を施して後、第七法に據り、全身若くは疼痛のある局所に三十分前後の熱濕布を行つた後は、更に他導子を脊髓の上下に移して、又二三十分間前と同様の熱濕布を施したならば、使用後は必ず脊髓部を冷水で摩擦する。以上の使用法は、熱度の下降するまで、再三再四反覆して行ふべく、その輕快するを俟つて、第三法の全身療法を繼續使用すれば、必ず全快を得らるゝであらう。

### 三三三 骨膜炎

**骨膜炎** 主として膿膿細菌の傳染或は外傷、腺病又は微毒等より來る。急性にあつては高熱に伴ふ患部の劇痛腫脹等、一見骨髄炎の症状と同様で、遂に化膿破壊して慢性となり、如何なる方法を施すも、一弛一張、容易に癒え難きものである。然るにオキシヘーラーは、吸酸除炭の作用を盛にし、全體の細胞を活躍せしむるから、忽ちその炎症を去つて激痛を緩和し、慢性の場合は、漸次生活力を増進し、榮養を回復して、抵抗力を盛にし、遂に再發の患ひなからしむるであらう。

**使用法** 劇症の場合は、原器を碎氷中に入れて大力となし、二導子共患部に當てゝその

上より強烈なる熱濕布を施すこと二時間、終つて二三時間大力の全身療法を施す。この方法を日に二三回乃至四五回、繰返し、忍耐と熱心とを以て數日間續行すれば、漸次劇痛を去り炎症發熱も減ずるであらう。然る上は、使用の時間と力とを調節し、時々胃腸等に局所療法を行ひ、榮養を回復して後は、第三法の全身療法を持續して倦まざれば、この難病をも必ず容易に制遏して、再發の憂ひなからしむるであらう。

### 三四 骨髓炎

**骨髓炎** 本病の原因は、主として黄色膿膿葡萄狀菌の傳染に因り、その骨髓に達する徑路は、皮膚呼吸、消化器等より血中に進入するものである。一骨若くは數骨に謂ふべからざる劇痛を發し、發熱時は四十度以上に昇り、惡寒戰慄を伴ひ譫語等を發するに至る假令、その劇烈なる症候去るも、殆んど皆慢性痼疾となりて遂には腐骨疽となり、甚だしきは一種の不具状態に陥るものもある。本病の輕症なるものは、氷罨法若くは溫罨法を施し、劇烈なるものにあつては、患部を切開し槌と鑿とを以て骨を切開し排膿を計るのが一般の療法であるが、オキシヘーラーに據れば、この戰慄すべき手術を施す必要がない。こ

れ心臓なる血行器の働きを強く正しくして、血液の循環を良好にする本器の作用は、よくこの劇症を緩和して局部の炎症劇痛を去らしむることが出来る。若し初期に於て速に本器を適用すれば、決して腐骨疽等を殘すことなくして、一二週間で全快する。

**使用法** 大體は前項の骨膜炎の使用法に準じ、第八法の最大力を以て、不屈不撓、熱心繼續使用すれば、遂に全快を期することが出来る。

### 三五 敗血膿毒症、尿毒症、産褥熱

**敗血膿毒症** 本病は、創傷若くは炎症部より侵入せる分裂菌に起因し、又、その分裂菌の産出する毒素より起る。故に、本病はそれ等の細菌乃至毒素を撲滅し、若くは驅除しなければならぬのであるが、前にも述べたやうに、本器は、體內に多量の酸素を吸収せしめ酸化作用を盛ならしむることによつて、よくこれ等の細菌や毒素を除く特效を有してゐる。少くとも本器を使用すると、新陳代謝が盛に行はるゝ故に新しき細胞の發生を助け、古き細胞の退化を促すに由つて、本病の如き不治と云はれつゝある難病に對しても、本器使用ほど著しい效驗を示すものは、決して他に無いのである。

**●●●●● 使用法** 分裂菌侵入の疑ひある時は、直に過酸化水素、若くは稀薄な石炭酸溶液（3% 乃至4%）を以て創口を洗ひ、然る後、第八法的大力に據り、創口の上若くはその附近に導子を接觸し、成るべくその周圍を覆ふだけの大きな熱濕布を當て、約二時間使用した後は、導子を手頸足頸に移して二三時間大力の全身療法を行ひ、終つて又前法の局所療法を施して、反覆使用せば、漸次、炎症を去りて、幾分輕快を感ずるに至る。かくて確實なる回復の徴候を認めたまは、第三法の全身療法を用ゐるがよい。

**●●●●● 尿毒症** 腎臓の作用が鈍つて、尿の分泌に故障を生ずる時は、尿の成分は血液の中に停滞して、専ら神経系及び消化器にその症状を現はし、頭痛眩暈、悪心嘔吐等ありて癲癇様發作をなし、人事不省に陥ることがある。

**●●●●● 使用法(一)** 尿毒症の使用は、第八法に據り、一導子は脊髄の下部に、他導子は腹部に接觸して、大力の熱濕布を施し、約二時間以上使用して後大力の全身療法を行ひ、三四時間の後再び前の局所療法を行ふといふ如く、十二時間乃至二十四時間、右の使用法を反覆繰返す。かくて熱度減退し、且つ危険の徴候がなくなつた時は、強力の全身療法を施し、愈々回復の見込がついたならば、第三法の全身療法を用ゐるがよい。

**(二)** 尿毒症も、敗血膿毒症も、概して激烈なる頭痛、精神錯亂、及び嘔吐を伴ふを常とするが、それ等の場合には成るべく強き力と、熱濕布を完全に熱心に施し、且つオキシヘーラー使用中は、その全身は毛布を以てよく温まる程に包み、頭部は水を以て冷し又灌腸によりて腸内を洗滌し、且つ十分に清水を與ふる等の手當てを盡せば、危険の病勢をも阻止することが出来る。

**●●●●● 産褥熱** は、主として分娩後の衛生の不行届に起因し、動もすれば産婦の生命を奪ふところの甚だ危険な病氣であるが、速かに本器を用ゐれば、大事に及ばずして回復に向ふことは、本器の使用が早ければ早い程、その生活力が減損せざる故、回復することもまた従つて容易である。

**●●●●● 使用法(一)** 惡露排泄の止むまで、善良な防腐劑を以て患部を洗滌し、第七法に據り大力を以て全身療法を行ふ。若し、病者が甚だしく衰弱を呈する場合は、二時間の使用と二時間の休養とを交互になす必要があるが、病者にしてその使用に堪へ得る以上、更にその使用時間を延ばしても差支ない。なほ病者がそれに堪へ得るならば、手頸の導子を下腹部に移し、そこに三十分間以上の熱濕布を施せば、一層効果が早い。

(二) 以上の使用法を二三日間反覆繼續して、較々輕快に向つて來たならば、朝夕二回づつ、各三四時間、強力の全身療法を施し、更に回復の度が加はるに隨つて、次第に使用力を輕減し、その使用時間を短縮するがよい。

(三) 若し産婦が便秘して發熱などの烈しき場合は、假令オキシヘーラー使用中と雖も直ちに灌腸を施して後、使用を繼續し、尙、斯る時は便秘の項(第二二八頁)を参照して、注意深く本器を使用せられたい。

(四) 産褥熱の病者は、決して嬰兒に觸れしめることなく、絶對に哺乳を廢さねばならぬ。嬰兒には榮養を十分に攝らしめて、オキシヘーラーの一導子を足頸に、他導子を腹につけて、一時間位弱力の療法を毎日二回位行へば、母子とも心配なく健全に育つことが出来る。

### 三六 腎臟炎、その他の腎臟疾患

**腎臟炎** 本病に罹ると、まづ最初は惡寒、發熱、嘔吐等の徵候があらはれ、尿は著しくその量を減じ、暗黒色若くは血色を帯び來り、多量の蛋白質をその中に含有して、病者は

全身に水腫を來すを常とする。本病は、感冒、過勞、便秘、或は酒類、茶、珈琲、煙草等の濫用に原因し、又、麻疹、實扶的里亞、丹毒、腸窒扶斯、猩紅熱の如き急性病に併發若くはそれ等の諸病に續發することが多い。

本病には、急性と慢性とあり。いづれも治療困難な病氣で、その重症に對しては、未だこれに適應する藥劑が発見せられず、唯、自然の回復を待つに過ぎなかつたのであるが本器出づるに及び、本病にも好成绩を示して居ることは、極めて巧妙に新陳代謝を促進することが、容易であるが爲めである。これ從來幾多の實驗例を見ても明かであらう。

**使用法(一)** 急性腎臟炎にありては、先づ第七法の大力に據り、一導子を足頸に他導子を腎臟部に接觸し、その上より熱濕布を繰返し、施し、その炎症輕減するまで行ふのである。かくて炎症輕減したならば、第五法の全身療法を用ふ。

(二) 食物は軟かな、消化し易い物を選ばなければならぬ。牛乳は滋養分に富み、利尿劑としても效のあるもの故、多量に攝取するがよい。酒類、茶、珈琲等の刺戟性のものは一切これを禁じ、尙身體を温かに安靜に保つことが必要である。

**慢性腎臟炎** も尿量減少し、又、顔面が蒼白くなり、精力が衰へ、且つ肝臟、腸、心臟